The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語動詞における意味の抽象化過程の研究 : 補助動詞用法を持つ動詞の意味分析
Author(s)	由井, 紀久子
Citation	大阪大学文学部紀要. 1997, 37, p. 1-152
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8227
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語動詞における意味の抽象化過程の研究(補注4)

——補助動詞用法を持つ動詞の意味分析——

由　井　紀久子

目　次

序　章

0.0 はじめに ……6

0.1 日本語動詞の抽象化過程研究の意義 ……6

0.2 認知言語学についての概観 ……8

0.3 本論文の構成……10

第1章　方法論についての先行論文

1.0 はじめに……11

1.1 Jackendoff の概念意味論 ……11

1.1.1 Jackendoff の概念意味論の概観 ……11

1.1.2 Jackendoff (1983) における存在論的カテゴリー ……12

1.1.3 受給動詞の概念意味論的分析……12

1.1.3.1 単純用法……13

1.1.3.1.1 視点に関する制約……13

1.1.3.1.2 受給動詞の意味……13

1.1.3.1.3 受給動詞の含意と同義性……16

1.1.3.2 補助動詞用法……19

1.1.3.2.1 恩恵の受給……20

1.1.3.2.2 emotional deixis 体系における受給補助動詞……22
1.2 問題提起——概念意味論の問題点——……24

第2章　意味の孤立系と文脈からの干渉
2.0 はじめに……27
2.1 意味分析の前提……27
2.1.1 文法化現象の意味論的分析について……28
2.2 意味の各説……30
2.2.1 オグデンとリチャーズ（1953邦訳）『意味の意味』……30
2.2.2 ユージン・ナイダ（1975）の成分分析……32
2.2.3 國廣哲弥（1982等）の意義素分析……33
2.2.4 ブラグマン等のネットワーク・アプローチによる多義語分析……35
2.3 本稿の立場……36
2.3.1 孤立系の意味……36
2.3.2 文脈からの干渉による意味の拡張……37
2.4 さいごに……39

第3章　動詞ヤル・クレル・モラウにおける意味の抽象化過程
3.0 はじめに……41
3.1 動詞ヤルの意味分析……42
3.1.1 ヤルの用法……42
3.2.1 ヤルの意味……44
3.2 動詞クレルの意味分析……45
3.2.1 クレルの用法……45
3.2.2 クレルの意味……48
3.3 動詞モラウの意味分析……48
3.3.1 孤立系の意味成分……48
3.3.2 本動詞モラウの用法と意味……49
3.3.3 補助動詞の意味……52
3.3.4 統合的分析……54
3.3.5 類義表現の検討……55
3.4 受給動詞の運用……57
3.4.1 蔑みのクレル……57

3.4.2 遜りの（サ）セテモラウ……60
3.4.3 む す び……66
3.5 抽象化過程についての考察……67
3.6 お わ り に……67

第4章　動詞イク・クルにおける意味の抽象化過程
4.0 は じ め に……70
4.1 分 析 方 法……70
4.2 動詞イクの意味分析……71
4.2.1 本動詞用法イクの意味……72
4.2.2 補助動詞用法～テイクの意味……76
4.2.3 統合的分析……79
4.3 動詞クルの意味分析……79
4.3.1 本動詞用法クルの意味……80
4.3.2 補助動詞用法～テクルの意味……83
4.3.3 統合的分析……86
4.4 日本語動詞における意味の抽象化過程……87
4.5 む す び……89

第5章　動詞イル・アルにおける意味の抽象化過程
5.0 は じ め に……91
5.1 本動詞イルとアルの意味分析……91
5.1.1 孤立系の意味……91
5.1.2 本動詞用法の意味……91
5.2 補助動詞の意味……95
5.3 む す び……97

第6章　動詞オク・シマウにおける意味の抽象化過程
6.0 は じ め に……99
6.1 オクの意味の抽象化過程……99
6.1.1 孤立系オクの意味……99
6.1.2 本動詞用法オクの意味……100
6.1.3 複合動詞用法オクの意味……102

6.1.4 補助動詞オクの意味 ……102
6.1.5 統合的意味分析 ……105
6.1.6 む す び ……107
6.2 動詞シマウの意味の抽象化過程 ……108
6.2.0 は じ め に ……108
6.2.1 孤立系シマウの意味 ……108
6.2.2 本動詞シマウの意味 ……108
6.2.3 補助動詞（テ）シマウの意味 ……110
6.2.4 統合的分析 ……112
6.2.5 む す び ……114

第7章　動詞ミルにおける意味の抽象化過程
7.0 は じ め に ……116
7.1 本動詞ミルの用法と意味 ……116
7.1.1 ミルの用法 ……116
7.1.2 ミルの意味 ……116
7.2 補助動詞～テミルの用法と意味 ……120
7.2.1 ～テミルの用法 ……120
7.3 統合的分析 ……121
7.4 む す び ……122

第8章　意味の抽象化過程――総括――
8.0 は じ め に ……123
8.1 動詞における意味の抽象化概観 ……123
8.2 意味成分と意味の抽象化 ……126
8.3 無標と意味の抽象化 ……128
8.4 「抽象」と意味の抽象化 ……129
8.5 む す び ……130

終　章　日本語教育学への展開――概念体系習得の問題――
9.0 は じ め に ……131
9.1 旧統治領南洋群島での日本語教育 ……132
9.2 デ ー タ ……133

9.2.1 ヤップ公学校における戦前の日本語教育とヤップ州での日本語 ……133
9.2.2 インフォーマント ……133
9.3 訂正過程の記述 ……134
9.3.1 訂正過程の開始段階 ……134
9.3.2 訂正過程の中段階 ……134
9.3.3 訂正過程の終結段階 ……135
9.4 考　　察 ……138
9.4.1 学習者のタイプとの関係 ……138
9.4.2 言語習得段階との関係 ……139
9.5 む　す　び ……140
補　　注 ……142

序　　章

0.0 はじめに

本稿は「日本語動詞における意味の抽象化過程の研究――補助動詞用法を持つ動詞の意味分析――」と題し，補助動詞用法を持つ動詞の意味を本動詞の意味からの何らかの転化とみなして考察し，当該動詞による概念化の問題を考察することを目指している。

日本語補助動詞は，～テヤル・～テクレル・～テモラウ・～テイク・～テクル・～テイル・～テアル・～テオク・～テシマウ・～テミルが代表的である。これらの動詞は本動詞としての用法も持ち，本動詞は補助動詞よりも基本的な意味を内包している。また，本動詞の中にも中心的な意味と周縁的な意味が存在するが，～テ形に接続して補助動詞となると，本動詞の意味の面影を残しながらも，動詞本来の意味から離れ，文法的にそれぞれのふるまいを有するようになり，より文法的な語になる。意味論的に言うと，「本動詞の意味が抽象化した」とか「本来の意味が弱まった」あるいは「薄くなった」という言い方がされる。では「意味の抽象化」とは意味論的に一体どういうことなのであろうか。また，それは一般的な「抽象」，すなわち，アナロガスなものが共通にもっている形式を考えるという意味での「抽象」とはどのような関係にあるのだろうか。後者の問題は本論の中で考察するとして，前者の「意味の抽象化」については，本稿で扱う対象であるので，ここでまず，定義をしておきたい。本論文で扱う「動詞の意味の抽象化」とは，本動詞が基本的に持っている意味から転化し，本動詞の意味のある側面を残しつつ，変容していく変化のことをいう。本稿ではこの意味の変化過程を扱い，抽象化の過程を明らかにすることを目指している。

0.1 日本語動詞の抽象化過程研究の意義

では，まず，なぜ日本語動詞における意味の抽象化過程を扱うかを述べたい。例えば，日本語母語話者が外国語である英語を学習する際，「～に対して」や「～のために」の *for* が節の頭に来るとなぜ理由を表わすのか，あるいは「～以来」の *since* が節の頭に来るとやはり理由を表わすのはなぜなのだろうかという疑問が湧くことがある。同じように，「しかし」の *but* が「～だけ」をも表わすのはなぜなのだろうかと思う。動詞においても，「持つ」の *have* が「家族が何人いる」というときに現れたり，いわゆる完了を表わすときに，*have*＋完了形で現れたりするのに接すると，*have* は「手に持つ」を表わすのみならず，所有も表わし得る

語であり，文法化した用法も有する語であることに気付いていく。*Have* によってなされる「概念化」が習得されていくわけである。非日本語母語話者が日本語を学習する際も，同様の疑問が湧くことがあるだろう。初級段階で学習する本動詞や補助動詞の基本的用法の一部は母語との関連で理解しやすいかもしれないが，様々な用法を学習していくにしたがって母語とは違う概念体系を習得しなければならず，習得の過程では文法についてのみならず概念体系についても仮説を立てながらの試行錯誤が繰り返されるであろう。例えば，非日本語母語話者が日本語を学習する際，「先生が教えてくれた／くださったから知っています」と言うべきところを，「先生が教えたから知っています」など，補助動詞を使いこなせない事例がよくある。１つの理由として考えられるのは，日本語のクレルによって概念化される世界の認識のしかたが習得できていないということである。第２言語習得研究にとって概念化の習得を考えることは大切である。本論文の目的の１つは，第２言語としての日本語習得に役に立つ日本語動詞の概念体系を提供することである。文法項目として教えられている補助動詞用法に意味論的な情報を加えることによって，学習者の理解が助けられることが期待できる。

また，意味論の研究上，抽象化の過程を考察することによって，語の意味の内部構造が解明されることが期待できる。意味の記述法には大別して「外在的」な記述法と「内在的」な記述法がある（Nida 1975)。外在的な意味の研究は，共起関係・代入の可能性・対立などの観点から，文脈の中で単語がどのように使われるかを研究する立場である。一方，内在的な意味の研究は，ある言語単位がどのようにしてある意味を表わすのに用いられるかを予測するような概念構造を，対照と比較を主軸とする手順で扱う研究である。本稿は補助動詞用法を持つ動詞がどのような意味構造を内在させているかに焦点があるので，この区別でいえば内在的研究に該当する。しかし，従来の補助動詞研究が文法の問題として扱われてきたこともあり，外在的な方法による成果も否定しないで取り入れていくつもりである。

また，本稿では分析方法，記述方法にも工夫をこらしているので，意味記述一般への貢献も期待したい。アメリカの言語学者ケネス・パイクは音声的 (phonetic) と音素的 (phonemic) から phon- を除いて「エティック」と「イーミック」という語をつくりだし，これらの概念を音声研究のみならず言語や文化の研究へ適用できる一般理論として組み上げていった（吉田 1984)。エティックとは音声記号が弁別的素性で決められているように外側から見ることができるような，予め決められている絶対的単位によるものであり，イーミックとは音素のように内側からの分析過程で決定される相対的な単位によるものである。日本語教育学は非日本語母語話者の日本語習得を考える立場であり，エティックな視点が必要になってくる。もちろん，音声記号は限られた数の弁別的対立によって規定されるので，普遍的研究の単位になりやすい性質を本来的に有しているが，意味は普遍的な単位を見いだすのはまだまだ困難な段階である。しかし，本研究は一つの試みとして，エティックな見地からの意味研究を

目指しており，普遍的意味研究に貢献できるようになることを期待している。

動詞の意味の抽象化過程の研究は，ある動詞によって概念化される世界を記述していくことになる。語の意味は文脈の影響を受けて変化し得るものであり，意味構造の研究は完結した静態的，共時的構造を求めても，変化や生成力を説明できない。記述に当たってはダイナミズムも考慮に入れた方法を取らなければならない。本稿では分析の基盤を近年注目されつつある認知言語学においている。次節では認知言語学についての概観を述べてみたい。

0.2 認知言語学についての概観

近年認知言語学の名のもとに研究されている対象は数も多く，幅も広い。認知言語学で括られる研究はまだ一定の方向に向かっているとは言い難い。認知言語学が扱っている範囲は幅が広いが，しかしながら，共通基盤となるものはもっている。例えば，INTERNATIONAL COGNITIVE LINGUISTICS ASSOCIATION の1995年度学会大会の発表募集パンフレットには次のように記述がある。

（1） 認知言語学の目的とスコープ

共通基盤：言語は文化的・心理学的・コミュニカティブ的・機能的研究の相互作用を反映する認知の不可欠な部分であるという考え方。また，それは概念化やメンタルプロセッシングの現実的な検分というコンテクストでのみ理解されるものである。

トピック：自然言語範疇の構造的特質
(プロトティピカリティ・メタファー・メンタル像・認知モデル等)
言語的組織の機能的原則（類像性や自然さ等）
統語論と意味論間のインターフェイス
運用言語の経験的・運用論的背景
言語と思考の関係など　　(訳は筆者)

上の記述を見て分かるとおり，認知言語学が基盤としてもっているのは，言語は認知を反映しており，それだけでの自律した体系としては分析しないということである。言語を自律した体系とは単純に割り切らないで，常に人間の認知，経験等を鑑みながら分析していく立場を取るのである。また，認知の仕組を解いていくのも認知言語学が目指す方向の一つである。本稿で扱う「意味の抽象化過程」は概念化やメンタル・プロセシングとも関わる構造的特質および認知操作を検討するものである。

エティックな言語研究について言えば，認知言語学はバーリンとケイに代表される色彩語

彙・民族ごとに異なる時間や空間認識・親族名称・「匹」や「本」などの類別詞等の構造分析を研究対象にした認識人類学とも関わりが深く，大きな影響を受けている。認識人類学はこれらのテーマのもと，人類文化の普遍と相対を念頭に分析を行なっている。もちろん，サピア・ウォーフに代表される言語相対主義について，強い仮説すなわち，「言語が思考を規定する」という考え方を認知言語学者がにわかに信じているわけではない。言語相対主義の議論でしばしば採り上げられるエスキモー語の雪についての豊かな語彙は，アメリカ人が車の名前をよく知っていることとや学者が専門分野の用語を豊富に知っていることにも通じる現象だとして，慎重な立場を採ることも多い（Lakoff: 1987)。しかし，だからといって言語相対主義を完全に否定しているわけでもない。例えばレイコフらのメタファー研究は，言語によってメタファーの基盤になるものが異なることを示している。例えば，西メキシコのオトマング語の１つであるカルカトンゴ・ミステク語においては，空間的に相対的な位置は，「その石はテーブルの下にある」といいたい場合「石，その，位置している，腹－テーブル」といった具合に，身体の部分を表わす語を対象にメタファー的に投影することを通して理解されるという（Lakoff: 同書)。この投影は全体的で体系的であるという。認知言語学もまた人類言語の普遍と相対を考慮に入れられる言語理論なのである。したがって，エティックな観点からの研究にも寄与することが多いと思われる。

認識言語学的に分析することに対して，「主観的」分析であり，科学的実証力に乏しいという批判が寄せられることがある。しかし，主観と客観の対立は，カントの考えるところの，世界を成立させる主観は人間の認識能力であり，この主観によって支配される客観とみなされるという，近代的な主観－客観の構図が完成されたものといわれる。言語は人間の認識と不可分の体系であり，言語研究は，むしろ，主観を排除しない認識をも含んだ研究方法こそ必要とされると思われる。

終章でも触れる第２言語習得（Second Language Acquisition＝SLA）研究との関係で認知言語学を捉らえてみると，ＳＬＡの分野でも近年，認知に対する注目が高まってきている。ＳＬＡのジャーナルでも特集が組まれることもある。ＳＬＡ現象の説明として，「規則」「原則」「ストラテジー」という用語が使われているが，これらはどの認知メカニズムによるかということに基づいた，学習者の行動の抽象的な性格であるといえよう。認知のメカニズムとして採り上げられているテーマには，解釈・概念化・フィルター・分節性（articulators)・モニター・定式化（formulators)・オーガナイザーなどがある。また，プロセスの問題として，単純化・ピジン化・一般化・母語化・自然発生的／管理的操作などがしばしば採り上げられている。本研究は意味の抽象化過程を目指すものであるが，終章でも採り上げるように，将来的にはＳＬＡ研究分野における認知言語学の応用を目指している。ＳＬＡ研究では多数の均質データから帰納的に結果を導き出してもなお，問題が解決されないまま，残ることが多

い。ＳＬＡ研究ではむしろ，地道なケーススタディの積み重ねが効力を発揮すると思われる。その際，やはり人間の異言語間での認知に主眼におくことが肝要かと思われる。

0.3　本論文の構成

では，本論に進むに先立ち，本論文の構成を提示しておきたい。

続く第１章では，研究方法である分析の枠組みについて，対比的に概念意味論を検討し，問題点を出す。第２章では本論で用いるアプローチの検討を行なう。第３章から第７章までは，補助動詞用法を持つ動詞の意味分析をそれぞれ行なう。第８章で動詞の意味の抽象化過程について総括を行なう。終章では概念化の問題を第２言語習得研究へと展開させ，今後の展望を示し，論を終える。

では，次の第１章において，研究の枠組みについての検討と問題提起を行なうことにする。

第1章　方法論についての先行研究

1.0　はじめに

序章で述べたように，本稿では，認知言語学を基盤において日本語動詞における意味の抽象化過程を分析していく。個々の動詞の意味分析に先立ち，本稿で用いる分析・訂正方法に関して検討を試みたい。分析対象となる個々の動詞の先行研究等の問題点は第3章から第7章までの，各動詞の分析のところで扱うことにする。分析方法を検討するために，やはり認識を考慮に入れた言語理論である，Jackendoff の「概念意味論」と呼ばれる言語理論をまず，とりあげ，その問題点をみることによって，本稿の立場を明らかにしたい。

近年「認知言語学」との名称の言語理論が徐々にではあるが脚光を浴びつつある。認知言語学で括られている研究は幅が広く，それぞれの研究者の意味論と統語論との関係付け方や語用論の位置付け方など，基本理念には相違が見られることも多い。しかし，認知言語学においては，言語の捉らえる基本的な方法として言語産出や解釈主体である人間の精神をも考慮に入れる点では一致していると言えよう。

まず，概念意味論での具体的な分析に先立ち，その概説から始めたい。

1.1　Jackendoff の概念意味論

1.1.1　Jackendoff の概念意味論の概観

Jackendoff (1983) の *Semantics and Cognition* では，言語の意味について，人間の言語で，知覚したり行為をすることについて話すことができるといったような「意味の本質は何か」という言語学的あるいは言語哲学的な見方，知覚や認識の本質について明らかにする「自然言語の文法構造は何か」という心理学的な見方の両方をとりいれ，分析している。

Katz and Fodor (1963) 以来，意味と表層構造の写像関係を記述することが意味論の目的の一つとなった。Katz and Fodor は，意味は言語記述のフォーマル・レベルで表わされるべきだとし，統語構造と区別することを提唱した。彼等が semantic representation と呼んでいるものを Jackendoff (1983) では semantic structure と呼んでいる。そして統語構造と結びつける規則で projection rules と呼んでいたものを新たに corresponding rules とし，統語構造と意味構造を対応させている。これは Jackendoff (1983) の意味理論が生成文法から出発しており，意味部門は統語部門と音声部門とは独立した構造をもつという考え方が路襲されているからでもある。

また，心的表出のレベルとして，言語体系外の conceptual structure を提唱し，言語外の情報，例えばにおいや視覚などの情報を言語にのせる「認知制約」を設けている。

Jackendoff の意味理論は上のような基本理念に基づいているのだが，この *Semantics and Cognition* の後半には統語構造との関連では述べられておらず，意味記述が重視されている。本稿は意味論的レベルに絞って考察しているので統語構造との写像までは考えない。

1.1.2 Jackendoff (1983) における存在論的カテゴリー

Jackendoff (1983) では概念構造の基本として，存在論的カテゴリーを提出している。言語は視覚世界の投影であるとの考え方による。[THING] [PLACE] [DIRECTION] [ACTION] [EVENT] [MANNER] [AMOUNT] および [PATH] のカテゴリーを wh- 疑問から導いている。

(1) a. What did you buy? [THING]
b. Where is my coat? [PLACE]
c. Where did they go? [DIRECTION]
d. What did you do? [ACTION]
e. What happened next? [EVENT]
f. How did you cook the eggs? [MANNER]
g. How long was the fish? [AMOUNT]

これらのカテゴリーをもとに概念構造を記述するのだが，例えば次に示すようになる。

(2) Amy put the flowers in the vase.
$[_{Event}$CAUSE $([_{Thing}$AMY$]$, $[_{Event}$GO $([_{Thing}$FLOWERS$]$, $[_{Path}$INTO VASE$])])])$

これを因数分解して言うと，「Amy が花が花瓶の中に行くことが起こるようにした」という読みになる。それぞれの存在論的カテゴリーにまで分化させて出来事を分解していく。人も物も [THING] のカテゴリーに属し，[PATH] は移動の方向を表わす。$[_{Event}$GO$]$ は英語の go を表わしているのではなく，移動する出来事を表わしている。$[_{Event}$CAUSE$]$ は出来事を起こすことを表わす。

1.1.3 受給動詞の概念意味論的分析

本節では概念意味論の問題点を明らかにするために由井 (1989, 1990 a) で扱った日本語受給動詞ヤル・クレル・モラウを例に検討を試みたい。ヤル・クレル・モラウに代表される受給動詞は，ego-centricity に支配された直示体系に基づいている動詞として古くから興味

を持たれ，研究されてきた。受給動詞は単純用法である本動詞としてだけでなく補助動詞としても用いられ，幅広い用法を持つ。このような理由で由井（1989）では分析対象として受給動詞を選んだが，分析方法としては Jackendoff (1983) の関数表示による意味概念構造の手法を援用し，日本語受給動詞ヤル・クレル・モラウの意味分析を行なった。以下，まず，由井（1989，1990ａ）で取り上げた意味の抽象化過程を関数表示によって考察する方法を紹介する。

1.1.3.1　単純用法

1.1.3.1.1　視点に関する制約

従来言われてきたように，与え動詞（英語の *give* に当たる）であるヤル・クレルは，（3）のように受け手（以下ＲＥＣと略す）が話し手あるいはその身内意識の持てるもの（以下ＥＧＯと略す）か否かで使い分けられている。

（3）　ぼくが君に鉛筆をやるから，君はぼくに消しゴムをくれるだろ。
　　＊君がぼくに鉛筆をやるんだったら，ぼくは君に消しゴムをくれるよ。

即ち，RECがEGOならばクレル，non-EGO ならばヤルである。また，与え手（以下 GIV）・REC 共に non-EGO の場合，言い換えると，ニュートラルの場合はヤルが用いられる。一方，受け動詞（英語の *receive* に当たる）モラウは，主語であるＲＥＣがＥＧＯだと言われてきた。しかし，実例を探ってみると，ＲＥＣが non-EGO で，ＧＩＶがＥＧＯの場合も見つかる。

（4）　お前は大事な人の名前を（私に）もらったんだからね。　（めぞん）

上の例により，聞き手に言い聞かせるような場合は，ＲＥＣが non-EGO でも可能であることが分かる。

視点に関する構文論的問題と，ＥＧＯに関するうちそとの関係を整理すると次のようになる。

（5）　（ＥＧＯ＝）ＧＩＶが　ＲＥＣに　ＯＢＪ（物）を　ヤル
　　ＧＩＶが　ＥＧＯ＝ＲＥＣに　ＯＢＪを　クレル
　　（ＥＧＯ＝）ＲＥＣが　ＧＩＶに／から　ＯＢＪを　モラウ

1.1.3.1.2　受給動詞の意味

受給動詞はＯＢＪがＧＩＶからＲＥＣに移動することを表す動詞であり，移動関数でその

意味構造を示すことができる。ヤル・クレルに関しては，従来通りだが，モラウに関しては，記述レベルで意味を２通りに分けて考えたい。すなわち，大江（1975）ではモラウの「行為の意志」の所在はＲＥＣにあり，ＧＩＶにもＯＢＪの移動が行なわれる以上なんらかの意志があるとしている。しかしながら，モラウには意志の所在に関して２種類，つまり，ＲＥＣに意志のあるものとないものの２種類あると考えられる。例えば，ＲＥＣに意志がないことを示すテストとして「思いがけず」の挿入可否が考えられる。

（６）彼から思いがけず手紙をもらった。

上のような例では，「思いがけず」の挿入が抵抗なく受け入れられる。これは話し手に意志が存在していないことを示している。一方，意志があることを示すテストとしては，意志形～ウ／～ヨウの形を作れるか否かが考えられよう。

（７）山田さんに小犬をもらおうとしたが……。

この文では，ＲＥＣである話し手が山田さんに「働きかけて」小犬をもらう行為を受けようとしたことが伺われる。本節では，「思いがけず」と共起する，つまり，ＲＥＣに意志のないモラウをモラウ１，意志形を作れる，すなわち，ＲＥＣに意志のあるモラウをモラウ２として区別して扱うことにする。

次に，上に述べたヤル・クレル・モラウの意味特徴の記述を試みたい。意味表示にあたっては Jackendoff（1983）を参考に関数構造を考える。

ヤル・クレルは，ＯＢＪがＧＩＶからＲＥＣに，ＧＩＶの意志によって移動することを表す。ヤルとクレルに二分するのは，上で述べたようにＲＥＣの ego-centric な制約に因る。Jackendoff（1983）では，*give* は下のように表示されている。

（８）Amy gave the doll to Beth.

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([\mathrm{AMY}],\ [\mathrm{GO}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{DOLL}],\ \begin{bmatrix} \mathrm{FROM}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{AMY}]) \\ {}_{\mathrm{path}}\mathrm{TO}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{BETH}]) \end{bmatrix})])]$$

これは，物の移動が物理的空間移動から所有権の移動（位置モード Poss）に抽象化されていることを表している。日本語受給動詞も同様に，所有権の移動と考えられる。そこで，下に示すようになる。

（９）ｘガｙニｚヲヤル

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([\mathrm{X}],\ [\mathrm{GO}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{Z}],\ \begin{bmatrix} \mathrm{FROM}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{x}]) \\ {}_{\mathrm{path}}\mathrm{TO}_{\mathrm{poss}}\ ([\mathrm{y}]) \end{bmatrix})])]$$

制約：ＴＯの項［y］は，non-EGO である。

(10)　ｘガｙニｚヲクレル

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([X],\ [\mathrm{GO}_{poss}\ ([Z],\ \begin{bmatrix} \mathrm{FROM}_{poss}([x]) \\ {}_{path}\ \mathrm{TO}_{poss}\ ([y]) \end{bmatrix})])]$$

制約：ＴＯの項［y］は，EGO である。

上のように，制約を設けて表示し与え動詞をヤル・クレルに分化させる。

一方，受け動詞モラウについては，先に述べたとおり，２種類の意味表示を付したい。ＲＥＣに意志のないモラウ$_1$は，意志未来 *will* や *try* と共起できない英語の *receive* に相当するものである。Jackendoff の記述によると *receive* は次のように表示される。

(11)　Beth receive the doll.

$$[\mathrm{GO}_{poss}\ ([\mathrm{DOLL}],\ [_{path}\mathrm{TO}_{poss}\ ([\mathrm{BETH}])])]$$

モラウ$_1$は意味の上ではこの receive に相当する。そこで次のような表示を与えたい。

(12)　ｘガｙニ／カラｚヲモラウ$_1$

$$[\mathrm{GO}_{poss}\ ([Z],\ \begin{bmatrix} \mathrm{FROM}_{poss}\ ([y]) \\ {}_{path}\ \ \mathrm{TO}_{poss}\ ([x]) \end{bmatrix})]$$

制限：ＴＯの項は原則的にはＥＧＯ

モラウ$_2$については主格に意志があるという点でモラウ$_1$とは違う意味表示が与えられる。モラウ$_2$の意味を考えると，「クレルように働きかける」，すなわち，ＲＥＣがＧＩＶに働きかけ，その結果「ＧＩＶがＲＥＣにクレル」ということになるので，関数 CAUSE をたてて表示するのが適当であろう。

(13)　ｘガｙニ／カラｚヲモラウ$_2$

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([x],\ [\mathrm{CAUSE}\ [y],\ [\mathrm{GO}_{poss}\ ([Z]\ \begin{bmatrix} \mathrm{FROM}_{poss}([y]) \\ {}_{path}\mathrm{TO}_{poss}([x]) \end{bmatrix})])])]$$

制限：ＴＯの項は原則的にはＥＧＯ

ここで注意しておきたいのは，モラウ$_2$において主格が働きかける行為，すなわち意味関数［CAUSE([x]，[EVENT])］の［EVENT］の内容はモラウ$_1$ではなく，クレルであることである。例えば，先にあげた(７)において，話し手が望んでいるのは「山田さんの意志・好意で小犬を手に入れること」出会って，「山田さんの意志を無視して」ではない。モラウ$_1$とモラウ$_2$は，ＲＥＣのＧＩＶに対する働きかけの有無であること，モラウ$_2$は「ＧＩＶがＲＥＣに

ＯＢＪをクレル」ように働きかけることが明らかになった。

1.1.3.1.3　受給動詞の含意と同義性

上で本動詞ヤル・クレル・モラウの意味構造を見てきたが，次に，この関数による意味表示がメタ言語的レベルで述語の説明にどこまで有効か見てみよう。

含意（If p then q におけるｑがｐに対する含意，という意味で）については，「ｘがｙにｚをヤル・クレル」ならば，「ｙはｚをモラウ$_1$」となり，「ｘがｙに／からｚをモラウ$_2$」ならば，「ｙがｘにｚをヤル・クレル」になろう。モラウ$_1$の含意は「ｘがｚを持っている」となろう。これを意味表示で考えてみる。ヤル・クレルの意味表示を簡略化して記せば，(14)のようになる。

(14)　[CAUSE ([x], [EVENT])]

含意は [EVENT]，すなわちモラウ$_1$の意味構造にあたる。一方，モラウの簡略化表示は(15)のようになる。

(15)　[GO_{poss} ([x], [Path])]　　（モラウ１）
　　[CAUSE ([x], [EVENT])]　　（モラウ２）

モラウ$_2$はやはり [EVENT] が含意となるが，モラウ$_1$の含意は次のようになる。

(16)　[$_{state}BE_{poss}$ ([Z], [$_{place}AT_{poss}$ ([X])])]

比較のために，大江（1975）による Fillmore（1968）（1971）の理論に基づいた語彙・意味記述を引用しておく。

(17)　ヤル＋Ownership Shift, ＋Distal, ＋Momentary
　　項：ｘ，ｙ，ｚ
　　格：Agent/Source, Goal, Object
　　助詞：ガ，ニ，ヲ
　　前提：
　　不定に対するゼロ：ｙ
　　限定に対するゼロ：ｘ
　　随伴：ｙがｘからｚをもらう
　　クレル＋Ownership Shift, ＋Proximal, ＋Momentary
　　項：ｘ，ｙ，ｚ

格：Agent/Source，Goal，Object

助詞：ガ，ニ，ヲ

前提：

不定に対するゼロ：x

限定に対するゼロ：y

随伴：yがxからzをもらう

モラウ＋Ownership Shift，＋Proximal，＋Momentary

項：x，y，z

格：Source，Agent/Goal，Object

助詞：ニ／カラ，ガ，ヲ

前提：

不定に対するゼロ：x

限定に対するゼロ：y

随伴：xがyからzをやる／くれる

Fillmore 式の記述では，含意（随伴）が個々の語ごとに記述されるが，他方の関数表示による記述では，[CAUSE ([x], [EVENT])] → [EVENT] と一般化しやすい利点はある。モラウ１についても他の語の場合と考え合わせれば何等かの一般化が可能になろう。

次に，同義性の問題を考えてみよう。ヤル・クレル・モラウ各々に対する類義語には次のような語がある。

(18)　ヤ　ル ――与エル
　　クレル ――ヨコス
　　モラウ１――受ケ取ル

更に，モラウ１の謙譲語イタダクが，食ベル・飲ムの謙譲語にも当たることも考えてみたい。

与エルは，次のような例で用いられている。

(19)　a．シクラメンは，土の表面が乾けば水を与えればよい。
　　b．奇形ザルの発生は人間に警告を与えているのかもしれない。
　　c．盲導犬サーブは私たちに愛を与えてくれた。

上の例において，(a)は与エルをヤルに問題なく置き換えることができるが，(b)(c)はそうではない。(c)はＲＥＣが「私たち」であるから次のようにできるはずである。

(19c')　盲導犬サーブは私たちに愛をくれた。

しかしながら，この例からは「サーブの行為・行きかたを通して私たちが教えられる」というニュアンスは伝わりにくい。与エルの特徴として，ＧＩＶやＯＢＪに抽象名詞を持ってくることができるということがあげられよう。［ＴＯ］の項の他はヤル・クレルと同様の意味構造を示すと考えられる。但し，意味表示 GO_{poss} の位置モード poss（所有権）の使用範囲が具体物から抽象的なものまで広く捉らえられるか，あるいは，所有権の範囲外と言えよう。また，ego-centricity の制約に従って，与エルとヤル・クレルが言い換えられる場合でも，与エルは客観的描写，ヤル・クレルは主観的描写になる。

ヨコスは，クレルと同様，クレル同様，求心的な意味を持つ動詞である。以下に示すような例がある。

(20)　a．説明には女性ではなく，男の人をよこしてくれるんでしょうね。
　　b．帰ってくるなら連絡くらいよこすだろう。
　　c．また自費出版の本をよこしてきたよ。

(a)はクレルに置き換えることができない。(b)(c)はクレルに言い換えられるが，(b)の省略された主格に対する引き離したような言い方，(c)の有難迷惑のようなニュアンスは変ってしまう。ヨコスも意味構造は基本的に同様であるが，これもやはり，所有の意味分野からはみでる例がある。微妙なニュアンスの違いは意味構造で記述するのは難しいようである。

次に受ケ取ルについてであるが，(21)のような例がある。

(21)　a．彼からの小包を昨日受け取った。
　　b．受け取った証拠，何かありますか。

(a)はＯＢＪの［$_{path}$TO］項の移動は表すが，モラウは所有権も移動していることを表す。ゆえに，次のようなへ理屈が捏ねられる。意味分野の範囲が所有権より空間移動に近いのである。

(22)　もらったんじゃなくて，受け取っただけだよ。

(21 b)をモラウに置き換えるのは ego-centricity の問題で難しい。

最後にイタダクの問題について考えてみたい。イタダクは，モラウの謙譲語であるが，同時に食ベル・飲ムの謙譲語でもある。相当する英語の *drink* を Jackendoff (1987) では，次のように記述している。

(23) drink
[−N, +V]
____ (NP_j)
[$_{Event}$CAUSE ([$_{Thing}$]$_i$, [$_{Event}$GO ([$_{Thing}$LIQUID]$_j$,
[$_{Path}$TO ([$_{Place}$IN ([$_{Thing}$MOUTH OF ([$_{Thingi}$]$_i$)])])])])])

食ベル [$_{Thing}$LIQUID] を [$_{Thing}$SOLID] に変えた同様の構造である。(12)(13)で見たモラウの意味構造と比較すると，[GO ([x], [$_{path}$TO])] に共通点が見いだされる。この意味構造上の共通部分がイタダクにモラウと食ベル・飲ムの謙譲語両方が含まれていることと関わりがあるのではないだろうか。

以上，意味構造によって，メタ言語的に述語の説明を試みた。関数構造による意味記述では，含意の一般化が得やすいこと，同義性を考えるのに，意味の共通性を見いだしやすいことが利点であることが分かった。しかしながら，類義関係にある語など微細なニュアンスの記述は難しいことが分かった。

1.1.3.2　補助動詞用法

本節では，受給表現を直示の観点からいえば，①空間時間的直示，②感情的直示の2つに分類することを提案したい。①の空間時間的直示はさらに，具体的な物の授受を表す用法，すなわち，単純用法と抽象的用法，言い換えれば，いわゆる恩恵の受給を表す補助動詞用法に分けられる。

R. Lakoff (1974) は，指示詞 *this* と *that* の分析において，3通りの領域——(a)spatio-temporal deixis, (b)discourse deixis 及び(c)emotional deixis——に分けている。(a)は文字どおりの指示語，(b)は文脈における照応，(c)は(a)(b)で捉らえきれない領域のもので，発語内容に含まれる話し手の感情的なものに結びついているものを含む。(c)の emotional deixis は，単なる比喩表現としては片付けられないもので，規則性を帯びたものだと，Lakoff は主張する。具体的には，*this* は談話に vividness を与えたり，聞き手を narrative に引き入れる効果があり，*that* は聞き手（男性）に友情や一体感を示したり，同情を示す効果があるという。例えば，次のような場面で口語的に使う。

(24)　a. There was this traveling salesman, and he...
　　b. He kissed her with {this/an/*the} unbelievable passion.
　　c. How's that throat?

これを受け，以下，補助動詞用法を「恩恵の受給」と「emotional deixis 体系の受給補助動

詞」に分けて考える。

1.1.3.2.1 恩恵の受給

ここで「恩恵の受給」と呼ぶのは，２者間でなされる行為が恩恵を伴って受給されるもの，言い換えればＧＩＶとＲＥＣを入れ替えられる用法である。例えば，次のような文がある。

(25) a．おまえには春物のワンピースを買ってやったぞ。
b．おじいちゃんがランドセルを買ってくれたんだ。
c．友達の家でアルバムを見せてもらった。

これらの基底構造は，単純用法におけるＯＢＪにあたる項が[　]s（sは文を表す）になり，単純用法とパラレルである（大江：1975)。(25)は次のように表示することができる。

(25') a．僕がおまえに［僕がおまえに春物のワンピースを買う]s やる
b．おじいちゃんが僕に［おじいちゃんが僕にランドセルを買う]s れた
c．私が友達に［友達が私に友達の家でアルバムを見せる］s もらった

意味構造を考えてみると，単純用法におけるＯＢＪが，恩恵の補助動詞用法においては行為，すなわち，存在論的範疇［EVENT］に当たる。そこで単純用法の［Thing］を［Event］に換えればいいだろう。しかしながら，意味領域は所有領域ではない。ここで「恩恵の領域(Benefactive Field)」を設定したい。所有領域では，Theme は［Thing］であったのが，恩恵の受給表現では［Event］に換わることになる。「所有権の移動」の代わりに「恩恵の移動」とし，位置モードは Bnf とする。これによる恩恵の受給の意味構造は下のようになる。

(26) ｘガｙニ～テヤル

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([_{\mathrm{Event}}\mathrm{GO}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{Event}],\ \begin{bmatrix}\mathrm{FROM}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{x}]) \\ {}_{\mathrm{Path}}\ \mathrm{TO}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{y}])\end{bmatrix})])]$$

制限：[$_{\mathrm{Path}}$TO］項は non-EGO

(27) ｘガｙニ～テクレル

$$[\mathrm{CAUSE}\ ([_{\mathrm{Event}}\mathrm{GO}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{Event}],\ \begin{bmatrix}\mathrm{FROM}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{x}]) \\ {}_{\mathrm{Path}}\ \mathrm{TO}_{\mathrm{Bnf}}\ ([\mathrm{y}])\end{bmatrix})])]$$

制限：[$_{\mathrm{Path}}$TO］項はＥＧＯ

また，Fillmore (1971) は，英語に現れる受益格 (benefactive) の取り扱いについて次のような案をだしている。

(28)　John did it for me.

(28)には3つの基本的概念が含まれている。①動作主格 John，②動作主の行為あるいは「行為提供」＝対象格 John did it，及び③その行為や行為提供の「方向」またはそれを受ける者＝目標格 me。すなわち，誰かの利益のために遂行された行為は，対象格に埋め込まれた文として表される。そこで，「与える」という意味の抽象動詞を設定する。すると次のようになる。

(29)　I give you (I do it).→I do it for you.

Fillmore は受益格で恩恵を表現する英語について述べており，抽象動詞 give をたてているが，日本語では動詞として存在し，(29)の左側の構造をもっている。先に示した意味構造でいうと日本語の場合，[CAUSE (x, GO)] が恩恵動詞を表し，英語の場合 $[_{Path}TO_{Bnf}]$ 項が受益格として現れている。

次に～テモラウについて考えてみたい。単純用法の意味記述でモラウを2種類に分けて記述することを示したが，これは補助動詞になっても引き継がれている。モラウ$_1$の補助動詞用法には次のような例がある。

(30)　a．中学校では国語を中村先生に教えてもらった。
　　b．大亀は浦島太郎に助けてもらった。

(a)(b)とも相手に依頼する意志なしであるモラウ$_2$には次のような例がある。

(31)　a．母に家庭科の宿題をしてもらった。
　　b．数学をとなりの大学生の中村さんに教えてもらった。

ものモラウ$_2$は依頼受益とも呼ばれ，やや複雑な様相を呈する。モラウ$_1$，モラウ$_2$それぞれの意味構造を示すと次のようになろう。

(32)　xガyニ～テモラウ$_1$

$$[GO_{Bnf}([Event], \begin{bmatrix} FROM_{Bnf}([y]) \\ {}_{Path}TO_{Bnf}([x]) \end{bmatrix})]$$

制限：TOの項は原則としてEGO

(33)　xガyニ～テモラウ$_2$

$$[CAUSE([x], [CAUSE([y], [GO_{Bnf}([Event], \begin{bmatrix} FROM_{Bnf}([y]) \\ {}_{Path}\ TO_{Bnf}([x]) \end{bmatrix})])])]$$

制限：TOの項は原則としてEGO

奥津（1982）は「～テモラウは利益的行為の取得という基本的意味と使役的行為の謙譲的表現という派生的意味がある」と述べている。また，寺村（1977）は「～テモラウという形において間接受動と使役はいわば融合してしまうわけである」としている。複雑な様相は外国に翻訳する場合も，工夫されている。筆者の調査によると，次のような例があることが分かった。

(34) 前から聞いていただきたいと思っていたことです。…… （『斜陽』）
There's something I've been meaning to tell you...

(35) 直治は大乗気で，あのひとの他にも二，三，小説家の方に顧問になってもらい，……
（『斜陽』）
As a preliminary step, Naoji persuaded two or three novelists besides that person to appoint him as their agent...

(36) だからこそそこを一つあなたに判断していただきたいと思うの。 （『こころ』）
That is what I want you to tell me.

視点を変えていったり（「あなたが聞く」を「あなたに言う」），使役動詞を用いたり（説得する）している。

使役の意味と受身の意味を意味構造でいうと，使役は一番外側の関数 CAUSE，つまり，[CAUSE ([x], [Event])] に当たり，受身の意味は [GO ([Event], [TO (x)])] に当たる。

Jackendoff（1983）では，使役の意味構造を次のように分析している。

(37) x forced/pressured/tricked/talked y into singing.
x got/forced/caused/coerced y to sing.
[CAUSE (x, [GO_{Circ} (y_i, [TO_{Circ} ([i SING])])])])

これは「yが歌う状況にさせる」という意味で，～テモラウの［yが～してくれるようにさせる」とはyの行為に対する意志・自発性に違いが認められる。

以上，2者間で行為が恩恵を伴ってやり取りされる受給表現について考察した。次節では emotional deixis における受給表現を見てみたい。

1.1.3.2.2 emotional deixis 体系における受給補助動詞

恩恵の受給よりもさらに抽象化の進んだ表現がある。

(38) a．今度こそ司法試験に合格してやる。
b．もう一杯だけ飲んでやろう。

c．先生に言ってやろう！

(39)　a．こんな時，亡くなった主人がいてくれたら，どんなにか心強いんだけど……。

b．よくも恥をかかせてくれたな。

c．愛人でいいのとうたう歌手がいて言ってくれるじゃないのと思う。（サラダ）

d．この傷，明後日には治っていてくれないかな。

(40)　a．そんなことを言ってもらったら困る。

b．死んでもらいヤス。

c．日本を再び戦争に巻き込んでもらいたくない。

これらの文で表されていることは，2者の間でなされた行為ではなく，したがって，ＧＩＶとＲＥＣの入れ替えはできない。(38)は，聞き手に恩恵を与える表現ではなく，(39)は相手が意志をもって話し手に恩恵を与えているのでもない。(40)も相手の意志を尊重しているとはいえない。これらは恩恵の受給表現とは違った表現である。

この用法は，恩恵の受給のように単に［Thing］が［Event］に写像されたものではないので，意味構造を考えるに当たり，吟味が必要である。まず，「心的空間」の設定を提案したい。この用法では具象的空間を物が移動するわけではなく，また，具象的存在である2者間で行為が行なわれるわけでもない。より抽象化した心的な授受とでも言うべき用法である。心的空間における直示点は，しかしまだ，本動詞の制限を引き継いでいる。そこで，この用法を先述の R. Lakoff (1974) のいう emotional deixis とみなしたい。

上の例を検討すると少なくとも2つのパターンがあることに気付く。1つは，「現実空間」と「話し手の空間」あるいは「聞き手の空間」との関係のモデル，もう1つは，「願望が達成した空間」と「話し手の空間」あるいは「聞き手の空間」との関係のモデルである。前者は，例えば，(38ｃ)「先生に言ってやろう！」においては，「先生に言う」ことで聞き手に影響を及ぼす，すなわち，「先生に言う」という「現実空間」から「聞き手の空間」へ心的な方向付けがなされていると考えられる。また，(39ｃ)の「言ってくれるじゃないの」の場合は，歌っている歌手は現実空間ではただ「言う」だけであるが，それを話し手が自分に影響を感じている，すなわち，「話し手の空間」にむかって心的な方向づけをしていると考えられる。モラウの(40ａ)では，事実としては，相手は「言った」だけであるが，話し手が自分と関わりをもたせているのである。

一方，「願望が達成した空間」との関係のモデルでは，例えば，(38ｂ)においては「もう一杯飲む」ことの意志表明であるが，これは話し手の空間から「願望達成空間」へ心的な方向づけをしているといえる。また，(39ｄ)においては「傷が治っている」という願望が達成された空間から話し手の空間への影響だと考えられる。(40ｂ)では「お前が死ぬ」という願望

達成状態へ話し手が働きかけ，その結果また話し手に影響が来ると考えられよう。

これらの用法の場合の関数による意味構造を記述するれば，次に示すようになろう。意味領域は，心的構成物である話し手の空間や聞き手の空間が関わるので Emotional Territory (Terr) と設定してみる。

(41) ～テヤル（現実空間との関係）（先生に言ってやろう）
[CAUSE（[僕]，[GO_{Terr}（[現実空間]，[$_{Path}TO_{Terr}$（[聞き手空間])])])]

(42) ～テヤル（願望達成空間との関係）（～合格してやる）
[CAUSE（[僕]，[GO_{Terr}（[話し手空間]，[$_{Path}TO_{Terr}$（[願望達成空間])])])]

(43) ～テクレル（現実空間との関係）（言ってくれるじゃないの）
[CAUSE（[私]，[GO_{Terr}（[現実空間]，[$_{Path}TO_{Terr}$（[話し手空間])])])]

(44) ～テクレル（願望達成空間との関係）（傷，治っていてくれないかなあ）
[CAUSE（[私]，[GO_{Terr}（[願望達成空間]，[$_{Path}TO_{Terr}$（[話し手空間])])])]

(45) ～テモラウ（現実空間との関係）（言ってもらったら困る）
[GO_{Terr}（[現実空間]，[$_{Path}TO_{Terr}$（[話し手空間])])])]

(46) ～テモラウ（願望達成空間との関係）（死んでもらいヤス）
[CAUSE（[私]，[CAUSE（[私]，
[GOTerr（[願望達成空間]，[TO([話し手空間])])])])]

これで見る限り，ヤルの遠心，クレル・モラウの求心は維持されているようである。

以上，Jackendoff (1983) の概念構造による受給動詞の意味構造を考察してみた。次節では意味の抽象化過程を分析するに当たり，概念意味論の問題点を考察してみたい。

1.2 問題提起――概念意味論の問題点――

概念意味論的に行なった意味分析をヤル・クレル・モラウを例に上に示したが，本節では意味の抽象化過程を分析する場合の問題点を考えてみたい。

Jackendoff (1983) 等の概念意味論に対しての問題については他の研究もあるので，まず，それから見てみたい。坪井・西村 (1991) では形と意味との対応について，次のような指摘をしている。

(47) 「文法制約によって形と意味との対応に考慮することを要求されることになり，異なる表現様式は異なる認識のしかた，つまり異なる意味，を示唆することにもつながりるはずなのだが，必ずしもそうなっていない。潜在項でいうと，drink の目的語等を＜＞で括って随意性を表わすことは随意的であることは分かるが，目的語が現れ

るときと現れないときで意味が違うのかどうかが示されない。」

(48)「目的語性と全体的解釈について：

Bill loaded hay onto the truck.

Bill loaded the truck with hay.

上のようないわゆる所格交替動詞の2つの具現形の間の意味の違いについてJackendoffは目的語性と全体性は結び付かないとしているが，なぜ目的語である場合に全体的解釈を受けるのかということになると，納得できる解答が得られない。」

このようにJackendoffは基本的に形式と意味の対応について不十分な見解しか与えられないとみることができよう。

次に，上で見た日本語受給動詞の意味の抽象化過程に適用した場合の問題点を考えてみたい。

まず，大きな問題として上がってくるのは，位置モードの問題である。[GO]に付加している小文字は例えばPossはpossessionの略で所有モードを表わしている。所有権の移動という意味である。しかし，実際は移動しているのは所有権だけではない。やり取りされる「物」が動くのである。位置，すなわちpositionも移動することを表わさなければならない。逆に「この屋敷はお前にやる」のように所有権のみ移動することもある。

また，同様に，モードの問題で，上でemotional deixisと規定した用法の意味，例えば，「もう一杯だけ飲んでやろう！」「言ってくれるじゃない」「言ってもらったら困る」などを記述する場合，心的に構成された影響が移動するのであり，存在論的カテゴリーをもとにした概念構造では表わしにくい。[現実空間]や[願望達成空間]を移動主体として表わしたが，これらはあくまでも心的構成物であり，この記述では心的な意味分野の記述の難しさを感じる。さらに，他の用例との関連などが見えにくく，ad hocな感が否めない。心的な構成物まで表わせるようにしなければならない。

第3の問題としては，概念意味論の記述では類義語の意味の違いが表わせないという問題が起こる。類義語の意味の違いが何によるか，すなわち，文体的差なのか，派生的な意味から起こるのかが記述できなくなってしまう。類義語の意味の違いも含めて記述できる方法を考えなくてなならない。

第4として，[CAUSE]についてだが，これが表わす範囲が広すぎるという問題がある。強制的な使役なのか，許容なのかこれだけでは判別できないという問題がある。

第5として，この理念じたい，認知との関わりで分析されているはずだが，やはり言語の自律性を前提としていることは否めなく，社会通念等の要因を組み込みにくいという点があげられる。

最後に，上の方法で分析した長所は維持できるような分析・記述方法を考えなけらばならない。長所の１つとして含意を一般化して記述できる（[CAUSE（[x]，[EVENT])→[EVENT]）ということがあった。

そこで，次章では本節で得られた概念意味論の問題点と利点をそれぞれ改善，あるいは，維持できるような方法を考察していきたい。そして本稿で用いる意味分析の枠組みとし，具体的な分析を行なっていきたい。まず，次章では，意味分析に当たって，分析の方法論や意味に対する基本理念について述べていきたい。

第２章　意味分析の前提と方法

――意味の孤立系と文脈からの干渉――

2.0　はじめに

本章では，第１章で検討した概念意味論の問題点と長所を踏まえ，意味の抽象化過程を分析する方法について考える。まず，筆者の意味に対する態度を示しておきたい。次節で示すとおり，「意味とは何か」を定義するのは困難な問題であるものの，本論文で意味を分析するに当たり，筆者の意味に対する立場を述べておきたい。その後，本稿で採る意味分析の方法について述べたい。

2.1　意味分析の前提

日本語には本動詞に対して～テ形式の補助動詞用法を持つ動詞があり，本動詞とは違った意味の相を示している。例えば，次のようなものである。

（1）　a．靴を机の下に置く。
　　b．来月の面接試験のために靴を買っておく。

また，動詞オクはさらに次のような用法も持つ。

（2）　第１応接室において面接を行います。

（1 a）の本動詞は空間的な移動を表すが，（1 b）は「あらかじめ～する」を表し，（2）では面接を行なう場所を示している。同一形式オクが具象的な意味から抽象的な意味まで持っているのであるが，このような意味の抽象化過程は他の動詞にも見られる。例えば，ヤル・クレル・モラウ・シマウ・ミル・イル・アル・イク・クルは補助動詞用法を持つ。また，これらと平行した現象に形容詞ホシイもあげられる。～ニオイテのように，自由形態素である動詞のカテゴリーから脱して拘束形態素である別の文法的カテゴリーへ転換することを「文法化（grammaticalization）」と呼ぶが，Antoine Meillet が1912年に唱えて以来[(1)]（Hopper and Traugott 1993），近年認知言語学的アプローチのもと再び取り上げられるようになった。それにつれて「文法化」という用語も言語に見られる過程を指すだけでなく，研究のアプローチをも指すようになった（上掲書）。文法化現象[(2)]は当然日本語だけでなく各言語に見られる。

英語では例えば次のような文法化現象の例がある。

(3) a. I go abroad.
b. I am going to go abroad.
c. I have a nice pen.
d. I have finished my work.

これらはそれぞれ，*go*（行く）が助動詞となり *be going to* 形式で近未来を表し，*have*（持つ）が *have V-ed* で完了を表している。ここで日本語と対比させてみると，日本語もイクは～テイク用法を持っているが，モツには補助動詞用法としての～テモツがない。これは *have* に対応する日本語を考えてみるといいだろう。

(4) a. I have three sisters.
b. 私には姉が3人いる。

(4 b)イルについては(5)の用法～テイルがある。

(5) 雨が降っている。

文法化しやすい語は言語によって異なり，それはより基本的な語とまずは言えそうである。

2.1.1 文法化現象の意味論的分析について

文法化という言語現象は様々なレベルから分析可能である。意味論的，運用論的，形態論的，音声的にみて，それぞれ具象的意味から抽象的意味へ・語彙的内容から文法的内容への言語的効果，運用論的機能から統語的機能へ・テキストでの低頻度から高頻度への効果，自由形から接語形へ・接語形から拘束形へ・合成語形から派生形へ・派生形から屈折形への効果，さらに，完全形から宿約形へ・宿約形から分節地位の消失への効果があげられる（Heine, Claudi and Hünnermeyer 1991)。本稿では，このうち意味論的な分析レベルにより意味の抽象化過程を見ていくことにする。

ここでは意味分析の際，前提となる意味についての考え方を示しておきたい。本稿ではまず「形式が意味を規定する」という前提で分析を行いたい。意味が形式によって規定されることを意味論の入門書にでてくるお馴染みの「明けの明星」と「宵の明星」で示すならば，「明けの明星」と「宵の明星」は，指示対象は同じ「金星」である。前者と後者の意味を同じと考える場合は，形式が意味を規定しているのではなく，「金星」という存在物，すなわち指示物が規定していると考えている。しかし，「明けの明星」と「宵の明星」は違う意味だとも考えられる。この場合発話主体は両者を違った認識で，すなわち「夜明けの金星」と「日

暮れ後の明星」と捉えていると考えられる。これを文レベルに推して考えると，指示対象である「金星」に該当するのが「出来事」であろう。客観主義的な立場では次の能動文と受動文を同じ「意味」の文として捉えている。

（6）　a．委員会は「入学許可」を認めなかった。
　　b．「入学許可」は委員会に認められなかった。

客観主義的な立場は，すなわち「委員会」が「入学許可」を認めなかった」という事実上の出来事を「意味」としているのである。一方，認知言語学的な立場では，（6）の2文は違う認識に基づいた表現であり，したがって意味も違うと考える（西村1989）。また，しばしば引き合いに出される例に「日が昇る／沈む」という表現があるが，これは地球の自転という客観的事実を述べておらず，話者の認識を表している。すなわち，文の意味を客観的事実に求めると不整合もでてくると言える。言葉の意味は言語世界内で捉えるべきだと考える理由がここにある。

このような意味は形式が規定するという考え方に基づき，George Lakoff（1987）らはメタファーを媒介とする認識研究へと進展させている。

（7）　a．The painting is **over** the mantle.（その絵は炉棚の上にある。）
　　b．The plane is flying **over** the hill.（その飛行機は丘の上を飛んでいる。）
　　c．Sam is walking **over** the hill.（サムは歩いて丘を越えようとしている。）
　　d．Sam lives **over** the hill.（サムは丘の向こうに住んでいる。）
　　e．Harry still hasn't gotten **over** his divorce.
　　（ハリーはまだ離婚の痛手から立ち直っていない。）
　　f．Pete Rose is **over** the hill.
　　（ピート・ローズはもう盛りを過ぎている。）

（ゴチは筆者）

これらの文で使われる *over* はいくつかのスキーマに基づき意味が拡張している（上掲書）と認知意味論的に分析される。例えば，（7c）と（7e）は「障害物を垂直なLM（ランドマーク）として，また，人生を旅と見なすメタファーにより同じスキーマに基づいている。（7d）と（7f）は「仕事というものを丘のように垂直と水平の両方向にのびたLMを越えて行く旅として理解するメタファーを利用して」同じスキーマに基づいていると考えられている。

本稿でも補助動詞は本動詞と同一形式であると捉え，本動詞の意味が補助動詞になってもどのように維持され，あるいは変容，消失しているのかという観点から分析を行いたい。

形式が意味を規定するというと必ずのように出てくる反論がある。それは本動詞と補助動

詞の関係は単に言語構造の問題であって，概念化を反映しているとはいえないのではないかという反論である。つまり，本動詞と補助動詞を統合して分析しても概念構造については何もでてこないのではないかという疑問である。この種の問題についてジョージ・レイコフも1987年の文献で少し触れている。そこでは日本語の類別詞「本」を取り上げ，「本」が細長いものだけでなく，柔道の試合，ラジオやテレビ番組，手紙や電話でのコミュニケーションなどが皆「本」で表わされるが，このことについてコニュニケーションは「導管のメタファー」，柔道は「竹刀を使う剣道と同じ経験領域に入る」などの理由で「本」が用いられるとしている。このような分析が本当に精神のカテゴリーの問題なのかということについて，反対に「言語の組織化の原理」を問いなおしている。(Lakoff 上掲書)

（8） 言語の組織化の原理に関与しているもの
中心的成員と周縁的成員
中心を占める基本的レベルのもの
慣習的な心的イメージ
慣習的な心的イメージに関する知識
イメージ・スキーマ変形
メンタル・イメージに適用されるメトニミー
経験領域に適用されるメトニミー
（領域を他の領域に写像する）メタファー

結局，言語の組織化の原理に関与しているものは概念的な組織化にも必要とされるものだと説明する。

レイコフの反論にさらに付け加えるとすると，もし，精神の問題ではなく，単なる言語構造に過ぎないと言うなら，補助動詞の意味は本動詞からの派生であるとか，本動詞の意味が弱くなったものだという一般的な直感は意味がなくなってしまうのではないだろうか。補助動詞が文法的カテゴリーを表わす単なる言語の仕組でしかないのなら，本動詞と同じ辞書の項目に入る必要もなく，同音異義語として捉らえてもいいはずである。一般的な直感がある限り，無意識のうちに当該語で概念化を行なっていると考えられるのである。

2.2 意味の各説

2.2.1 オグデンとリチャーズ（1953邦訳）『意味の意味』

オグデンとリチャーズが1923年に出版した『意味の意味』は意味論研究で真っ先に取り上げられるいまや古典的文献である。その第9章に「意味の意味」と題される章があるが，こ

の時代までの意味研究，言い換えれば「意味とは何か」という意味の主な定義がリストアップされている。

（9）　意味とは

A　1　内在的特徴である。

　　2　他の事物に対する独自の分析不能の関係である。

B　3　辞書で或言葉に添加された言葉である。

　　4　言葉の内包である。

　　5　本質である。

　　6　対象に投射された活動である。

　　7　(a)志向された事件である。(b)意志である。

　　8　或体系中の事物の場所である。

　　9　事物が吾人の将来の経験に　す実際的結果である。

　　10　説述に包み込まれた，或は含まれた理論的結果である。

　　11　事物によって惹起こされた情緒である。

C　12　選ばれた関係によって実際上記号と結ばれたものである。

　　13　(a)刺激が記憶に及ぼす効果である。得られた連想である。

　　(b)記憶に及す或影響が，妥当するような他の事件である。

　　(c)記号が関係するものとして解釈される事物である。

　　(d)事物が暗示するものである。

　　象徴の場合

　　象徴の使用者が実際に指すものである。

　　14　象徴の使用者が指しているはずのものである。

　　15　象徴の使用者が指していると信ずるものである。

　　16　象徴の解釈者が

　　(a)指すものである。

　　(b)自分が指していると信ずるものである。

　　(c)使用者が指していると信ずるものである。

このリストの中には理論的な定義も含まれてはいるが，非理論的なものも多い。このリストのあとで彼等はそれぞれの定義について批判を加えているが，このことが示すのは，意味は心的作用が関わるものであり，すべての意味の定義は不十分にしかなしえないものである。結局，オグデンとリチャーズも自らの定義を完成させていない。意味を定義することは人間の経験や知識などあらゆるものを盛り込まなければならなくなる。しかしながら，彼等は明

確な定義こそ与えなかったが，彼等が示した「象徴」と「指示物」と「思想或は指示」からなる，有名な「意味の三角形」は現在でも基本的な考え方として影響をもっていると思われる。「基本的な考え方」と断ったのはその後ライオンズなどが三角形の頂点の語を書き換えているからである。

2.2.2 ユージン・ナイダ(1975)の成分分析

ユージン・ナイダは1975年出版の *Componential Analysis of Meaning* の中で示差的特徴による成分分析を提唱している。これは音声学で行なわれているような対立により，意味の成分を取り出す方法で行なわれる。何らかの理由で意味の近い関連語の意味の違いを抽出するやりかたである。例えば親族語彙という関連語どうしの意味成分を抽出すると，次のような成分が得られる。

(10) ＜男＞＜女＞
＜同じ世代＞＜１世代上／下＞
＜直系＞
＜血縁婚＞＜婚姻婚＞

これらの成分を使えば「叔父」「祖母」「従兄」などの親族を区別して表わすことができるという方法である。本稿も基本的には意味成分を抽出することによって分析を行なうと言う立場を取りたい。しかし，すべてナイダの方法にのっとるわけではない。ナイダの記述のなかに，意味論の研究者が記述する語の相違点と一般の話し手が考えている相違点が一致するか，という問題について述べている箇所がある。

(11) 例えば，「走る」(run) と「歩く」(walk) の意味を区別する要素は「速度」であって，普通，走る方が歩くよりも速いからだ，と大抵の人々は考えている。ところが，他の人が走るよりも早く歩くことのできる人間がいるという事実や，「その場とび」という移動しない走りかたもあるという事実に出会うと，「速度」がこの両者を区別する要素ではないことを認めざるを得ない。走る動作と歩く動作とを注意深く分析してみると，この両者を区別する指差的な成分は走る場合にはどちらの足も地面に接していない瞬間があるのに対して歩くときにはどちらか一方の足が地面についているという点であることがわかる。この例は人々が心理的に区別を示すと考えている要素が必ずしも意味成分によって明らかになった区別と一致しないことを物語っている。 (升川他訳)

この記述からもわかるとおり，ナイダにとっての意味は観察対象の事実である。本稿で筆者

は意味成分は用いるが，成分決定に対して客観的事実を最重視する考えはない。むしろ，上の場合，中心的な意味は「速度」による違いとすべきで，早歩きやその場とびはそれぞれの動詞が表わしえる周縁的なものである。周縁的な意味成分が強調されると中心的意味からずれていく。もちろん，そういう可能性があれば意味成分に加える可能性もあるが，何がその語にとって中心的かを見極めることは大切である。中心的な意味は多くの人が共通して思い浮べる意味であると考えられる。分析の過程で必要なら，＜速度＞以外に＜足の上げかた＞や＜地面への足のつけかた＞が成分としてあがることもあるだろう。

2.2.3　國廣哲弥（1982等）の意義素分析

服部四郎の意味研究の流れをくむ國廣の「意義素」論は意味論研究を厳密に方向付けたことで大きな功績がある。意義素は，まず，場面語との「発話」から臨時的な要素を取り除いた文レベルと，さらに文音調，統語構造を取り除いた単語レベルを区別したうえでの単語の意味に当たるものである。それはさらに「個人間の差異」や「文脈の影響」を取り除いた純化されたものと規定されている。例えば，「個人間の差異」とは例えばAからHまでの人が過不足をもちながら有している知識の仮想共通知識といえるものである。また，「文脈の影響」は次の例で見られるという。

(12)　a．My cousin is handsome, isn't he?
　　b．My cousin is pretty, isn't she?
　　c．My cousin married a son of a millionaire, didn't she?

この例では本来性別のない語である 'cousin' が(a)では handsome や付加疑問の代名詞から「男」であることがわかり，(b)(c)では pretty や男性と結婚したということから「女」になる。cousin という語には性別に関する特徴がないのだが，文脈から影響を受けているという。一方，「いななく」などの動詞は文脈から切り離されても動作主が「馬」であり，人が動作主になると「馬のように声を出した」ということになろう。意義素論において抽出された意義素は筆者が2.3節で述べる孤立系の意味と結果的に通じるものがあるが，筆者とは抽出過程が逆である。詳しくは2.3節で述べることにする。

また，意義素は意義素を構成する3種類の意義特徴にさらに細かく分析される。これはさらに次のように下位分類されている。

(13)　文法的特徴 { 品詞的特徴
　　統語的特徴

語義的特徴 { 前提的特徴
本来的特徴

含蓄的特徴 { 文体的特徴
喚情的特徴
文化的特徴

上の統語的特徴には意味範疇である格構造が取り入れられている。本来的特徴は「彼は独身ではない」のような否定文で用いた場合に否定される部分，すなわち，＜結婚していない＞という特徴であり，否定されない部分，すなわち，＜人間＞＜おとな＞という特徴が前提的特徴である。ただ，この場合，前提的特徴を規定する否定文の文脈によって特徴が影響を受ける可能性があると思われる。「動物園の人気者ゴリラのゴンは独身ではない」の場合，＜人間＞という特徴が前提的特徴と言えるかどうか難しくなる。また，動詞の場合，「彼は歩かない」によって否定されるのは＜速度＞なのか＜移動＞なのか不明である。３つ目の含蓄的特徴は個人差の大きい意義特徴としている。個人差のうちに方言差についても触れられているが，これは注意を要すると思われる。方言差を考慮に入れると，意味体系その物が不安定になってしまうおそれがあるからである。分析する際にはある言語体系に限定して分析するべきだと思われる。

意義素説でもって本稿で扱うような動詞の意味構造を分析した場合，動詞カケルでは次のようになる。

(14)　カケル：何かをある対象物目がけて移動させ，その結果対象物と接触し，その何かは対象物に支えられることになる，あるいはさらにその先まで移動することもある，という行程

（A）全行程の前半部分に重点をおく用法

声をかける
攻撃をかける
思いをかける
食べかける

（B）物を移動させて行って対象物に接触させるところまでを含む用法

ブラシをかける
水をかける
砂をふるいにかける
電話をかける
立てかける

（C）接触が相当の時間続くことが予定されている用法

カバーをかける
ふとんをかける
メッキをかける
橋をかける
眼鏡をかける
看板をかける
腰をかける
鍵をかける
帽子をかける

A，B，C全用例をおおう単一の意義素は考えず，それぞれの意義素を区別することになろうとしている。また，Cグループの接触時間は連続的に変わっており，カケルの多義も連続的であるとするが，上の用例間の意味の連関の問題は解決されていない。なぜ，A，B，Cグループがそれぞれ同一の形式で表わされ得るかの説明が動詞の場合，不足であると思われる。

次節では意味の連関を表わしている方法について検討してみたい。

2.2.4　ブラグマン等のネットワーク・アプローチによる多義語分析

Brugman (1984) 等では意味関係を重視した多義語の分析を提唱している。本章の(7)であげた *over* は Lakoff (1987) が Brugman の分析に修正を加えた上，提示したものの一部である。*over* の分析では，Langacker (1987) らによって意味論に組み入れることを主張されたイメージ・スキーマを取り入れ，分析を行なっている。先にあげた(7)ではまず，*over* の中心的意義として，*above* と *across* の融合したものだとし，(7 b)のような例をあげている。そこでは，飛行機は，ランドマーク（LM）に対して相対的に位置付けられるトラジェクター（TR）として解釈される。ここでいうLMとTRはラネカーのいう図 (figure) と地 (ground) という概念を焦点化したもので，ここではLMは不特定である。(7)を再掲載するが，これは引用による説明を簡略にするため，レイコフらの研究の一部抜粋であることをお断りしておきたい。

(7)　a. The painting is over the mantle.（その絵は炉棚の上にある。）
　　b. The plane is flying over the hill.（その飛行機は丘の上を飛んでいる。）
　　c. Sam is walking over the hill.（サムは歩いて丘を越えようとしている。）
　　d. Sam lives over the hill.（サムは丘の向こうに住んでいる。）

e. Harry still hasn't gotten over his divorce.
(ハリーはまだ離婚の痛手から立ち直っていない。)

f. Pete Rose is over the hill. (ピート・ローズはもう盛りを過ぎている。)

(7c)ではLMが垂直水平両方に広がった場合，(7d)は同じスキーマで終端焦点化を得た場合である。(7e)では同じスキーマと2つのメタファー，すなわち，障害物は垂直なLMであるというメタファーと「人生は旅」のメタファーに基づいている。(7f)では(7d)と同じスキーマで仕事を丘のように垂直と水平の両方向に延びたLMを越えていく旅と理解するメタファーを利用しているとする。

語彙的ネットワーク・アプローチでは基本的にイメージ・スキーマ，メタファーのリンク，メトニミーのリンク，フレームの付加リンクによって，最小限異なる用例を隣り合わせて，例えば，LMが垂直・水平両方に延びた場合と垂直にだけ延びた場合を隣り合わせて，語彙内でネットワークを作っていく方法である。

筆者も基本的な考え方はこの語彙的ネットワーク・アプローチに賛同しているが，イメージ・スキーマの図による提示のしかたには限界があると考えている。上の *over* の例でもLMとTRは図で提示されることが多いが，一見してわかりやすい半面，具象空間での移動以外では描き落とされるという意味分析上の問題もあり得る。イメージ・スキーマの図はメンタル・イメージの視覚化ではなく，意味のある位相面のスキーマ的表示である (Sweetzer 1988) とするが，次章で触れる推論的意味成分など具象空間の移動のスキーマでは捉らえられない面もあり得る。また，類義語の場合，イメージ・スキーマを同じにするのかどうかはまだ研究が十分に発展していないことからも扱いがはっきりしない(補注1)が，同一形式の多義語分析を扱う以上，違う形式で表わされる類義語は違うスキーマを与える必要があると思われる。意味分析がより厳密化していくと問題が生じる可能性があると考えている。

次節ではこの点を考慮に入れた意味成分による表示の可能性を検討してみたい。

2.3 本稿の立場

2.3.1 孤立系の意味

本稿では意味を分析するに当たり，一般論として「形式が意味を規定する」としたい。つまり，本動詞と補助動詞は同じ形式をもつ動詞であり，統合して分析できる対象だということである。また，文脈に干渉されないレベルの意味ということで「孤立系の意味」を設定したい。いわば，英語などの動詞の「不定形」と「定形」の関係と似たようなことを意味レベルでも考えたいのである。孤立系の意味は文脈からの影響をいっさい受けていない状態の意

味である。孤立系はあくまでも静的体系として存在している。意味は文脈によって変化するのは周知のことだが，我々は，単語を単語として認識することもできる。辞書の見出しや日本語教育における単語提示のフラッシュカードなどがその例である。例えば，先ほどあげた「走る」と「歩く」の場合，単語として認識して思い浮べるのはそれぞれ早足で移動する動作であり，人間が人間の力で普通の速度で移動する動作である。しかし，文脈が加わり，「その場で」や「速く」に影響されると単語として認識していたときとは違う意味に変容する。単語として認識する場合，特に動詞の場合，心的空間に誰かを思い浮べることもあるが，一般的に言って，認識の原点としては自己かあるいは自己がデフォルメされた姿を思い浮べるのではないだろうか。

また，本稿では意味成分を分析の装置として用いるが，意味成分を分析する場合，まず，慎重に孤立系の意味を考察し，それから文脈内での意味を調べていくことにする。

孤立系に含める意味の情報は文法的情報にも繋がる，格関係の意味範疇情報をも含める。また，本稿では扱っていないが，類義語等の分析においてはミニマル・ペアによって得られた弁別的な意味成分を立てる可能性もある。

2.3.2　文脈からの干渉による意味の変容・拡張

文脈と意味との関係については，「実際使用においては，ある語が置かれている文脈がその語の意味に相互作用を及ぼす」という基本的理念を示しておきたい。「実際使用においては」と断ったのは，実際使用での意味と文脈から切り離された状態での意味を区別するためである。ここでの「文脈」はかなり広義に使っている。孤立系の意味成分が文脈相互作用を通して影響を受けるというモデルを考えている。文脈内での意味の決定は，用法ごとにグルーピング化された例から抽出できると考えられる。このグルーピングを本稿ではクラスターと称することとする。

ここで，意味成分というと条件反射的に現れる反論に対して，少しだけ述べておきたい。意味成分に対して行なわれる反論とは，「一体どうやって意味成分を決めるのか，意味成分が無限に広がっていくことはないのか」という疑問である。ここでは，意味成分を文脈内で使用された場合の用法ごとに，確かめながら立てていくので無限になることはない。むしろ，意味成分を意味の変容を捉らえる装置として考えており，用法ごとに無限にふえていくことはないのである。

先に概念意味論で日本語動詞を検討したが，短所の１つとして類義語に同じ概念構造が与えられてしまうことがあった。意味成分であれば，関連する単語動詞小さな相違点でも表わすことができ，有効であると思われる。

次に，孤立系が有する「中心的な意味」(補注２)の他に「推論的意味」(Nida 1975) があるが，こ

れについて触れておきたい。推論的意味は語が本来的に有する意味から推論によって導き出される意味で，例えば，ナイダは *shoot* には「相手が死ぬ」という推論的意味があると述べている。推論的意味は経験基盤による知識が必要とされ，異文化間コニュニケーション上の障害の原因の１つとなり得るものである。第２言語教育においては留意すべき意味の一つであろう。例に上げた，*shoot* に対しての「死ぬ」は文化による相違も少ないだろうが，例えば，物をあげたときに当然のようにお返しを考える社会では，やり取りの動詞に本来的でない意味が付加されることになる。これは理想認知モデル（Idealized Cognitive Model＝ICM）とも関係があろう。理想認知モデルでは，Lakoff（1987）では次のように説明している。

(15) われわれは理想認知モデルを用いて知識を組織化するのであり，カテゴリーの構造，ならびにプロトタイプ効果はそうした組織化から生じる副産物である。例えば，「火曜日」は１日という自然な周期とより大きな７日からなる暦の周期を含む理想モデルを参照してはじめて定義づけることができる。

我々は，知識として，火曜日は週の３日目ということを知っている。あるいは，インドネシアのバリでは宗教的意義を見いだすために必要な暦との関係で捉らえるかもしれない（Lakoff 上掲書）。また，例えば，日本では物をもらったらお返しをするという経験によって得られる一種の理想モデルができており，そこから逸脱するのは社会的につらいことである。これは中元歳暮に対しては廃止の意見がある一方で，毎年繰り返される熱心な商戦，それに乗る消費者の行動からも明らかである。

さらに，この認知モデルは複数集合して集合体モデルを形成することもあるという。集合体モデルとして Lakoff は「母親」の例をあげている。

(16) 出産モデル
遺伝モデル
養育モデル
結婚モデル
家系モデル

複雑な社会であるアメリカでは上のモデルが交錯した状況がしばしば起こりえるのかもしれない。養子，人工受精による代理母，遺伝子操作による出生などを考えると，「母」という概念化がどのモデルを通して行なわれるか，問題になる。語の意味にはこのような理想認知モデルが大きく関わっており，意味分析する際には注意を向ける必要がある。なお，理想認知モデルは，Fillmore（1982）の語が喚起する場面などの「フレーム」の考え方と合わせて，文化的背景も折り込みながらモデルを構築していく必要があると思われる。

本稿の意味分析では，孤立系が有している中心的な意味は文脈からの干渉によって意味が拡張したりすると考える。これを意味成分で捉らえ，抽象化過程のメカニズムに応用するつもりである。概念意味論では十分に表わせなかったことである。文脈からの干渉には人称やテンスなどの文法情報も含まれる。直示動詞であるクレルなどは「誰に」もらったかなど，直示的な情報も重要になる。上述の意義素論では用例から純化抽出したものを意義素と捉らえていたが，ここでは，はじめに語彙に固有の孤立系の意味があると考え，用法は文脈からの干渉を受けることによって方向付けられるとする。用法そのものについては，用法ごとにまとめられるクラスターが意味の抽象化過程を分析する上での，まとまりとする立場を取る。

2.4 さいごに

次章から個々の動詞の意味分析に入るのだが，本章を終わるまえに，補助動詞の意味を本動詞の意味と関連づけて分析する場合に，よくでてくる質問に答えておきたい。その質問とは「意味変化は歴史的な変化の結果であり，あくまでも通時的研究で分析してこそ意味があるのではないか」というものである。しかしこの疑問に対しては，次のように答えておきたい。歴史的にどう変化し，その結果がどう残っていようと，共時的にもその変化の過程に沿いながらも，歴史的時間軸に沿わずに認識する以上，やはり，共時的な認識の研究として取り上げる価値があるということである。抽象化という認知操作の傾向が明らかになると同時に，歴史的な変化を探り，現在の認知のしかたを分析できれば，将来的な予測もできるかもしれない。

以下，日本語補助動詞に見られる概念化を意味の抽象化過程を通して考察していくが，考察にあたり，問題の所在を箇条書きにして明らかにしておきたい。

(17) ・Lakoff らの研究による意味の拡張は，メタファーに力点がおかれているが，それだけで日本語の場合も説明できるのか。
・メタファー以外の動機付けもあり得るのか。
・意味成分を用いるとどのように表現できるのか。

分析方法としては，本稿では意味連関の構造を調べるために，例文データを用例に応じてクラスターに分類し，それぞれの意味分析を行い，それを意味成分で示し，クラスター間の連関性を検討するという手順を踏む。その際，上で述べた「孤立系」の意味との関係を中心に考察していきたい。

では，次章より補助動詞用法をもつ各動詞について，意味が抽象化していく過程を見ていくことにする。まずはじめに，第3章で直示動詞である，受給動詞ヤル・クレル・モラウ，

第4章でイク・クル，続いてイル・アル，オク・シマウ，最後にミルを検討することにしたい。

注

（1） 一般に文法化現象についてはじめて言及したのは Antoine Meillet とされるが，遅くとも10世紀以来，中国の著述家たちは言語象徴の「実」と「虚」について触れているし，Zhou Bo-qi (A. D. 1271-1368 の期間）はすべての虚の象徴はもともとは実の象徴であったと論じている (Heine, Claudi and Hünnemeyer)。

（2） ここでは「文法化現象」という用語を，各分析レベルを統括した言語現象として捉えている。

第3章　動詞ヤル・クレル・モラウにおける意味の抽象化過程

3.0　はじめに

言語は世界を分割するという考え方がある。これに従うと，非母語話者が日本語を学習する際，日本語の世界分割のしかたを習得するということになる。世界分割というと平面分割のような印象を受けるが，言語形式の多くは比喩的意味拡張などを起こすことにより，奥に広がりを持っている。補助動詞用法を持つ動詞も本動詞の意味から派生されたことは言を俟たないが，補助動詞になった場合，本動詞の意味をどれほど維持し，また，失っているのか，すなわち，意味の抽象化の過程はどのようなものなのか。動詞ヤルとクレルとモラウを対象に意味の抽象化過程を明らかにすることが本稿の目的である。自由形態素である語彙が拘束形態素に変化する過程だと一般的に規定できる文法化現象を意味論的に捉らえると，具象的意味から抽象的意味への，また，語彙的内容から文法的内容への変化過程である（Heine *et al* 1991）。意味の抽象化過程の研究は文法化現象の意味論的研究でもある。抽象化過程を解明することは，また，日本語学習者が意味をどのように習得するのか，あるいは習得に困難が生じるのはどのような場合か意味習得過程の解明の手掛かりとなり，役立つと思われる。

以下，本稿では受給動詞ヤルとクレルとモラウの本動詞用法と補助動詞用法の意味を統合的に分析し，ヤル・クレル・モラウの意味の抽象化過程を考察する。方法としては，用例を用法に応じてクラスターに分類し，それぞれのクラスターの意味を分析し，クラスター間の意味の連関性を検討するという手順を踏む。

なお，ヤルには次のような用法もある。

（1）　言語学をやっています。
（2）　スキーをやっていて骨折した。

ヤルは（1）（2）のヤルと受給動詞ヤル[(1)]を含む多義語である。しかし，本稿の目的は意味の抽象化過程の分析であって多義語の分析を目的とはしていないので，（1）（2）は本稿の考察対象からはずすことを予め断っておきたい。

以下，ヤル・クレルの順に意味を分析し，その後合せて意味の抽象化過程について考察する。

3.1 動詞ヤルの意味分析

3.1.1 ヤルの用法

本動詞用法のヤルは(3 a)のような例であるが，やはり動きを伴う本動詞ヤルの例に(4)のようなものもある。

(3) a．子供に僕の切手帖をやった。
　　b．子供に土地100坪をやった。
(4) a．部長は川田君を東京へ遣った。
　　b．子供を自分たちの部屋へ遣った。

本稿では(4)も動きを伴う用法をもつヤルであることから，受給動詞ヤルとの関連で分析対象とする。(3 b)は移動が所有権に限られている。

一方，いわゆる恩恵の移動を伴う補助動詞用法は(5)のような例である。

(5) a．夏休みに子供を遊園地へ連れていってやる。
　　b．洋子は義夫にセーターを編んでやった。

宮地 (1965) は内外二重の主述関係を指摘しているが，(5)は外側に「私が子供に～やる」「洋子が義夫に～やる」の構造を持ち，内側に「私が子供を遊園地に連れていく」「洋子が義夫にセーターを編む」の埋め込み構造があると考えられる。この場合，外側の構造に「私」と「子供」，あるいは「洋子」と「義夫」という恩恵的行為の与え手と受け手が存在している。

(5') a．夏休みに［私が子供に［私が子供を遊園地へ連れていって］やる］。
　　b．［洋子は義夫に［洋子が義夫にセーターを編んで］やった］。

しかし，恩恵的行為でない用法や，外側の構造の与え手と受け手がはっきりしない用法もある。

(6) a．(強制的に入院させられた酒飲みの発話) 退院したら殺してやる。
　　b．(見返すために) ここから飛び降りてやる。
(7) 今度こそ司法試験に合格してやる。

大江 (1977) は(6)のような恩恵的行為でない用法を「皮肉」で説明している。すなわち，恩恵を受けることを表すテクレルにはマイナス恩恵を受けることを表現する「被害受身」があるが，テヤルには「被害能動」に当たる表現が無い，そこで皮肉を込めてテヤルで補い，

マイナス恩恵を表す，という考え方である。しかし，後述の通り，ヤルは常に恩恵を表すとは限らず，このヤルが常に恩恵を表すことを前提とした議論は首肯しがたい。

一方，例文(7)や下の例(8)(9)のように，働きかけの相手が認められない用法もある。

(8)　もういっぱいだけ飲んでやろう。
(9)　そんなことはやめなさいと言われると，意地でもしてやろうと思ったわ。

これらは外側の構造に受け手が存在しないという特徴がある。豊田（1974）では，テ形で表される動詞が自動詞や，また他動詞でも人が対象になっていない場合などはもとの動詞，すなわち，テ形動詞の強め，自己主張，自己意志の顕示を表し，無意志的な動詞ですら意志化されると記述している。筆者もこれを受けて，「意志のクラスター」とする。(8)(9)はともに意志形で現れており，「意志」は語形変化によって表されているのではないかという疑念がわくかもしれない。(10)のように命令形でもやはり意志を表すことから，意志は意志形によって表された意味ではないことがわかる。

(10)　もうちょっと飲んでやれ。

また，この用法は自動詞テ形にも接続する。

(11)　こんな傷，明日までに治ってやる。

次に，(12)(13)を見てみよう。

(12)　たまっていたグチを夫に言ってやった。
(13)　ボールをそっちへ投げてやった。

豊田（1974）は，これらを方向を表す用法とし，この用法のヤルに付きやすい動詞として，「言う・書く・答える」などの言語活動に関係のある動詞，言い換えれば情報の移動のある動詞，「落とす，投げる」などの位置の変化・物の移動を意味する動詞をあげている。これらの方向を表す用法を「方向のクラスター」とまとめる。

もう一つ，(14)(15)の例は相手に行為の結果が及ぶことを意識しているという点で「意志を表す用法」とは違い，「行為の影響を受けるクラスター」と別扱いにする。

(14)　先生に言い付けてやる。
(15)　そんなひどいこと言うなら，あんたのこの写真，よし子さんに見せてやるからね。

「先生」や「よし子さん」は外部構造テヤルの受け手ではない。「先生に言い付けてお前を困らせてやる」「よし子さんに写真を見せてあんたを恥ずかしがらせてやる」を表している。「行

為の影響を受けるクラスター」はこのようにテヤルの受け手が間接的に影響を受けることを表す用法である。

3.1.2 ヤルの意味

以上，ヤルを6つのクラスターに分類した。分類結果の意味を考察するに当たって，まず，前章で述べた孤立系の意味から考えていきたい。孤立系は文脈から独立しているが，単語認識においては，単語ヤルを認識の中心である自己を基本に据えて考えるだろう。つまり，「自分が他の人に何かをやる／与える」ことになろう。意味成分としては，2人が関わっており，物の移動に関して，＜起点＞と＜着点＞がまず必要である。そして第1章でも述べたとおり，所有権と物の移動両方を表わす＜移動＞成分が必要になる。（概念意味論では所有権の移動のみを表わした。）また，ヤルとクレルの対比から遠心・求心を表わす＜方向＞成分が必要になる。並べて書き直すと，ヤルの孤立系の意味成分は＜移動＝具体物・所有権＞＜起点＝自分＞＜着点＝他者＞＜方向＝遠心＞になる。

次に，6つのクラスターの意味を考えたい。すなわち，(3)の本動詞ヤル，(4)の遣ル，(5)のいわゆる恩恵の補助動詞ヤル，(8)(9)の意志，(12)(13)の方向，そして，(14)(15)の行為の影響である。(3)の本動詞を孤立系をもとに考えると，物の授受とは，具体物と所有権が行為者から他者に遠心方向に移動することである。これをもとに図1のように意味成分を設定すると，他のクラスターもこの意味成分から説明がつく。

図1で「遣ル」の＜起点＝行為者地点＞は原則である。実際は電話等で指図することもできるので，起点が行為者のいる地点とは限らない。ただしその場合も，方向が求心になることはない。

(16) a．＊本社社長は支社の川田君を本社事務所へ遣った。
　　 b．　本社社長は支社の川田君を本社事務所へ呼んだ。

また≪≫で囲んでいる≪恩恵≫は物の所有権の移動に付随するもので，推論的意味に属する（Nida 1975)。これが発生するのは，前章で述べた理想認知モデルに，日本社会では物をあげるとお返しをしなければならない，という社会の習慣ができており，物をもらうのは単に物の所有権の移動にとどまらず，有り難い感情や恩義が出てくるのであろう。そこから≪恩恵≫が生れてくると考えられる。孤立系では特に意識しなくても，具体的な人間関係が生れると≪恩恵≫の意味が現れると思われる。言い換えれば，受給動詞本来の意味ではなく，文脈内で他者との関わりの中ででてくる意味だと考えられる。

恩恵の補助動詞の場合，＜具体物・所有権＞が＜行為＞に抽象化されている。存在論的には＜行為＞も＜具体物＞も共に「何」で認識されるカテゴリーである。行為の影響の補助動

孤立系

<移動＝具体物・所有権>
<起点＝自分>
<着点＝他者>
<方向＝遠心>

遣ル	ヤル	恩恵Vテヤル
	≪恩恵≫	≪恩恵≫
<移動＝人間>	<移動＝具体物・所有権>	<移動＝行為>
<起点＝行為者地点>	<起点＝行為者>	<起点＝行為者>
<着点＝空間地点>	<着点＝他者>	<着点＝他者>
<方向＝遠心>	<方向＝遠心>	<方向＝遠心>

方向	意志	行為の影響
<移動＝行為>	<移動＝行為・事態>	<移動＝行為の影響>
<起点＝ ϕ>	<起点＝ ϕ>	<起点＝ ϕ>
<着点＝ ϕ>	<起点＝ ϕ>	<着点＝他者>
<方向＝遠心>	<方向＝ ϕ>	<方向＝遠心>

図１　「ヤルの意味の連関」

詞クラスターでは<起点>は意識されず，また，<移動>も<行為>から<行為の影響>へとさらに抽象化されている。方向の補助動詞クラスターでは<起点>も<着点>も意識されず，<方向>成分が強調されている。また，意志の補助動詞クラスターでは，意志とは，<着点>が「行為が達成された願望達成状態」でそこに向けて<行為・事態>を仮想的に移動させることで説明できよう。

次に動詞クレルについて同様の分析を行ないたい。

3.2　動詞クレルの意味分析

3.2.1　クレルの用法

まず，本動詞用法は(17)のような例である。

(17)　a．山本さんが私にメロンをくれた。

b．お客さんがチップをくれた。

c．隣の子供が折り紙の鶴をくれた。

また，いわゆる恩恵の補助動詞用法は(18)のようなものである。

(18) a．山本さんが私にブラウスを買ってくれた。

b．洋子さんがセーターを編んでくれた。

c．吉田さんが見舞に来てくれた。

ヤル同様，外側の構造に「山本さんが私に～くれた」「洋子さんが私に～くれた」「吉田さんがわたし（のところ）に～くれた」の構造があり，内側に「山本さんが私にブラウスを買った」「洋子さんがセーターを編んだ」「吉田さんが私のところに見舞に来る」が埋め込まれている。主語を入れ替えると「私は山本さんにブラウスを買ってもらった」「私は洋子さんにセーターを編んでもらった」「私は吉田さんに見舞に来てもらった」になる。また，「山本さんが私にブラウスを買った」などの埋め込み構造は，(17)のメロンなどのような具体物及び所有権から写像されたものと考えられる。

(18)は状況的意味（山梨1995）が同じものを，主語を入れ替えて言い換えることができたのだが，この言い換えができないものある。

(19) 本因坊：(途中までは)僕が先につぶれたけれど，相手が最後に間違えてくれた……。

棋聖：中盤はよかったが，勝ちと思った瞬間に間違えてしまった……。

棋聖は本因坊に「間違ってあげた」のではない。本因坊が「事態が自分に有利だった」と捉らえているのである。次の例も同様である。

(20) a．一生懸命作った食事をとてもおいしそうに食べてくれるの。

b．天が守ってくれた。

この場合も「(相手が) おいしそうに食べてやる」のではなく，自分にとって事態がプラスに働いていると把握しており，また，「天が私を守った」と自分にとってプラスに捉らえている用法といえよう。これらを「恩恵事態のクラスター」とする。恩恵行為と恩恵事態の基本的な違いは，埋め込み文において自分が着点として含まれている場合を行為，含まれていなくても埋め込み文全体を恩恵として把握している場合を事態とする。豊田（1974）の記述では，恩恵の用法以外の補助動詞は，行為する主体がなくても，状態であっても，あたかも自己に向かって行なわれたように表現する用法だと述べている。次の例も同様である。

(21) 平和な時代が末長く続いてくれれば……という願い

(22)　こんな時，なくなった主人が居てくれたら，どんなにか心強いんだけど……。
(23)　留年していた息子が何とか卒業してくれた。
(24)　庭のバラがやっと咲いてくれた。

さらに詳細に考察してみると恩恵ではないときもクレルを用いることがわかる。

(25)　（小さな子供を連れて里帰りした実家で，張り替えたばかりの障子を子供が破った場面で）
おばあちゃん：まあまあ，やってくれたわね。
おかあさん：まあまあ，やったわね。

おばあちゃんは「また障子を張り替えなければならない」ということが頭に浮かんでいるが，おかあさんの方はそのようなことを考えていないようである。障子を破ったことを恩恵とは考えにくい。また張り替えるという作業が待っている。クレルを用いた場合，「障子を破った」行為の影響が及ぶことを表しているといえる。

また，(26)(27)の例は，明らかにマイナス恩恵とでもいうべきものだが，クレルが用いられている。

(26)　よくも恥をかかせてくれたな。
(27)　あいつがとんでもないミスをしてくれたよ。

大江（1977）はこれらを「恩恵ではないことを恩恵で表す皮肉用法」としている。すなわち，恩恵でない事実に対し，恩恵の表現を用いることによって発話に不適合が起こり，皮肉と解釈されるという。しかしながら，プラス恩恵ともマイナス恩恵とも言い難い例もある。

(28)　サザエさんの家庭の場面で
タラちゃん：カツオにいちゃん，明日のテスト，がんばってください。
カツオくん：言ってくれるねぇ。
(29)　愛人でいいのと歌う歌手がいて言ってくれるじゃないのと思う
（俵万智『サラダ記念日』）

これらは反発を感じながらも受け入れており，プラスとかマイナスとか決めがたく，恩恵とは限らない。むしろ，ヤルと同様，行為の影響が自分にかかっていることを表しており，「行為の影響のクラスター」とする。

3.2.2 クレルの意味

以上，クレルを4つのクラスターに分類した。ヤルと同様，孤立系から確かめていきたい。成分はヤルと同様で，具体物と所有権の<移動>，それらの<起点>および<着点>，遠心・求心を区別する<方向>が必要である。

4つに分類したクラスターは，本動詞クレル，恩恵行為の補助動詞，恩恵事態の補助動詞，行為の影響の補助動詞の4つである。本動詞クレルの意味成分をヤルと同様，<移動><起点><着点><方向>と設定しすると，本動詞クレルは<移動＝具体物・所有権>が<起点＝他者・行為者>から<着点＝自分（側）>に<方向＝求心>の向きに<移動>する意味の動詞である。補助動詞についても次頁の図2のように<移動>が<行為><事態><行為の影響>へと抽象化していく。

ヤルと同様，≪恩恵≫は具体物と所有権の移動から，理想認知モデルを通しての推論的意味である。ここでも，意識されなくなった意味成分<起点>があり，また，<移動>の内容が具体物から行為，事態，行為の影響と抽象化していくことになる。

3.3 動詞モラウの意味分析

これまで見てきたように，意味の抽象化を考える際，基本となるのは本動詞であり，これの基盤となるのが孤立系の意味ある。その意味成分のいずれかが抽象化・希薄化を起こすと考えられる。そこで，ここではまず，本動詞の孤立系意味成分の検討から行ないたい。

3.3.1 孤立系の意味成分

文脈から切り離された孤立系での検討は他の動詞との対比で行なえる。すでに関連動詞のヤルとクレルの意味成分が取れているので，それらに準じて，またそれらと対比させながら，意味成分を取り出していけばよい。すでに取り出された意味成分は<移動><起点><着点><方向>である。孤立系では自己が認識の基盤であることを考えると，まず，(30)のようになろう。第1章でも述べたように，原則として着点は自己で，方向も求心であるが，文脈によってその制約が外れることがある。ここでは孤立系を扱うので，<着点＝自己>とした。

(30) モラウ　孤立系の意味
<移動＝具体物・所有権>
<起点＝他者>
<着点＝自己>
<方向＝求心>

孤立系

<移動＝具体物・所有権>

<起点＝他者>

<着点＝自分>

<方向＝求心>

クレル

≪恩恵≫

<移動＝具体物・所有権>

<起点＝他者・行為者>

<着点＝自分（側）>

<方向＝求心>

恩恵Vテクレル	恩恵事態	行為の影響
≪恩恵≫	≪恩恵≫	ϕ
<移動＝行為>	<移動＝事態>	<移動＝行為の影響>
<起点＝他者・行為者>	<起点＝ϕ >	<起点＝ϕ >
<着点＝自分（側）>	<着点＝自分>	<着点＝自分>
<方向＝求心>	<方向＝求心>	<方向＝求心>

図2　クレルの意味の連関

3.3.2　本動詞モラウの用法と意味

モラウの本来的意味，中核的意味（Lakoff 1987）は(31)に見られるように，与え手から受け手への所有権を伴う物の空間移動である。

(31)　a．私は木下さんに本をもらった。

　　b．妹は隣の小母さんにジュースをもらった。

念の為，改めて意味成分を確認してみよう。宮島（1972）では<物の移動>を含む受け動詞の類語カリル・アズカルとの対比からモラウの意味特性として<所有権の移動>を浮き出させている。更に，ウケトルは「単なる空間的な物理的なうけわたしをあらわしている」と，<所有権の移動>の差を述べている。これは次の例からも確かめられる。

(32)　a．　もらったんじゃないよ，受け取っただけだよ。

b．？受け取ったんじゃないよ，もらっただけだよ。

モラウとウケトルは所有権の移動の有無を異にして包含関係にある語であると言える。

次に，同じく所有権の移動を表すヤルとクレルとの対比から＜起点＝他者＞＜着点＝(原則的に）自分側＞＜方向＝求心＞の導き出しが確認される。

(33)　a．私は君に本をやる。
　　b．君は私の本をくれる。

孤立系の意味成分の妥当性を類義語としての対比により確かめてみた。さらに文脈におかれ，対人関係の中で用いられると，先にも述べた理想認知モデルから，「お返し」に関しての推論的意味の意味成分である≪恩恵≫が生じてくる。

(34)　a．＜移動＝具体物・所有権＞
　　＜起点＝他者＞
　　＜着点＝自分側＞
　　＜方向＝求心＞
　　≪恩恵≫

本動詞用法のうち，本来の意味からずれた例として，宮島（同掲書）は(35)をあげ，「全体として所有と言う観点をうすくし，抽象化する方向に向かうか，あるいは，本来の意味から分かれた第2の意味を生じるか，両方の可能性があると思われる」と説明している。

(35)　a．ぢぁあ飲むよ。……此奴へ貰ほう。
　　b．ちょっと本をもらいに来ました。
　　c．其の晩勘次は二人を連れて近所へふろを貰ひに行った。

ただし，(35c)の場合は，＜物の移動＞成分も希薄になり，＜所有権＞はむしろ＜使用権＞に近づいているようにも見えるものの，湯を消費するという点で＜所有権＞に近いとも言える。

(36)　(店でテーブルの上の食器を片付けながら）あ，それこっちにもらいます。

この場合，食器は店の所有物なので，＜所有権の移動＞に関しては失われて，＜物の移動＞のみ維持されているといえる。

また，＜移動する物＞が可視的具体物から抽象物へと変化した例としては(37)があげられる。

(37)　a．芥川賞をもらう。

b．１等賞の栄光をもらう

小泉他編（1989）によるモラウの記述には特に「所有権」という表現は見当たらないが，以下のような例文は所有権に関する例外的用法と言えよう。

(38)　a．この試合は俺がもらった。
　　b．勝ちをもらう。
　　c．３日間の猶予をもらう。
　　d．少し考える時間をもらいたい。

(38a)(b)の場合，＜具体物＞が＜勝敗＞という抽象物に変わっているが，「(勝を）手中に収める」こと，すなわち，着点に届くことを重視している。(38c)(d)も＜移動する具体物＞が時間という抽象観念に「抽象化」している。念の為に，＜時間＞に抽象化したといっても後述する移動経路が空間から時間軸へと写像した場合とは違うことに注意しておきたい。

またこの抽象化の過程には＜具体物＞と＜抽象観念＞の間に＜人＞が入りえる。

(39)　孤児を養女にもらう　　(小泉他編（1989))

この場合，＜起点＞は必ずしも＜所有権＞（これに関しては「親権」というべきかもしれない）の在りかではない。近代的な考え方では，「娘をもらったぜ」のように＜人＞をやり取りすることは禁忌的なことであるが，「養子／養女にもらう」はまだ使われている。ちなみに，「娘を嫁にやる」等の表現についても否定的見解を取る人がかなりいるのは「＜所有権＞の対象としての，あるいは交換財としての女性」に対する反発である。

なお，抽象観念でも次の(40)が非文になるのは「相手方が（私に）～をくれる」という前提が成り立たなければならないからである。

(40)　＊多くの方々に満足をもらっている。

さらに，補助動詞用法の際問題になる＜働きかけ＞(Masuoka (1981) における Causative Benefactive, Passive Benefactive)，仁田（1991）における「依頼受益」「非依頼受益」）の違いは本動詞でもみられる。

(41)　a．資料を吉田さんにもらおう。
　　b．(思いがけず）吉田さんに資料をもらった。

上のように意志形の付加により，＜働きかけ＞が確かめられる。しかしながら、(41a)と(41b)は同じ成分をとっているが＜働きかけ＞に関しては異なる。＜働きかけ＞成分の希薄化は

文脈によるものだと考えられる。意志形が現れれば当然<働き掛け>成分が活性化されるし，「思いがけず」があれば<働き掛け>成分は弱くなる。服部（1964）でいうところの慣用表現などでの「抑圧」(「足を洗う」や「首を切る」での本来的でない「足」や「首」の意味)はこれに似たものをさすと思われる。

以上述べたモラウの中核となる本来的意味成分をまとめると次のようになる。

(42) <移動＝具体物・所有権>
<起点＝他者>
<着点＝自分側>
<方向＝求心>
<働きかけ＝自分側より>
≪恩恵≫

本動詞モラウの意味の抽象化，希薄化の特徴を求めると，<働きかけ>が文脈によって消える場合があること，<移動するもの>は具体物から人，抽象観念へと抽象化すること，<所有権>は消失する場合もあること，<起点><着点><方向>については維持されることがあげられる。

3.3.3 補助動詞の意味

松下（1930）における「利益態」のひとつ「自行自利態」，佐久間（1966）の「依頼受益」をはじめ，～テモラウは使役・受身との関わりで文法的要素として研究されることが多かった。

補助動詞用法で相手方に対して行為の依頼がある場合とない場合は，しばしば問題にされるが，本稿の意味分析の中では意味成分<働きかけ>の維持・消失で説明される。

(43) a．係にチップを渡して楽屋に入れてもらいスワンを呼び出した。 (島16)
b．巨大な鉄管を自分の構想に合わせ，熟練工に高熱で溶断してもらい組み立てる作品は (朝92/10/8E)
c．念の為に警視庁に頼んで機動隊の車を１台まわしてもらうようにしたほうがいいな。 (島16)

(44) a．京大とうちの出町柳駅が近いこともあって学生さんの利用も多い。わが社を分析した本を出してもらったのは，大手私鉄と違うよさを分かってもらえた結果ではないでしょうか。 (朝92/11/18M)
b．一位にしてもらって光栄です。

(43)は<働きかけ>がある場合，(44)はない場合である。(43ａ)は「係」に，　(43ｂ)は「熟練工に」，(43ｃ)は「警視庁」への働きかけが文脈から読み取れ，認められる。

さて，補助動詞用法では，本動詞用法におけるヲ格，すなわち意味成分でいうと<移動するもの・所有権>が埋め込み構造に拡張していると解釈されるのが通説になっている（宮地(1965)，大江（1975）等)。例えば(45)～(46)の埋め込み構造は次に示すとおりである。

(45)　昔は，(隣にはしか患者が出れば）はしかをうつしてもらいに隣へ行ったものだ。
(45')　[私が隣の人に［隣の人が私にはしかをうつす］もらう]
(46)　義夫は洋子にセーターを編んでもらった。
(46')　[義夫が洋子に［洋子が義夫にセーターを編む］もらう]

(45')は埋め込み構造［隣の人が私にはしかをうつす］における起点格と着点格に現れる人物が，外側の構造［私が隣の人に［　　］もらう］における人物と一致している。この場合，与え手と受け手を入れ替えて，[隣の人が私に［　　］くれる］に言い換えることができる。(46')も同様である。しかしながら，次の例ではこの言い換えができない。

(47)　そんなことを言いふらしてもらっては困る。
(47')　[私が［君がそんなことを言いふらす］もらう]
(48)　芸能レポーター「桜田淳子夫妻にはちゃんとやってもらえればいいんです。」
(48')　[私が［桜田淳子夫妻がちゃんとやる］もらう]

(47')では「君」は「私」に対して「言いふらしている」のではなく，「言いふらしている」事態を表現主体が自分と関わりあると認め，モラウを介してその事態を捉らえている。この場合，[君が私に［　　］くれる］とは限らない。(48')も同様である。

以後，(45)(46)のような例を先の例にならい，「恩恵の～テモラウ」，(47)(48)のような例を「行為の影響を受ける～テモラウ」と称する。

「恩恵の～テモラウ」の場合，本動詞の意味成分(42)がどのようになるのかを次に述べたい。(45')(46')で示したように<移動>の内容は<所有権を伴う具体物>から，埋め込まれた<行為>へと抽象化する。ただし，その行為は２者間でなされた行為，すなわち，原則的に有情物を２項取る動詞で，その時具体物でも情報でも「叱る」などのように感情でも何らかの移動物を備えた動詞であらわされた行為である。<起点><着点><方向>は維持される。<働きかけ>は本動詞同様文脈に依存している。なお，<起点>は有情物でなくても可能になる場合がある。

(49)　ａ．この町の優しい空気に傷ついた心をどんなに慰めてもらっていることか。

b．バブルがはじけた今，宝くじに夢と希望を与えてもらっている。

しかしながらこの場合，「慰める」「与える」の<起点>に立つ名詞句を擬人化していると解釈できるので，有情物の一種と言うことができよう。

一方,「行為の影響を受ける～テモラウ」は(47')(48')で示したように<移動>するのは<事態>であり，また，<起点>成分は希薄化する。さらに，<着点>と<方向>は維持される。<働きかけ>は前述の通り文脈に依存していると言えよう。

以上述べた補助動詞用法の意味成分を整理すると次に示すようになる。

(50)　恩恵の～テモラウ
<移動＝行為>
<起点＝他者>
<着点＝自分側>
<方向＝求心>
<働きかけ＝自分側より>
≪恩恵≫

(51)　行為の影響を受ける～テモラウ
<移動＝事態>
<起点＝ϕ>
<着点＝自分側>
<方向＝求心>
<働きかけ＝自分側より>

3.3.4　統合的分析

次に本動詞と補助動詞用法の意味成分を統合して考察してみる。これまで述べた意味成分を合せて記すと下のようになる。

(52)　図3　モラウの意味の連関

本動詞	恩恵の補助動詞	行為の影響
<移動＝具体物・所有権>	<移動＝行為>	<移動＝事態>
<起点＝他者>	<起点＝他者>	<起点＝ϕ>
<着点＝自分側>	<着点＝自分側>	<着点＝自分側>
<方向＝求心>	<方向＝求心>	<方向＝求心>
<働きかけ＝自分側から>	<働きかけ＝自分側から>	<働きかけ＝自分側から>

＜起点＞が希薄化し＜着点＞はそのまま維持されているのは，＜求心＞動詞なので＜起点＞よりも＜着点＞の方がより重要な成分であるからであろう。

従来から言われてきた「恩恵」の意味は，＜所有権＞の移動という意味成分から派生する副次的な意味である≪恩恵≫が2者間での移動があるときに限り付随する推論的意味であると考えられる。

＜移動＞の意味成分が抽象化していくことについては，存在論的カテゴリー(2)でいうと，本動詞の＜モノ＞，恩恵の補助動詞の＜行為＞，行為の影響の補助動詞の＜事態＞はそれぞれ［何］で括られるものである。

(53)　a．それは何か。　＜モノ＞
　　b．何をしたか。　＜行為＞
　　c．何があったか（おこったか）。　＜事態＞

＜移動＞の意味成分が［何］で認識される範囲内で抽象化がおこっているのが分かる。

3.3.5　類義表現の検討

ここで～テモラウに欲求のタイがついた～テモライタイと～テホシイの類義関係について考察してみたい。

本来，願望を表わすシテモライタイとシテホシイはシテクダサイと言い換えられる依頼を表わすことがある。

(54)　a．あの本を貸してもらいたい。
　　b．あの本を貸してください。
(55)　a．正直に言ってほしい。
　　b．正直に言ってください。

願望の用法とは次のようなものである。

(56)　a．　もう核軍拡はいい加減にしてもらいたい。
　　b．#もう核軍拡はいい加減にしてください。
(57)　a．　この長雨，いい加減にやんでほしい。
　　b．#この長雨，いい加減にやんでください。

願望用法では願望内容を達成する相手が不在であることが依頼用法との大きな相違点である。また，これらの形式を文末においた場合，独り言で言う願望と相手に対して述べる依頼とではイントネーションに違いがある。

(58)　すまないが，あの本を貸してもらいたい。

(59)　（独り言）誰かにあの本を貸してもらいたい。

(58)では下降イントネーションだが，(59)は下降しなくてもいい。本節では聞き手の存在を前提にした依頼を表わす用法を扱う。以下の例で見るように，～テモライタイと～テホシイは類似の表現である。

(60)　a．有意義な学生生活を送ってもらいたい。
　　b．有意義な学生生活を送ってほしい

しかし，以下のような例が，相手がその行為をすることをあまり期待していない場合で用いられると受容度に差がでてくる。

(61)　冗談だよと笑って｛？もらいたい／ほしい｝

(62)　仕事の合間に看病の手伝いに来て｛？もらいたい／ほしい｝

(63)　せめてサクランボのようなつややかさだねって言って｛？もらいたい／ほしい｝

許容度に差があるのは，依頼度が弱く願望に近いからと言えよう。

上のことを踏まえ，～テモラウ＋タイと～テホシイの意味を考えてみたい。～テホシイの本形容詞用法は次のような例である。

(64)　a．新しい服がほしい。
　　b．外車がほしい。

ホシイとは「手に入れることを望む」「自分の位置に物を移動させることを望む」ということである。意味成分で言うと，

(65)　＜望む＞
　　＜移動＝物＞
　　＜起点＝他所＞
　　＜着点＝自分＞
　　＜方向＝求心＞

ということになり，モラウに＜望む＞が付いた成分を有している。現在までの分析で異なる

点は≪恩恵≫成分の有無である。望んでいるだけでは≪恩恵≫を表わすまでいかず，これが違いになるようである。また，補助動詞，補助形容詞になると，＜移動＞が＜行為＞になるところまで同じである。(61)～(63)でみた差を意味成分に投影させるとすれば，＜働き掛け＞成分が相手に行為を起こさせるように働き掛けることが影響しているものと思われる。

3.4　受給動詞の運用

本節では上の意味分析を踏まえ，受給動詞のうち次の(66)に見られるような，本来話し手に向かうべきクレルが聞き手に向かって用いられる本来的用法からはずれるクレル[(4)]と(67)のような（サ）セテモラウがどのような状況で用いられ，どのような機能を果たすのかを考察する。ただし，ここではイタダクは用いず，モラウで分析する。

(66)　a．こんなもの，おまえにくれてやる。
　　b．痛い目にあわせてくれようぞ。
(67)　a．お先に失礼させていただきます。
　　b．『日本語学』の先月号に載っていた先生の論文，読ませていただきました。

(66)のようなクレルは蔑むような場面で用いられ，(67)の（サ）セテモラウは遜りの場面で用いられる。以下，それぞれについて検討を試みたい。

3.4.1　蔑みのクレル

恩恵のＶテクレルを簡略化して次のように規定しておく。

(68)　ＧＩＶが　（ＥＧＯ＝）ＲＥＣに EVENT（テ）クレル
　　cf.（ＥＧＯ＝）ＧＩＶが　ＲＥＣに EVENT（テ）ヤル
(69)　a．君がぼくに鉛筆をくれたから，ぼくは君に消しゴムをやるよ。
　　b．君が僕の妹に鉛筆をくれたから，ぼくは君に消しゴムをやるよ。
　　c．お隣さんがうちの坊やにキャラメルをくれた。
　　d．お隣さんはあなたにもキャラメルをくれたのね。

ＥＧＯは自分あるいは自分側の人間であり，他称と対称では対称のほうがより強いＥＧＯである。ＧＩＶとＲＥＣの ego-centricity に関わる制限は対話場面だけでなく，中立的な場面でも維持される。このようにクレルはＲＥＣがＥＧＯのときの与え動詞である。しかしながら，本来ＯＢＪまたは EVENT がＥＧＯに向かうべきクレルが(66)や次の(70)のように聞き手すなわち，non-EGO に向かって用いられるような用法もある。

(70)　（自分の意志を無視して叔父が勝手に決めた，こんな縁談なんか）断ってやる，断ってくれる！（独り言で）　（めぞん）

(70)は同一の状況をいうのに本来的な ego-centricity に基づく(テ)ヤルと，逆転用法の(テ)クレルを連続して発話している。この場合，何らかの感情が高まって（テ）ヤルを（テ）クレルに言い換えている。このことは本来的用法がもつヤルとクレルの ego-centricity に関する相補分布が崩れることを意味している。これらの例を見てみると，クレルが non-EGO に向かって用いられるのは，もっぱら相手（(66)では聞き手，(70)では叔父）に対して蔑んだり憎悪に似た感情をもつときである。また，この用法に独特の使用制限も見られる。そこで，本節ではこの用法をクレルの特殊な用法と規定し，「蔑みのクレル」と呼ぶことにする。

この蔑みのクレルには，上述したとおり，いくつかの使用制限がある。まず，(66 a)をクレテヤルから本動詞だけのクレルに言い換えると非文になる。

(71)　＊こんなもの，おまえにくれる（ぜ）。

また，クレルを敬語形であるクダサルに変えてみると，これも非文になる。

(72)　a．＊これを先生にくださって差し上げる。
　　b．＊痛い目にあわせてくださいましょう。

さらに，補助動詞（テ）クレルを（テ）クレタにしてみるとやはり次のように非文になる。

(73)　a．＊（おまえを）痛い目にあわせてくれた。
　　b．＊おまえを殴ってくれたとき，そばに彼女がいたのを覚えているか。

これから，この用法はクダサルにはなく，クレルに限られるが，本動詞クレルだけで現れることはなく，必ずクレテヤルの形で現れる。また，この用法は（テ）クレタにはない。さらに先に述べた ego-centricity に関する自分側と意識する強さを守っても，すべての人称に用いられるわけではない。次の例のように，対称と他称の場合，ヤルは用いられるが，蔑みのクレルは不可である。

(74)　a．君があいつを痛い目にあわせてやるなら……。
　　b．#君があいつを痛い目にあわせてくれるなら……。
　　（#は，文法的だが意図する意味にならないことを表す。）

(74 b)は，（テ）ヤルの代替ではなく「話し手のために」の意味になる。

この用法は，相手を蔑むときに用いられることは既に述べたが，説明のために，反対の目

的で用いられる敬語について考えてみたい。

ドイツ語には，対称に *du*（親称）と *Sie*（敬称）があり，*Sie* は他称複数の *sie* からの転用であることはよく知られている。*sie* という話し手から遠い人に対する語を聞き手に転用することで，相手を遠い存在のように表現して，敬意を表している。Shibatani (1985) は，受動との相関性について，このような例を一般化して，「動作主の非焦点化（defocusing of an agent)」と呼んでいる。すなわち，敬語の普遍的な特徴として，聞き手を動作主とするのを避けるなど，間接性があげれるという。上に述べたドイツ語に見られるような方策は，ヨーロッパの言語に見られ，タガログ語やアイヌ語やグアリヒオ語も同様の方策を用いる。一方，日本語は「貴社におかれましては……」のように手紙文などの形式張った文で見られるとおり，格助詞を主格から与格に変えることで，この動作主の非焦点化を行なっている。柴谷氏の「非焦点化」とは言い換えると，人称の場合，直接的に相手を指し示す語の変わりに，自－対－他の順で遠くなる人称の遠いものを対称の位置にもってくることで，「敬・疎－卑・親」の対立をもつ待遇表現の「敬・疎」の役割を果たしている。

この動作主の非焦点化による敬語の場合とは反対に，人称の近いものを遠いものに，すなわち，自称を対称に転用して相手を蔑む目的で表現することも可能である。人称代名詞の場合を考えてみると，「おのれ」「われ」は，本来自称の代名詞である。しかし，これが喧嘩などの場合になると，「おのれ！」「われ！」などのように，自称を対称に転化，すなわち deictic center を聞き手に移行したかのような表現を取ることで相手を蔑む目的は達成される。これは言い換えると，対称の位置に自称をもってくることで，相手を近づけ，「卑・親」の役割を果たしていると言えよう。

蔑みのクレルも，敬語の方策とは逆の用法ともいうべきもので，本来，話し手にとって求心的な語（「私にクレル」）を聞き手に求心的に転用すること（「おまえにクレテヤル」）で，つまり，人称に関する deictic center を相手に移行させたかのような表現で，相手を蔑む気持ちを表していると説明できよう。

この蔑みのクレルについては，上で記述した使用制限を考え，以下のように述べることができる。

(75)　本動詞クレルは，人称の ego-centricity に支配された，ＯＢＪの所有権の移動を表す語であるが，(66) (70) で見たように，蔑みのクレルの場合は，本来ヤルを用いるところをクレルに置き換える。

しかし，そうすると，ＯＢＪの所有権の移動の方向にも支障がでてきてしまう。そこで方向を表す～テヤルを付加して，所有権の移動の方向についての修正を行なうと考えられる。すなわち，(66ａ)の本動詞クレルは，人称の直示に関する部分だけによって蔑みの効果を，補

助動詞～テヤルは所有権の移動の方向だけをあわらすことになる。補助動詞～テクレルの場合は，埋め込みにあたる EVENT の部分が相手に影響を及ぼすことが明らかなときは，(66 b)(70)のように～テクレルが用いられるが，(76)のような文が，相手に影響が及ぶかどうか分からないときは，不自然になる。

(76) a． 絶対黙っていてやるぞ。
b．?? 絶対黙っていてくれるぞ。

次に，(72)(73)で見たように，この用法ではクダサルやクレタは使えないことについてだが，例()では，蔑みと敬語は相反する概念であって相いれないのは当然であろう。(73)のクレタの付加については，このクレルの用法が特殊なもので，発話時の感情でもって発話時のことしか言うことができないという制約が加わるものと考えられる。

最後に，ＧＩＶ・ＲＥＣの人称に関する制限だが，この用法は(74)のように対称から他称への行為に対しては使えない。ただし，次のような例ではＧＩＶに話し手も含まれており，この場合は使用可である。

(77) あいつを痛い目にあわせてくれようぜ。

この蔑みのクレル用法では，ＧＩＶの人称に関して必ず話し手を含まなければならないという制約が課せられることが分かる。

以上述べてきたように，蔑みのクレルは，この動詞が直示的な動詞であることを利用して，敬語における非焦点化とは逆に，「おのれ」を自称から対称に転化するように，聞き手を話し手に近づけるような人称の転換を見せかけて蔑む目的を達成していることが分かった。その際，発話時であること，話し手を含むという使用の制約が課せられる。

3.4.2 遜りの（サ）セテモラウ

次の例の下線部を比べることから始めたい。

(78) Q：ニュースなどで不愉快に思うことがあります。それは，交番に自首してきた人を「逮捕した」と表現することです。わざわざ悔い改めて自首してきた人に対してあまりにも失礼だと思うのです。「逮捕させていただきました」とか言うのならまだわかるのです。何の苦労もなく手錠をかけるだけの楽な仕事なのですから。私が当の犯罪者なら怒りますし，だれがわざわざ逮捕させてやるか，と思うでしょう……。
A：「自首」するということは「観念してお縄をちょうだいいたしやす」ということです。つまり「逮捕されるために自ら出向く」わけですから，これを望み通り「逮

捕」してあげてもおかしくないのではないでしょうか。……。　（『明るい』）

(79)　ＮＨＫの記者は，取材させてもらっているというより，取材してやっているという態度だ。

(78)(79)はともに，客観主義者のいうところの認知的意味（cognitive meaning）が同じ，すなわち，外的世界での出来事は同じである。(78)は「逮捕する」，(79)は「取材する」ことであるが，下線部の表現はそれぞれ話し手の状況のとらえ方は異なっている。本節では「(サ)セテモラウ」の形式で謙遜の意味を表す用法について考察する。これらには次のような例がある。

(80)　a．はじめてレコードを出させていただきました。
　　b．勝手にあがらせてもらいました。
　　c．その仕事，是非やらせていただきたいんですが……。
　　d．言わせてもらいます。
　　e．景品の発送をもって発表にかえさせていただきます。
　　f．食堂車の営業は終了させていただきました。
　　g．（三島由紀夫さんには）ずいぶん甘えさせてもらったと思いますよ。　(M)
　　h．（そこでヤクザが）いきなりおれの腕つかんでな。「おい，おまえ，おじさんな，今，ムシャクシャしとるんや。一発だけなぐらせてもらうで」っていうなり，パッコーンと。　(僕)

まず，この用法の構文を見てみる。宮地（1965）は，使役の助動詞と受給動詞との複合形式について，構文の分析要素を５つ，①主語，②話し手の立つ側，③動作の主者，④方向，⑤使役の主者，を立て，それらを次のように図示して構文を分析している。

(81)　A　　B
　　S◎▽→△（書かせてやる）
　　S▽→◎△（書かせてくれる）
　　▽→S◎△（書かせてもらう）

S：主語	◎：話し手の立つ側
△：「書く」主者	→：方向
▽：「～させる」主者	

この図からも明らかなように「書かせる」主体（▽）はA，すなわち，話し手の立つ側（◎）でないほう（聞き手）で，「書く」という実際の行為を行なうのは話し手である。しかし，行

為の方向はAからBへ向かうとしているが，これらの表現は，話し手の行為－例えば()の例文ならば，「先に失礼する」「論文をよんだ」－についての言明であり，構文の文字どおりの使役の主者は実質的な使役の行為をしているとは必ずしも言えず，想定上の使役である。

(82)　a．お先に失礼させていただきます。
　　b．『日本語学』の先月号に載っていた先生の論文，読ませていただきました。

では，この使役の部分には，どのような動詞の使役形も入るのであろうか。仁田（1989）では，使役形の表わす意味的なタイプを，間接的な働き掛け・直接的な働き掛け（他動的表現と原因の表現）・非働き掛けに分けている。第1のタイプの間接的な働き掛けとは，次の(83)のように使役表現の主体は，許可を与えたり，命じたり，環境を整えたりするだけで，事態の実現に対しては直接的には働き掛けたり関与してはいないものである。

(83)　僕は彼が行きたがっていたので，彼に行かせた。

楊（1989）では，これを「許容使役」と呼び，Xの働き掛けに先立ち，ある動作・作用を遂行しようとする意志，もしくは動作・作用がすでにYの側において見られる，と説明する。次の(84)は，第2のタイプである直接的な働き掛けのうち，他動的表現の例である。

(84)　a．男が車を走らせている。
　　b．台風が激しい雨を降らせた。

(84)は他動的表現のうち，原因の表現の例で，使役表現の主体が，「父が喜ぶ」「彼が悩む」の原因として事態の成立に直接的に関与している例である。楊氏はこれを「誘発使役」と呼び，Xの働き掛けが先に行なわれ，その働き掛けを受けてはじめてYが動作・作用を行なうものと説明する。

(85)　a．娘の成功が父を喜ばせた。
　　b．生活苦が彼を悩ませている。

第3のタイプである非働き掛けの例は，事態成立の阻止をしなかったために事態を成立させてしまった，ということを表わす。

(86)　a．山田選手に30連勝をさせてしまった。
　　b．酒ばかり飲んでいて，胃に穴をあかせてしまった。

以下，これらの使役のタイプを借用して，～テモラウとの結合を考えてみる。上で見たように，実際の行為の行なう主体は話し手（あるいは話し手の立つ側の人）である。

(87)　間接的な働き掛けのタイプ

a．私はどうしても行きたかったので，行かせてもらった。

b．A：冷めるからお先にどうぞ。

　　B：じゃ，お先に食べさせていただくわ。

(88)　直接的な働き掛け・他動的表現のタイプ

a．#私は行きたくなかったが，むりやり行かせてもらった。

b．#ぼくは赤ん坊の頃，時々母の代わりに祖母にご飯を食べさせてもらったそうだ。

間接的な働き掛けの(87)は，それぞれ「(私が) 行った」「(先に) 食べる」と外的世界の事実は同じで，本節で扱う遜りの（サ）セテモラウである。一方，(a)は，言えるとしても謙遜の意味にはならない。これは普通「迷惑の受身」で言われるような文である。(88b)は，自らの力で食べることができない赤ん坊が「食べさせて」もらったのである。「食べる」には着脱動詞で言われるような「着せる－着させる」の対立する形式がなく，「着せる」に対応するものも「食べさせる」になる。(88)の「行かせてもらう」「食べさせてもらう」は，形式的には「(サ) セテモラウ」ではあるが，謙遜の意味にならない。

(89)　直接的な働き掛け・原因の表現のタイプ

a．#隣の騒音には，日々悩ませてもらっている。

b．　あなたの笑顔に心をなごませていただいているのよ。

c．　君の作品は面白いね。いつも楽しませてもらっているよ。

これらの例のうち，(89a)の#は謙遜の意味にならないことを表わしている。(89b)(89c)はそれぞれ「私の心がなごんでいる」「いつも楽しんでいる」と外的世界の出来事は同じであり，かつ謙遜の表現でもあるので，本節で扱っている遜りの（サ）セテモラウの用法である。これらの例から，原因の表現がプラスの意味のとき，言い換えれば，相手から恩恵を受けていると考えられるときはこの形式が使用可能である。

(90)　非働き掛けのタイプ

a．#警察のへまのおかげで，わたしはまた逃げさせてもらった。

b．#（ネズミどうしの会話）ここの家の人はまたテーブルの上に食べ物をだしっぱなしにしているよ。今日もまたおいしいチーズを食べさせてもらえるね。

これらは話し手の「逃げた」「食べる（食べられる）」という行為と外的世界の出来事，いわゆる認知的意味は同じである。しかし，これらは「警察のへまが私を逃げさせて（くれた）」「ここの家の人が片付けないことがおいしいチーズを食べさせて（くれる）」ことを表わし，

相手の落度の結果，話し手が恩恵を受けることを表わしている。形式的には（サ）セテモラウだが，本節で扱っている遜りの（サ）セテモラウとは言えないものである。

以上見てきたように，遜りの（サ）セテモラウは，間接的な働き掛けと，直接的な働き掛けの原因の表現のうち，プラスの意味のときであり，非働き掛けの使役の場合と直接的な働き掛けの他動的表現は含まない。

なお，筆者が採集した文例の中には次に見られるような不自然と思われる表現もあった。

(91) a．ほな，お釣820円渡させてもらいます。
b．（息子が帰ったら）お電話かけさせてもらいます。

この例はそれぞれ「(市場のおかみさんが）お釣を渡す」「電話をかける」であり，間接的働き掛けの使役であるから，謙遜表現になりそうなものだが，特に関東出身の人が違和感を強く感じるようである。また，次のような例も非文である。

(92) a．＊この本を貸させていただきます。
b．＊私の家を見せさせていただきます。

さらに，青木・岡本（1988）では，「申し出」をするときの表現として，テアゲルを使うと横柄（arrogant）に聞こえ，話し手に従わされているような感じを聞き手に与えるかもしれないので，テアゲルは避けるべきだが，親しい間柄なら使われることもあると述べている。そして，形式張った場面では，次の例は(93ａ)から(ｈ)の順に formal な表現になるという。しかしながら，(93ｈ)はかなり不自然な文だと思われる。また，同様な例として，(94)をあげているが，こちらの(94ｎ)もやはり不自然さが感じられる。

(93) a．(私が）持って行きます。
b．(私が）お持ちします（よ／わ)。
c．(私が）お持ちしましょうか。
d．(私が）お持ちしましょう。
e．(私が）お持ち致しましょう。
f．(私が）お持ち致しましょうか。
g．(私が）お持ち致しましょう。
h．(私が）お持ちさせていただきます。

(94) a．送ってあげよう。
b．送ってあげるわ（ママ）（よ／わ)。
c．送ってあげようか。

d．送るよ。
e．送ります（よ／わ）。
f．送りましょうか。
g．送りましょう。
h．お送りします（よ／わ）。
i．お送りしましょうか。
j．お送り致します。
k．お送り致しましょうか。
l．お送り致しましょう。
m．お送りさせて下さい。
n．お送りさせて頂きます。

ここでこれらの表現の機能について考えてみたい。上述の通り，～テモラウには<働きかけ>の意味成分があるが，(88)の例では話し手の「行く」「食べる」という行為を相手が許容するという立場にして，すなわち，「行かせて（やる)」「食べさせて（やる)」とし，話し手よりも上位におく。さらに，その許容を乞い求める（<働きかけ>）ことで，話し手側の立場をさらに低め，遜りの表現になっていると考えられる。このとき，(91)(92)(93h)(94n)でみた不適切な例は，それぞれ，「お釣を渡させてやる」「電話をかけさせてやる」「貸させてやる」「見せさせてやる」「お持ちさせてやる」「お送りさせてやる」になる。まず，(91)の場合，聞き手はお釣を受け取るのをまっているのであり，あるいは電話をもらいたいと思っているのであり，「お釣を渡させてやる」「電話をかけさせてやる」という，その行為を許容する表現はそぐわない。また，(92)の「貸す」「見せる」は，このような場面においては，聞き手が「借りる」「見せてもらう」という立場になり，対人的力関係に関して話し手のほうが上になってしまう。そこで，実際には，「お貸し致します」「どうぞお使い下さい」「お見せ致します」「どうぞご覧下さい」など，より迂言的な表現が選ばれるのであろう。(93h)(94n)については，形式が「オ～スル＋(サ) セテモラウ」である。このオ～スル形は謙譲形であるが，「話し手が聞き手のためにVする」と言えよう。先に述べたように，遜りの（サ）セテモラウの使役部分は話し手の行為を許容するという想定上の使役である。この行為は本節の冒頭にあげた「お先に失礼させていただきます」「読ませていただきました」，あるいは(90)にあげた例からもわかるとおり，話し手の一方的行為をあわらす。そこで，オ～スルは聞き手のためにする行為であるということと，話し手の一方的行為であることは矛盾する。ゆえに，(93h)(94n)は受容不可になると考えられる。

最後に，(89b)(89c)の場合であるが，直接的な働き掛け・原因の表現のタイプのうちプ

ラスの意味のときは，相手の行為などのおかげで，自分が恩恵を受けていることを表わす。相手がわからすると，特にそのような結果を導こうとする意志があったわけではないが，話し手側が「相手のおかげ」と認識しての発話である。つまり，相手が「(話し手の) 心をなごませてやる」「(話し手を) 楽しませてやる」というよりも「心をなごませてくれる」「楽しませてくれる」と認識していると言えよう。この主語の入れ替え，話し手を主語に立てると「心をなごませていただいているのよ」や「楽しませてもらっている」の文ができるのである。

遜りの（サ）セテモラウでは，使役のタイプが間接的な働き掛けと原因表現のプラスの意味の場合に用いられることが分かった。間接的な働き掛けの場合は，相手が話し手の行為を許容するという形式をとって相手を高め，さらにその許容を求めることで話し手側の立場を低め，謙遜の目的を達成する。しかしながら，この場合でも，動詞の意味と状況との関わりで，「貸させてもらう」など言えない場合もあり，単純に形式的に生産することはできない。また，この許容については，実際に聞き手が行為をさせているわけではない。この使役は「虚」のもので，相手が自分に動作をさせることを想定することによって相手を高め，結果的に話し手が謙譲の態度を取ることになる。一方，プラスの原因の使役のタイプの場合は相手から恩恵を受けていることを強調するために，このストラテジーが用いられることが分かった。

3.4.3 む す び

以上，蔑みのクレルと，遜りの（サ）セテモラウについて見てきた。蔑みのクレルは，本来ヤルで言うべきところをクレルに置き換えて表現するクレルの特殊用法であることが明らかになったと思う。この用法では受給動詞クレルが直示的な動詞であることを利用して，人称に関する deictic center を相手に移行させたかのような表現を用い，相手を自分のほうに近づける方策を取り，蔑みの目的を達成する。これは敬語の間接性とは逆の方策である。しかし，この用法は，発話時のことのみを言うに限り，また，話し手が含まれる場面でのみ使用されるという，いくつかの制限が見られることも明らかになった。これはクレルが抽象化しても＜方向＝求心＞の意味成分を維持し続けていることにより，可能になるのである。

遜りの（サ）セテモラウに関しては，「営業を終了する」など話し手の一方的な行為が相手に影響を及ぼすか，相手に関わるとき，直接的な発話を避けて，迂言的な表現を取るようである。その際，相手が動作を許容するような「虚の使役」形式を用い，結果的に話し手が謙遜する表現が選ばれる。これも敬語の間接性という特徴の一種と言えよう。また，「楽しませてもらう」などのように，「原因－結果」の使役を用い，「相手のおかげで」というような相手から恩恵を受けることを強調する場合にも，遜りの（サ）セテモラウが使われる。これはモラウの相手すなわち，与え手に対する＜働きかけ＞の意味成分が発揮する運用方策である。

3.4　抽象化過程についての考察

以上，ヤルとクレルとモラウの意味成分の連関を見た。ここで，抽象化過程について考察していきたい。

本動詞の意味成分＜移動＝具体物・所有権＞から＜移動＝行為＞＜移動＝事態＞への抽象化は「物」「行為」「事態」という「何」での認識内で行なわれている。また，＜行為の影響＞については，例えば「障子の張り替え」の場合，「面倒なこと」であり，＜行為＞「障子を破ったこと」から推意される意味成分だと考えられる。一方，ヤルにおける＜着点＝願望達成＞は，例えば，「傷が明日には治る」という状態を願う仮想的イメージをもっており，そこに到達するように気持ちの中で今の状態から＜移動＞すると説明できる。抽象化過程において＜移動＞の意味成分内での認識の拡張操作，＜着点＞が心的空間へと認識が拡張していくことがヤル・クレル・モラウの意味の抽象化過程の大きな特徴である。また，抽象化は本動詞から補助動詞への過程で「具体物・所有権」から「行為」や「事態」に，あるいは補助動詞内での抽象化の過程でヤルのように＜着点＞が「人」から「心的イメージ」へと大転換することがわかった。

また，抽象化がすすむと，意味成分の内容が抽象化するだけでなく，意識されない意味成分がでてくる，言い換えると，あるいくつかの意味成分にのみ注意が向けられるのである。ヤルとクレルから抽象化過程についてわかることは「意味成分の内容の抽象化」と「限られた意味成分のみ意識されること」の２点が関係していることである。

3.5　おわりに

以上，動詞ヤルとクレルの意味の抽象化過程について本動詞と補助動詞を統合的に分析した。これにより，クラスター間の意味成分の連関性を明らかにした。抽象化は意味成分の内容の抽象化とともに，意味成分に意識されないものがでてくることによって起こることがわかった。

以下，動詞の意味の抽象化について，記号学との関係から簡単に触れておきたい。詳しくは8.4節でもう一度取り上げる。現代記号学の創設者の一人であるパースは，思考（推論的表意作用）の能力は基本的に「感覚」と「注意」の２つの能力または要因からなるとし，また，「注意」とは抽象と不可分の能力と捉らえている（米盛1981）。そして，米盛（1981）はパースの考える注意と抽象は，強調の働き，すなわち，「注意の力によって，強調が意識の客観的要素の一つに対して働く」ことであり，抽象とは「思考が着目する知覚対象の一つの要素を

取り上げて，その他の要素はまったく考慮に入れずに，もっぱらその一つの要素について何かを……推定する働き」であるとまとめている。本稿で見てきたヤルとクレルとモラウの抽象化過程はパースの考える「注意と抽象」と通じるところが多いと思われる。すなわち，意味成分に着目してみていくと，抽象化によってあるいくつかの意味成分だけが強調されていると見ることもできるのである。

次章ではさらにテイク・テクルを分析し，補助動詞用法をもつ日本語動詞の意味の抽象化過程について考察を続け，動詞の意味の抽象化過程についてより広範囲に考察を行ないたい。また，英語等，他言語にも目を向け，方法論の検討を進めると同時に，個別言語ごとに抽象化の特徴が現れるかどうかも分析したい。

例文について

例文のうち出典のないものは，基本的に実例だが前後の文脈から切り放しても理解可能なように修正を加えたものである。

［僕］：中島らも『僕に踏まれた町と僕が踏まれた町』ＰＨＰ

［M］：『住地ゴルフマガジン MENBERSHIP』1990年８月号

［朝］：朝日新聞明るい悩み相談室

［めぞん］：高橋留美子『めぞん一刻』小学館

注

（1） 受給動詞の名称については，他に授受動詞などとよぶこともあるが，本章では佐久間（1966）による「受給動詞」，宮地（1965）による「受給補助動詞」を採用した。

（2） ここでは存在論的カテゴリーとして，以下のものを考えている。［モノ］［場所］［通路］［行為］［事態］［様態］［量］（Jackendoff（1983）参照）

（3） 多義語の分析については国広（1994）に「現象素」を用いた興味深い分析が提唱されている。

（4） クレルの逆転用法にはこのほかに，間接話法に現れるものが久野（1978）や鎌田（1983）によって指摘されている。鎌田氏によると次のような間接話法では，クレルとＲＥＣ＝ＥＧＯであるという共起関係は適用しても，しなくてもどちらでもよくなるという。

(95) 昨日，私の息子がね

ａ．「お金をおやじにやるよ。」って近所の子供に言ってるのを聞いたんですよ。

ｂ．お金を私に｛やる／くれる｝って近所の子供に言ってるのを聞いたんですよ。

さらに，金水（1988ａ，ｂ）では，久野氏の間接話法などの埋め込み構造をメンタルスペース理

論を援用し，「あの映画では，業者が私に金をやっていた。」のような文の受容可能性についても言及している。

（5）　客観主義と対立する概念主義の認知的意味については西村（1989）を参照。

第4章　動詞イク・クルにおける意味の抽象化過程

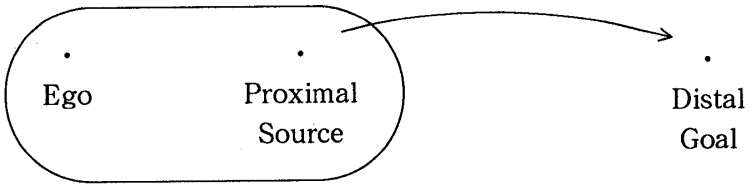
4.0　はじめに

本章では往来のイクとクルの分析を行なう。イク・クルも前章の受給動詞同様，視点の制約を受ける動詞である。

イクが文法化している言語は英語の未来を表わす *be going to* をはじめとして多いが，それぞれに特徴があるのだろうか。ここでは他の言語については詳しくは扱わないが，興味深いテーマではある。

Sweetzer (1988) は文法化における意味変化について見解をまとめるために，英語の *go* について簡単に触れている。そこではまず，下のようなスキーマを図示している。

図1：Go



未来のマーカーへの発展は，上図の線状の経路上の移動によって構造化されたところに「時の意味領域」が現れたとしている。「時の意味領域」の出現はメタファーとして意味の内部構造とは独立した動機付けである。多くの言語で同様の写像が現れると述べている。

本章では日本語のイクを～テイクとともに分析する。その際，ペアの語であるクル，～テクルも扱い，合わせて分析することにする。

4.1　分析方法

本稿では意味連関の構造を調べるために，前章で取り上げたように，例文データを用例に応じてクラスターに分類し，それぞれの意味分析を行い，それを意味成分で示し，クラスター間の連関性を検討するという手順を踏む。その際，上で述べた「孤立系」の意味との関係を中心に考察していきたい。

では，以下動詞イク・クル・ミル各語の意味を本動詞と補助動詞に分けて分析し，その後

統合的に考察することにしよう。

4.2　動詞イクの意味分析

本節ではまず，動詞イクについて分析を行う。本動詞用法，補助動詞用法，統合的分析の順で述べていく。イク・クルはあわせて論じられるのが常であり，またそうすることにより問題点を明らかにしやすいが，ここではまず別々に分析し，第5節でもう一度ペアとして考察することにする。なお，～テイク・～テクル形式については，～テイク・～テクル形式を採る文例すべてが補助動詞と認められるか，あるいは本動詞と補助動詞の両方であるとするかは議論の必要なことである(1)が，本稿では便宜的に～テイク・～テクル形式は補助動詞と呼ぶことにする。

4.2.1　本動詞用法イクの意味

イク・クル・～テイク・～テクルに関しては，先行研究でも空間移動，アスペクトの観点から詳しく考察されている。本動詞用法イクについては森田（1968，1977）に詳しく記述されている。本稿でもこれを取り入れながら考察していきたい。

4.2.1.1　イクの用法

動詞イクが空間移動を表すことを原義とするのには異論がないだろう。まず森田氏のイクに関しての論考を取り出し，まとめると以下のようになる。

（1）　a．場所的移動「……ガ……カラ……へ（ニ／マデ）……ヲ行く」
　　b．届く「……ガ……カラ……へ行く」
　　c．通じる「……ハ……へ行く」
　　d．通行，往来「……ヲ行く」
　　e．到達「……ガ……マデ行く」

これらのタイプにはそれぞれ次のような例文が当てはまる。

（2）　a．①私は毎日大学へ行く。
　　②アポロが地球から月へ行く
　　b．電子メール行きましたか
　　c．新しい地下道は淀屋橋駅へ行く
　　d．センター街を行く人々に笑顔が戻った

e．母の病気は医者が見放すところまで行っていたのに，民間療法で治った。

これらの分類の他にイクには次のような例もある。

（3） a．A：もう一杯いきませんか。まだいけるでしょう。
B：もうこれ以上はダメです。いけません。
b．主人は入院して3日目に逝ってしまいました。
c．しめしめ，うまくいった。
d．にっちもさっちもいかない。
e．アメリカの家は広い。そこへいくと日本のは本当に兎小屋だ。

（3 a）は「飲む」というニュアンスで使われており，（3 c）とともに仮名書きがふつうである。仮名書きであることは本来の意味があまり意識されなくなったことを表していると言えよう。また，（3 b）は「行く」よりも「逝く」あるいは「往く」を当てるであろうが，行クと同じ語として認知されると言っていいだろう。事実，辞書では同項目にいれられている。
本節ではこれらの意味分析を行なう。

4.2.1.2 本動詞イクの意味

まず，動詞イクを文脈から切り離した孤立系の意味を考えると，「～が～から～へ移動する」ということになろう。そこには（4）で示す5つの意味成分が含まれよう。また，イクは直示が問題になる動詞でもある。視点についての制約は意味成分に記載することにする。

（3） イク孤立系の意味成分
＜移動＝人＞
＜起点＝自己側地点＞
＜着点＝非自己側地点＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝遠心＞

森田氏や久野（1978）が述べているように，視点がこの動詞には重要なポイントになることは間違いがない。本稿では視点については＜方向＞＜起点＞＜着点＞の制限に組み入れることで説明を行いたい。つまり，「自己側」としているのは視点がそこに置かれるということである。孤立系はいくら文脈から自由であっても，精神の主である自分自身は無視することができない。自己側と言うと文脈の影響を受けていると誤解されるかもしれないが，認識の基盤は自分自身であることは確認しておきたい。＜経路＞については Jackendoff（1983）は概

念構造のうち FROM (x)，TO (y) をあわせ，「経路 (PATH)」という概念 (PATH (x,y)) を提出したが，ここでは<起点><着点>と並列して<経路>をたてたい。

次に(4)の文脈内で相互作用を受ける使用について見てみよう。(1 a)(2 a)を考えると次のようになる。なお，「ホームベース」は大江 (1975) によるもの[(2)]で，本稿でもこの概念を援用する。大江氏によるとホームベースとは基本的には話し手側というべきもので，拡大使用も可能である。拡大使用という点において「自己側」の規制が緩くなるのでこれを用いたい。

(5)　(1 a)移動 ((2 a)①私は毎日大学へ行く
　　②アポロが地球から月へ行く)

<移動＝発話者，物>
<起点＝ホームベース地点>
　＊<方向＝中立>のときはこの制限がはずれる
<着点＝非ホームベース>
<経路＝空間>
<方向＝遠心／中立>

①は発話者である「私」が（家から）大学へ空間移動することであり，②は宇宙船が地球から月へ空間移動することである。<移動>は「人」を明示しなくてもアポロ宇宙船という「物」でも可能であるが，この用法では「乗物」など「人」のメタファー的拡張を表せ得る場合，すなわち「動物」「乗物」などになる。<起点><方向>の制約がとれて中立的な表現も可能であるが，<着点>がホームベースになることはない。

(1)(2)の他の例文も見てみよう。すでにあげた例に適宜新たな例文を加えてみることにする。

(6)　(1 b)届く ((2 b)電子メール行きましたか)
　　お知らせ，もう行きました？
　　宅配便，もう行きましたか

<移動＝通信・通報>
<起点＝(ホームベース)>
<着点＝非ホームベース>
<経路＝通信路>
<方向＝遠心／中立>

手紙などはホームベースからでもいいのだが，電報など施設に依頼して送る場合や中立的な

言い方場合はホームベースの制約がとれる。

（7）（1ｃ)通じる（(2ｃ)新しい地下道は淀屋橋駅へ行く)
この下水道は隣の市にも行っている。
＜移動＝痕跡＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝非ホームベース＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝遠心／中立＞

国広（1985）では「痕跡認知」について述べているが，（1ｃ)の例は具体的移動物がないにも関わらず，あたかも移動した着点があるかのようであり，この痕跡認知の例と言えよう。「この道は駅まで行っている」などの例でホームベースを起点にすることもできるが，この用法では中立的な使い方も可能である。

（8）（1ｄ)通行，往来（(2ｄ)センター街を行く人々に笑顔が戻った)
＜移動＝人，乗物＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ϕ＞
＜経路＝道路，通路＞
＜方向＝遠心／中立＞

上の通行，往来のヲは上述の Jackendoff (1983) がいうところの＜起点＞と＜着点＞を合わせた「経路」を表しているといえよう。「？広場をあっちこっち行く人がいる」など線的な経路のないものはいいにくくなる。ただし，この場合の起点と着点は厳密な位置づけはない。また，方向も左右方向も許され，必ずしも遠心とは限らないが，「？こっちに向かって通りを行く人々」など求心であることはない。

（9）（1ｅ)到達　(2ｅ)母の病気は医者が見放すところまで行っていた)
＜移動＝(病気の状態という）事態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝非ホームベースの状態＞
＜経路＝観念的進行の経路＞
＜方向＝遠心＞

この例では経路は観念的に持っている病気の進行の道筋といえるが，＜起点＞は特に意識さ

れない。「病気に進行」という表現じたいも「病気の経験上，道筋伝いに進行する」という経験に基づいている。＜着点＞は通常でない状況という意味で，「非ホームベースの状態」とした。事態が移動する場合，＜着点＞は状態になりやすい。さらに(3)の用法の意味を考えたい。

(10)　(3 a)もう一杯いきませんか。まだいけるでしょう。
＜移動＝(飲酒) 行為＞
＜起点＝通常（しらふ）状態＞
＜着点＝限界点＞
＜経路＝酔いにいたる経路＞
＜方向＝遠心＞

飲酒行為は限界へ向かっての道のりと認識されているようである。コンパなどでの「一気，一気，行けー」もこの認識に基づいている。従って，Bさんは「もうこれ以上いけない」限界点に達していると言っているのである。ここから限界，あるいは酔いへの道のりに関係のない場面で，「飲む」の言い換えとしてイクが用いられないことになるのであろう。

(11)　(3 b)主人は入院して3日目に逝ってしまいました。
＜移動＝生命＞
＜起点＝この世＞
＜着点＝あの世＞
＜経路＝あの世への旅立ちの道程＞
＜方向＝遠心＞

(11)の意味成分は比較的孤立系の意味成分から把握しやすい。＜移動＞を生命とするか魂とするかは死生観などとも関わっているが，イメージはこの世からあの世への旅立ちである。我々はあの世に向かっての何らかの道筋を観念的にもっているのであろう。葬儀ではしばしば亡くなった人に対して，「旅立ち」という表現も使われる。

(12)　(3 c)しめしめ，これでうまくいった。
＜移動＝事態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝達成状態＞
＜経路＝事態の進展の道筋＞
＜方向＝遠心＞

(10)や(12)の場合，＜移動＞に具体性がなくなり，経路が観念的になっている。(3 d)「に

っちもさっちもいかない」も(3c)ともに，事態の進展を経路とする表現であろう。(3e)「そこへいくと」は前文の話題の内容を着点とする観念的な言い方である。

ここで見られた表現は我々が観念的に持っている道筋に関するメタファーがイクを使う動機付けになっている。

本動詞用法では孤立系の意味成分からの派生を考察した。次に補助動詞用法を見てみよう。

4.2.2 補助動詞用法～テイクの意味

始めにも述べたように，～テイクはすべて補助動詞と呼ぶべきか，本動詞と補助動詞とに分けるべきか議論のあるところである。それは，～テイクに空間移動を表す用法があるからであり，先行研究では空間移動の～テイクとアスペクトの～テイクを分けて考えている場合が多い。本稿では～テイク形式で現れるものを便宜上補助動詞と呼んでいるが，これは～テイクの空間移動を表す用法が本動詞から転移されたことを無視したものではもちろんない。

ただ，1つ考慮に入れておきたいことがある。吉川（1976）で継起的動作の～テイクとして次の例が挙げられている。

(13)　村からやさいをうりに来た人たちも，いろいろなものをかっていきます。

この～テイクは(14)のネルと同様の補助動詞ではない地位を与えている。

(14)　ごはんをたべてねる。

考慮に入れたいのは(13)と(14)とではイントネーションの違いがあるのではないかということである。

(15)　a．途中でケーキを買っていきます。
　　b．途中でケーキを買って，行きます。

(15b)は明らかに本動詞であるが，それに対して(15a)は「買って（い）きます」のように連音する場合があるので，(15b)と全く同じ地位は与えにくいと考えられる。これは本動詞，補助動詞の規定に関わることなので，さらに考察の必要があると思われる。

さて，本節では時間移動は空間移動からの写像であるとの考えから，まず空間移動を表す用法について見ていくことにする。空間移動を表す用法を含め，先行研究ではいくつかの分類が示されている（森田（1968、1978），吉川（1976）、成田（1981），近藤（1985），森山（1986）など）。本稿は意味の抽象化過程を探るという目的から，より具象的かより抽象的かという意味上のスケールを中心に用例を分けた。まず場所的移動を表すクラスターには次のような例がある。

(16)　a．研究室が留守だったのでメモを残していった。
　　b．ここで水を補給していこう。

これは順次性の移動（森田（1978））と呼ばれるもので，ある地点で前項動詞の行為をし，空間移動するものである。本動詞の場合同様，移動主体のメタファー的表現も可能である。意味成分を示すと次のようになろう。

(17)　順次性の移動の意味成分
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

次に同じく移動で平行性・状態性・複合動作（森田（前掲書）による）を表す例と意味成分を順にあげていく。まず，継続動作を表す意思性の他動詞に付く平行性の移動である。これは「継続動作を表す意志性の他動詞に「いく・くる」が付いたもの」で「両行為は同じ目的から発せられている」とする。

(18)　a．駅まで乗せていってやるよ。
　　b．明日その本を持っていきます。
(19)　平行性の移動の意味成分
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

第2に継続の自動詞につく状態あるいは手段を表す用法を示す。「移動の動詞に付けば手段を，その他の動詞に付いた場合は状態を表すことにな」り，「「いく・くる」の付加によって方向性帯びる」（同上書）のである。

(20)　a．寝坊して駅まで走っていった
　　b．電車の中，座っていけるといいね。
(21)　状態性の移動の意味成分
　　＜移動＝人＞

＜起点＝(ホームベース)＞
＜着点＝非ホームベース＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝遠心／中立＞

第3に方向性を持つ移動動詞に付く用法を示す。

(22) a．大急ぎでうちを飛び出していった。
b．お化け屋敷にはいっていった。

(23) 複合動作の移動の意味成分
＜移動＝人＞
＜起点＝(ホームベース)＞
＜着点＝非ホームベース＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝遠心／中立＞

このように移動を表す用法は基本的に同じ意味成分を有している。というのは，上のクラスター分けの根拠は前項動詞の性質によるもので，～テイクの部分に関しては移動を表しており，意味上の差異が微細であるからである。空間移動の場合，当然ながら経路は空間になる。

今度は空間移動から時間移動に目を転じてみたい。ここでも森田氏に従い分類を提示する。まず，時間的継続から例を示す。

(24) a．どうやって暮らしていくの。
b．年齢を重ねていく。

これらの用法の場合，経路が時間軸になる。そして時間軸上を移動するのは「事態」になる。すなわち，事態の推移を表すのである。時間軸上のホームベースは基本的には「現在」になり，非ホームベースは「未来」になる。

(25) 時間的継続を表す意味成分
＜移動＝事態＞
＜起点＝ホームベース（現在)＞
＜着点＝非ホームベース（未来)＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝遠心＞

次に変化を表す用法である。これは「自然発生的現象を表す無意志性の動詞に付いたときに生じ」るが，意志性の動詞に付いたときもあり，そのときには「話し手の手の届かぬところでなされる行為の場合に限られる」(同上書)。

(26)　a．みるみる顔が青ざめていった。
　　b．夜が明けてきた。

(27)　変化を表す　意味成分
　　＜移動＝事態＞
　　＜起点＝ホームベース（現在)＞
　　＜着点＝非ホームベース（未来)＞
　　＜経路＝時間軸＞
　　＜方向＝遠心＞

空間移動に対し，移動の経路が空間地点を結ぶ軸から時間軸に写像され，抽象化している。＜空間の経路＞は＜時間軸＞に写像されやすい。人間の認識の方向性の一つである可能性もある。

4.2.3　統合的分析

本動詞用法で＜移動＞するのが＜人＞から＜乗物＞へと変容するのはメトニミー (Lakoff & Johnson 19880) による説明が有効であろう。すなわち，人は乗物の一部であり，人を乗せた乗物が＜移動物＞になるのである。また，＜行為＞＜事態＞への転移は受給動詞などでは補助動詞用法になってから現れる転移であるが，イクは本動詞用法で意味の抽象化が見られることが特徴である。

本動詞イクと補助動詞～テイクの意味の連関についてはすでに，空間から時間軸への転換であることは指摘されている（寺村 (1984) ら)。その際＜移動＞するのが，＜人＞から＜行為＞＜事態＞に変化するのは4.2.1および4.2.2で見てきた通りである。上述したとおり，これはすでに本動詞にも見られる意味変化であるので，本動詞からスライドしたと言えそうである。

次節ではイクとのペアの語であるクルについて考察してみよう。

4.3.　動詞クルの意味分析

本節では動詞クルの意味分析を行う。考察の順序は第２節と同様である。

4.3.1 本動詞用法クルの意味

4.3.1.1 本動詞クルの用法

本動詞イクと同様，まず森田氏による分析（同上書）をまとめ以下にあげる。

(28) a．移動「……ガ……カラ……へ（ニ／マデ）……ヲ来る」
b．届く「……ガ……カラ……へ来る」
c．通じる「……ハ……へ来る」
d．到達「……ガ……マデ来る」
e．到来「……ガ来る」
f．出現，生起「……ガ……ニ来る」
g．由来，起因「……ガ……カラ来る」

これらに対応する例文は次の通りである。

(29) a．お客さんがうちにたくさん来た。
b．実家から小包が来た。
c．この地区にもやっとガスが来た。
d．怒りが頂点まで来たとき，脳溢血で倒れた。
e．原稿の締め切り日がすぐそこまで来た。
f．そんなに無理すると，体の弱いところに来るよ。
g．この肝炎はストレスから来たのでしょう。

その他に次のような例が挙げられる。

(30) a．頭にきた。
b．体にがたが来る
c．この顔にピンときたら110番
d．チョコレートときたら目がない
e．理屈でこられたらかなわない

4.3.1.2 本動詞クルの意味

ここでも孤立系の意味成分からたてていきたい。クルは「～が～から～へクル」であるので，意味成分として＜移動＞＜起点＞＜着点＞＜方向＞がたてられる。これに視点の制約を＜着点＞＜方向＞に加えると(31)になる。

(31) 動詞クルの孤立系の意味成分

＜移動＝人＞
＜起点＝非自己側地点＞
＜着点＝自己側地点＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞

次に文脈での相互作用を受けた文を(29)であげた用法別に見てゆこう。

(32)　移動　(29ａ)お客さんがうちにたくさん来た。
(33)　＜移動＝人＞
＜起点＝非ホームベース地点＞
＜着点＝ホームベース地点＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞
(34)　届く　(29ｂ)実家から小包が来た。
(35)　＜移動＝通信・通報＞
＜起点＝非ホームベース＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝通信路＞
＜方向＝求心＞

この場合，＜起点＞＜着点＞は空間地点だが，＜経路＞は通信経路へと抽象化する。通信経路も起点と着点を持つ道筋を我々は認識している。

(36)　通じる　(29ｃ)この地区にもやっとガスが来た。
(37)　＜移動＝物＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝痕跡＞
＜方向＝求心＞

これはイクと同様，経路をガスの普及を痕跡認知した例になろう。

(38)　到達　(29ｄ)怒りが頂点まで来たとき，脳溢血で倒れた。
(39)　＜移動＝感情・状態＞
＜起点＝ϕ＞

＜着点＝終点＞
＜経路＝感情の進行経路＞
＜方向＝ϕ＞

この場合，観念的・経験的に感情が上へ上がる経路を捉えており，着点は経験的に知っている感情の天井である。怒りの感情は「頭に来る」「怒り心頭」など，頭に向かって登っていくイメージで捉らえられている。感情の天井とは，すなわち通常的でなくなることである。

(40)　到来　(29ｅ)原稿の締め切り日がすぐそこまで来た。
(41)　＜移動＝時点＞
＜起点＝非ホームベースの時点＞
＜着点＝ホームベースの時点（現在)＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝求心＞

この用法では＜移動＞は時点である。通常は時間軸上を人間や事態が推移していくのだが，時間軸上を時期が向こうから求心的に移動してくるという認知も行うときがある。「３日先」と「３日後」を比べると，前者は人間が進んで行くのだが，後者は時間軸が移動してくると考えられる。

(42)　出現，生起　(29ｆ)そんなに無理すると，体の弱いところに来るよ。
(43)　＜移動＝事柄＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝観念的進展の経路＞
＜方向＝求心＞

「肉体・精神的現象が「が」格にたつ場合が多く」，「肉体・精神的現象以外の事柄が生起主体となる場合は，生起する場所を「に」格で表す」(上掲書)。(49)であれば痛みなどが外から体というホームベース側に移動すると認識していると考えられる。

(44)　由来，起因　(29ｇ)この肝炎はストレスから来たのでしょう。
(45)　＜移動＝事実・状態＞
＜起点＝原因＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝因果＞

＜方向＝因→果＞

格助詞カラは空間の起点を表すのに対し，接続助詞カラは理由を表すという転移があるが，これとパラレルの現象が(44)である。(45)の場合は＜着点＞が体というホームベースである。「平成不況は経済政策のまずさから来ている」の例では＜着点＞が現状で，経路は因果である同様の用法である。ここから，因果のうち，「原因は遠くに，結果は近くに」という観念が浮び上がってくる。

次に～テクルに目を転じることにしよう。

4.3.2　補助動詞用法～テクルの意味

次に補助動詞用法を森田氏の分析を手がかりに見てみる。基本的にはイクと同様であるが，(46ｄ)のようにクルにしか見られない用法もある。

(46)　ａ．順次性移動
　　ｂ．平行性・状態性・複合動作移動
　　ｃ．時間的継続
　　ｄ．発生
　　ｅ．変化

これらの用法について例を挙げながら意味成分を述べていきたい。

(47)　順次性移動（メモを残してきた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース地点＞
　　＜着点＝ホームベース地点＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝求心＞

(47)は～テイクと同様，瞬間動詞につき，空間移動を表す。本動詞クルの空間移動と同様である。

(48)　平行性移動（本を持ってきた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース地点＞
　　＜着点＝ホームベース地点＞
　　＜経路＝空間＞

＜方向＝求心＞

(48)は継続動詞を表し意志性の動詞に付く場合である。(49)は継続動作の自動詞に付いた場合である。移動の意を含む運動の動詞なら手段になり，その他であれば移動の様態を表す。＜起点＞に関しては本来のホームベースである「家」から移動していても，現在いる場所の方がホームベースとして強く作用する。

(49)　状態性移動（大西洋を泳いできた）
＜移動＝人＞
＜起点＝非ホームベースの地点＞
＜着点＝ホームベースの地点＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞

(50)　複合動作移動（出張から帰ってきた）
＜移動＝人＞
＜起点＝非ホームベース＞
＜着点＝ホームベースの地点＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞

～テイクと同様で，上のクラスター分けは前項動詞に基づくものであり，～テクルに関しては本動詞の空間移動と同じになる。

次に経路が時間軸に転移した用法を見てみよう。

(51)　時間的継続（じっと耐えて暮らしてきました）
＜移動＝事態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベースの時点（現在）＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝求心＞

(51)は継続動作に後続したものである。経験等の継続期間が長いことを表している。

(52)　発生（当時のなつかしい思い出が心にわき出てきた）
＜移動＝状態＞
＜起点＝ϕ＞

＜着点＝ホームベースの感覚空間＞
＜経路＝観念的空間＞
＜方向＝求心＞

(52)の場合，感情の出現を表しており，経路は時間軸ではない。この用法では～テクルによって感情・感覚・アイディア等が無の状態から感覚空間に現れるのことを表現している。＜起点＞は自己の外側ということであり，特に指定できない。

(53)　変化（うれしいことに／困ったことに痩せてきた）
＜移動＝状態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース時間（現在）＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝求心＞

(53)の用法では変化ゼロ状態から変化が始まることを表している。例文の通り変化についての評価はプラスでもマイナスでも可能である。前項動詞は基本的に無意志性の動詞になる。森田（前掲書）では＜着点＞を話し手の立つ時点と解釈している。経路が時間であることは，＜移動＞が状態でもあるので同感であるが，＜着点＞は話し手の立つ時点であることとは限らないだろうと思われる。

また，この他に近藤（1985），張（1992）でも指摘されている用法もある。

(54)　a．公園であそんでくる（近藤（1985）より）
b．妻：(掃除中)
それよりさっきから邪魔なんだけど，2階（うえ）行って母の日のことでも調べてきたら？
夫：それは名案ですね，2階（うえ）に行って調べてきます。
妻：はいはい，一日中調べてなさいな，あー忙し。(天7)

張氏が「逆向型」と呼ぶこの用法は，イクでも置き換えられるような方向が逆のように考えられる空間移動の例である。近藤（1985）では「往復動作が含まれるのであり，通常は「あそびにゆく」のように「に」の前の「あそび」が行われるところが「ゆく」の到着点であるのに対し，「遊んでゆく」の場合にはそこが出発点となり逆の関係となるために問題が生じ，（略）従って通常の場合とは異なり，本来の出発点である発話場所が意味上の出発点とならないために「ゆく」と「くる」が逆転する」としている。しかし，(54b)をみると，妻は夫

に2階にずっといっていてほしいのであるから「調べにいったら」といってもいい場面であり，なぜ～テクルを用いるかがはっきり分からない。この用法のクルの意味成分を考えると次のようになろう。

(55) 逆向型
＜移動＝人＞
＜起点＝2階＞
＜着点＝1階＞
＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞

～テクルによって表される＜着点＞はやはりホームベース，すなわち現地点であり，この～テクルによりまた戻ってくることを表し，ぶっきらぼうな印象をやわらげる効果があると思われる。

4.3.3 統合的分析

イクの場合と同様，クルも本動詞用法で，すでに抽象化された意味を有している。＜経路＞が空間から観念的なもの，時間軸，因果など多様な様相を呈し，本動詞のうちに抽象化がかなり進んでいる。また，補助動詞の場合も，空間移動，時間軸移動，感覚空間への＜移動＞と広がっている。空間移動から時間軸への移動は Sweetzer (1988) の記述を冒頭にあげたが，人類の認識上よく行われることである。例えば，指示詞で「その本」が「その時」へ，格助詞「家から学校まで」が「今日から明日まで」などに写像される。日本語においても御多分に洩れず，空間から時間軸への写像は本動詞の段階で起こっている。また，～テクルの空間移動・時間軸移動の＜経路＞は本動詞からの写像で説明されるだろう。ただ，Sweetzer (1988) の記述の中で，「*go* はあくまでも distalであり，goal は未来でなければならない」という部分があるが，現在の実生活ではそれですむが，映画の世界などで，タイムマシンに乗って旅する場合，過去も遠心方向の着点になり得る。例えば，バック・トゥ・ザ・フュチャーで「ドックとマーフィは20年前を体験してきた」や「体験しに行った」などの表現が可能になる。英語でも *go* で表わせると思われる。

ここでイクとクル両方を視野に入れて相違点を中心に考察してみよう。イクにはなかった用法でクルには因果を表す用法があった。「原因は遠く，結果は近く」というイメージである。これは「～から～がおこった」「～だから～」でも同様に，空間の起点を原因に写像している。また，～クルには「発生」を表す用法も特徴的であった。これはクルが求心移動を表すことと関係があろう。人間は自分にことがおよぶのには敏感であり，自分の方に事態が向かって

いることを表すほうが他に事態が向かったり及んだりするよりも興味が強い。「発生」に関しては自己が占めている空間（具象的でも感情的でも）に発生することを述べるのが中心的な使い方だろう。先の例で「母の病気は医者が見放すところまでいっていた。」は「母の病気は医者が見放すところまできていた。」とも言える。後者の方がより迫った感じになるのは～テクルで悪い状況に視点があるからであろう。第5節でも述べるが，求心動詞の方が遠心動詞よりも，抽象化しやすいようである。

以上，動詞イク・クルの意味を分析してきた。以下ではこれらの分析結果をもとにして意味の抽象化過程について検討していきたい。

4.4.　日本語動詞における意味の抽象化過程

上でみてきたイクやクルによる概念化から，われわれは経験知識等から実に様々な道のりを多く知っているのだろうと思う。飲酒行為，病気の経路，道のり等，イクあるいはクルによってこれらを概念化している。ここにイクについていくつか再掲したが，単純な空間移動であるイクは＜経路＞に様々な経験を投影させて使われているのが分かる。

(11)　イク 孤立系

＜移動＝人＞

＜起点＝自己側地点＞

＜着点＝非自己側地点＞

＜経路＝空間＞

＜方向＝遠心＞

移動 ((9 a)①私は毎日大学へ行く

②アポロが地球から月へ行く)

＜移動＝発話者，物＞

＜起点＝ホームベース地点＞

＊＜方向＝中立＞のときはこの制限がはずれる

＜着点＝非ホームベース＞

＜経路＝空間＞

＜方向＝遠心／中立＞

届く ((9 b)電報行きましたか)

お知らせ，もう行きました？

宅配便，もう行きましたか

＜移動＝通信・通報＞

＜起点＝(ホームベース)＞

＜着点＝非ホームベース＞

＜経路＝通信路＞

＜方向＝遠心／中立＞

(16)　(８ｅ)[到達]　((９ｅ)母の病気は医者が見放すところまで行っていた)

＜移動＝(病気の状態という) 事態＞

＜起点＝ϕ＞

＜着点＝非ホームベースの状態＞

＜経路＝観念的進行の経路＞

＜方向＝遠心＞

(18)　[あの世への旅立ち]

(10ｂ)主人は入院して３日目に逝ってしまいました。

＜移動＝生命＞

＜起点＝この世＞

＜着点＝あの世＞

＜経路＝あの世への旅立ちの道程＞

＜方向＝遠心＞

(31)　クル[孤立系]

＜移動＝人＞

＜起点＝非自己側地点＞

＜着点＝自己側地点＞

＜経路＝空間＞

＜方向＝求心＞

(38)　[到達]

(29ｄ)怒りが頂点まで来たとき，脳溢血で倒れた。

(39)　＜移動＝感情・状態＞

＜起点＝ϕ＞

＜着点＝終点＞

＜経路＝感情の進行経路＞

＜方向＝ϕ＞

(52)　[発生]

当時のなつかしい思い出が心にわき出てきた

＜移動＝状態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベースの感覚空間＞
＜経路＝観念的空間＞
＜方向＝求心＞

上で示した抽象化過程で重要なことは，＜方向＞はイクの場合，＜遠心＞であり，逆にクルの場合は＜求心＞である。抽象化過程が進んでも，方向は守られており，そこからメタファーや観念的な道筋を投影させているのである。本節では上で分析した意味構造に加え，筆者がこれまでに扱ってきた動詞をも含め，意味の抽象化過程，すなわち意味論的に見た文法化の過程について述べていきたい。

由井（1993）で扱ったモラウ，由井（1996 b）で扱ったヤル・クレルは前章でも取り上げたが，視点やダイクシスの動詞として並列的に扱われることが多い。イク・クルとヤル・クレル・モラウを対比すると，まず，＜移動＞は前者は＜人＞が中心的であるのに対し，後者は＜もの＞と＜所有権＞が原義である。より具体的なものが＜移動＞主体であると，本動詞では主体の抽象化は起こりにくいようである。もちろん，擬人化して用いることは可能である。しかし，物の部分の方が抽象化が進んでいる。また，＜起点＞＜着点＞に関しては前者は＜空間地点＞であり，後者は受け手と与え手という＜人＞である。このことも本動詞での抽象化を阻む要因になっていると考えられる。ここまでのところでより単純な移動動詞，すなわち，物の空間移動のほうが抽象化しやすいことが分かった。補助動詞用法に関しては，＜移動＞の主体が人から行為に抽象化する点は同様であるが，受給動詞の場合は，「死んでやる」のように行為の「影響」という間接的なものも移動するが，移動の動詞の場合はこのような例は見られない。さらに，派生的な意味については受給動詞の場合の≪恩恵≫という推論的意味は抽象化に従って薄れていく。要因についてはこれからの研究課題である。

4.5. む す び

以上，動詞イク・クルの意味分析と抽象化過程についての一考察を示した。イク・クルについては本動詞の段階で抽象化が進んでいること，これは移動主体が人の自動詞であり，メタファー化しやすいのが原因と考えられる。また，ミルに関しては共感覚によって視覚以外にも意味が広がること，≪判断≫という推論によって生まれた意味が抽象化に従って優勢化してくることが分かった。

抽象化全体に関しては，遠心的方向の動詞よりも，求心的方向の動詞の方がより多様な用

法を呈するが，これは人間の認知上，自己に向かうことのほうがより興味が強いことによるということだと考えた。

動詞イク・クルを中心に意味分析を行ったが，分析自体未だ不十分な点もあろうし，これらの語について必ずしもすべての例文を考察できたわけではない。特に，慣用表現となっているものの中には言及できなかったものも多い。今後はこのような例文も含め，研究を進めていきたいと考えている。

注

（1） 近藤（1985），吉川（1976）参照。

（2） 大江氏は Fillmore（1972）"How to Know whether You're Coming or Going", *Descriptive and Applied Linguistics* 5，ICU からの概念を援用している。

第5章　動詞イル・アルにおける意味の抽象化過程

5.0. はじめに

本章では存在を表わすイル・アルの意味の抽象化過程を扱う。日本語教育においては，～テアルと～テオクはペアーで導入することが多いが，本論文では本動詞での互いの意味の近さを重視し，イルとアルを合せてに扱うことにする。存在を表わす語には他にオルもあり，また，～テオルという補助動詞用法ももつが，イル／アルほどには日本語学習者に教えることもないので，本稿では扱っていない。本章では今までのように分析にあたって別々に動詞を扱うのではなく，2つの動詞を対立させながら，考察を進めていきたい。イルとアルは生物または無生物で選択制限がある。この点をできるだけ，考慮に入れて，分析するのが，本章の目標である。

5.1. 本動詞イルとアルの意味分析

5.1.1. 孤立系の意味

孤立系のイル／アルは，「どこに」＜位置＝空間＞，「何が」＜存在物＝生物／無生物＞，「存在している」か＜存在＞の3つの意味成分が立てられる。また，＜存在物＞が生物か無生物かでイルとアルの区別が付けられる。

5.1.2. 本動詞用法の意味

本動詞において存在を表わす場合，＜存在物＞が生物か無生物かでイルとアルの使い分けが行なわれる。

（1）　a．部屋の真ん中に子供がいる。
　　b．部屋の真ん中に犬がいる。
　　c．部屋の真ん中に料理ロボットがいる／ある。
　　d．部屋の真ん中に掃除機がいる／ある。
　　e．部屋の真ん中に机がある。

（1）の例で見ると，擬人化しやすい存在物の場合は，イル／アルが両方可能になるが，基本

は生物，無生物の区別である。(d)の掃除機は使いっぱなしの人を念頭に入れるとイルでも可能である。イルを用いることで「本来ないはずのところに」というニュアンスが伝わる。次の乗り物の例を見てみよう。

(2) a．留所にバスがいる。
b．うちの前にベンツがいる。
c．うちの前に知らない自転車がある。
d．うちの前にいちょうの木がある。

(2)の例からわかることは，いわゆる存在を表わすにも，一時的な存在を表わす場合は，生物か無生物かの区別ではなく，生物のように認識できるか，すなわち動く可能性があるかどうかが動詞選択の理由になる。(2 c)の場合，自転車のこぎ手と自転車とは同等の価値で認識されるが，(2 a)(2 b)の場合は，運転手は乗り物の一部と認識され，あるいは，乗り物が運転手からメトニミー的に解釈され，乗り物自体が移動可能物と見なされているようである。

(3) a．1月17日に大地震があった／＊いた。
b．明日，サンパレスホテルで送別会があります／＊います。
c．1時半から会議があります／＊います。
d．6時まで会議があります／＊います。
e．1時半から6時まで会議があります／＊います。

上の例は＜時間＞を＜位置＞に見立てた用法だが，ここでは＜存在物＞の＜出来事＞などは＜無生物＞扱いになるということがわかる。(3 c)では＜位置＞が一時点を示すのではなく，始点を示しており，(3 d)では終点を示している。(3 e)のように期間を示すことも可能であるが，これは＜存在＞が瞬間的なことではないことによる。

(4) a．私には娘が3人いる／ある。
b．私には夫がいます／あります。
c．にはボーイフレンドがいる／？ある。
d．私には別れてほしい夫がいます／？あります。
e．私にはゴールデンレトリバー犬が3匹？います／＊あります。
f．私にそばかすが＊いる／ある。
g．私には妄想癖が＊いる／ある。
h．私には慢性盲腸炎が＊いる／ある。

i．私には急性盲腸炎が＊いる／＊ある。

＜位置＞が＜人＞になると＜所有＞の意味になる。鷲田（1992）では「身体」と「所有」と「存在」の問題について論究しているが，その中でガブリエル・マルセルの引用をしている。そこには「身体性は，存在［あること］と所有［もつこと］との境界ゾーンである」という文がある。日本語において動詞アルはまさに＜人＞を存在の＜位置＞に見立てた途端，＜所有＞の意味になるという点で，存在と所有の境界ゾーンを人に求めている語なのである。

家族員等の所有の用法で(4 c)が不自然になるのは家族の一員ではないボーイフレンドは存在に安定性がないということかもしれない。(d)のように不安定性を示すとアルが不自然になる。犬に至ってはますます安定性がなさそうである。もちろん＜位置＞を＜人＞ではなく＜家＞などにすると，空間的位置を得，＜所有＞というよりも＜存在＞になり，イルは可能になる。病気や癖，身体特徴も安定性がある場合，アルによって所有を表わしている。

不安定性／離反可能性を考察するためにさらに，例文で検証してみよう。

（5）　a．　私には鑑定士の従兄がある。
　　b．　私には鑑定士の従兄がいる。
　　c．？私には家に今下宿している従兄があるよ。
　　d．　私には家に今下宿している従兄がいるよ。
　　e．？老人ホーム入居待ちの両親があるので，転勤はお断りしたい。
　　f．　老人ホーム入居待ちの両親がいるので，転勤はお断りしたい。

（6）　a．　私には食べさせなけらばならない居候がいるのよ。
　　b．＊私には食べさせなけらばならない居候があるのよ。
　　c．　鯨にはおへそがある。
　　d．＊鯨にはおへそがいる。

離反の可能性の高い人が＜存在物（所有物）＞である場合，イルのほうが自然である。ここまでの考察から，離反性の高い人が＜存在物（所有物）＞である場合，イルのほうが選ばれやすいことが分かる。また，身体部位のように離反不可能の場合，アルのみ可能である。

（7）　a．　これからお客さんがあるから先に帰るわ。
　　b．？これからお客さんがいるから先に帰るわ。
　　c．　用事があるから先に帰るわ。

また，上の例では「お客さん」は人物としてではなく，一種の用事と認識されているようである。人物として認識されていればいつまでも家に残るわけもなく，イルが選ばれるはずで

ある。また，(7 d)より，イルは<現時点>での存在が問題になることが分かる。

(8) a. 私にはボディビルをやっている強い味方があるのよ。
b. 私にはボディビルをやっている強い味方がいるのよ。
c. 私にはすっぽんジュースという強い味方があるのよ。
d. ?私にはすっぽんジュースという強い味方がいるのよ。
e. 私には敵がたくさんある。
f. 私には敵がたくさんいる。
g. 彼にはたくさんの業績がある。
h. *彼にはたくさんの業績がいる。

(8)の例からは「敵」や「味方」の場合はイルでもアルでも可能だが，生物でなければイルは選ばれない。

(9) a. きみには別荘があるから
b. *きみには別荘がいるから
c. きみには才能がある
d. *きみには才能がいる

<位置>が人で所有をあわらしても<存在物>が人以外になるとアルが選ばれる。
ここまでの議論をまとめ，意味成分で表すと以下のようになる。

(9)

イル	イル　所有
<位置＝空間>	<位置＝人>
<存在物＝生物>	<存在物＝人（離反可能性あり)>
<存在>	<存在>

アル　出来事
<位置＝時間>
<存在物＝出来事>
<存在>

アル	アル　所有
<位置＝空間>	<位置＝人>
<存在物＝無生物>	<存在物＝人（安定)><存在物＝無生物>
<存在>	<存在>

次に補助動詞用法をみてみよう。

5.2　補助動詞の意味

補助動詞～テイル・～テアルはアスペクトの問題として，長年に渡って議論されている文法単位である。ここでは語の意味の抽象化に絞って考えるために，まず，基本的な用法と考えられる用例を検討したい。

～テアルは日本語教育では本動詞とは違い，～テオクとペアで提示する学習項目である。これは「すでに～し，今も～」という動作の結果を表していると導入するのが普通である。

(10)　a．お湯を沸してある。
　　b．お湯を沸している。
　　c．毎日走ってある。
　　d．毎日走っている。

この例で見る限りは，～テアルは＜状態＞，～テイルは＜進行＞を表しており，＜状態＞と＜進行＞，すなわち，＜静＞と＜動＞のペアが生まれる。

(11)　a．飲み物は買ってあります。
　　b．飲み物は買っています。
　　c．窓があけてあります。
　　d．窓があいています。

(11)からも＜継続的＞と＜一時的＞のペアが生まれており，現在のところの仮説としては，＜存在物＝生物＞が＜動＞＜一時的＞へと転化し，＜存在物＝無生物＞が＜静＞＜継続的＞へと転化していると考えられる。

もちろん，～テイルには大別して「動作の進行」と「結果の持続」の側面があることは疑いがないだろう。例えば，次の例を見てみたい。

(12)　a．今，衣裳を着ている。
　　b．十二一重の衣裳を着ているから，うまく動けません。
　　c．あの新聞の記事を読んでいる。
　　d．もう，あの新聞の記事を読んでいる。

これらの例は(12a，c)は動作の進行を表わし，(12b，d)は結果の持続の用法であることを示している。暫定的な解釈として，前者は次のような意味成分を立てておきたい。

(13) ～テイル　動作の進行

＜位置＝現時点＞

＜存在物＝動作の進行状態＞

＜存在＞

これは，動作の進行の場合，＜現時点＞に＜動作の進行状態＞が＜存在＞している，という解釈になる。もし(12ａ，ｃ)や(12ｂ，ｄ)に副詞「これから」「明日」を付加するとなると非文になる。また，後者は次のように表わすことを提案する。

(14) ～テイル　結果の持続

＜位置＝現時点＞

＜存在物＝動作の完了状態＞

＜存在＞

結果の持続の場合，文脈からの干渉によって動作の進行ではなく，動作の完了状態を認識することになる。動作の進行状態か完了状態かは，前項の動詞でも決まり得るが，「瞬間動詞だから結果の持続」とするのは早急すぎる場合もある。例えば，「ガラスが割れている」は一般的な状況では結果の持続であるが，超スローモーションビデオテープを再生するなどして，「割れる」ことに過程性を付加させてやれば動作の進行になる。人間の認識作用は一般的状況だけでなく，仮想状況や創作状況などにも対応できるので，現在のところ，文脈干渉によって進行状態と認識するか完了状態と認識するかの違いが生れると考えられる。

次に，～テアルは一般に動作の結果を表わすとされており，次のような用法がある。

(15) ａ．新聞はテーブルの上に置いてあります。

ｂ．ゴミ捨てはあなたに任せてあるのよ。

ｃ．黄色いトレーナーはもう洗濯してあるわよ。

それぞれ，「置いた状態が続いている」「任せたままの状態が続いている」「洗濯し終わった状態が続いている」ということでやはり動作の完了状態の持続と言える。そこで，次のように意味成分を立てられる。また，これらにも未来の時を指定する副詞の付加はできない。

(16) ～テアル　動作の結果

＜位置＝現時点＞

＜存在物＝動作の完了状態＞

＜存在＞

この意味成分の提示では(14)の～テイル（結果の持続）と同じ成分になってしまうので，次に，～テイル結果の持続と～テアル動作の結果の対比分析を行ないたい。

(17)　a．うちの自転車はパンクさせてある。
　　b．うちの自転車はパンクさせている。
　　c．ドアを開けっ放しにしてある。
　　d．ドアを開けっ放しにしている。
　　e．暖炉の火を消してある。
　　f．暖炉の火が消えている。

(17a)と(17b)では同じ「放置」でも，「積極関与度」が違うように思われる。(b)の方が，積極関与度が高いように思われる。(17c)と(17d)でも，開けっ放しの主体が話者ならば，やはり「積極関与度」が～テイルのほうが高く感じる。(17e)と(17f)は直接対比は避けるべきだが，～テアルのほうが，「消し終わった」状態の方に焦点があるように思われる一方，(17f)は「消えた」方に焦点があるように思われる。従って，ここまでの分析を意味成分に反映させると，次のようになる。

(14')　[～テイル　結果の持続]
　　＜位置＝現時点＞
　　＜存在物＝動作の完了状態＞
　　＜存在＝状態維持に積極関与＞
(16')　[～テアル　動作の結果]
　　＜位置＝現時点＞
　　＜存在物＝動作の完了状態＞
　　＜存在＝状態維持に低い関与＞

5.3　む　す　び

現在のところ特に補助動詞用法や「～タコトガアル，～ツツアル」などの意味分析が細かい用法まで行き届いておらず，不十分ではあるが，一応の仮説として，動作の進行を表わす～テイルには，＜存在物＞の意味成分が＜生物＞から＜離反可＞＜動＞＜一時的＞へと転化していると考えられ，結果の状態を表わす～テアルには＜無生物＞が＜安定＞＜静＞維＜持＞へと転化していると推測できる。

(18)　イルの抽象化過程

＜存在物＝生物＞

↓

＜離反可＞

↓

＜動＞

↓

＜一時的＞

(19)　アルの抽象化過程

＜存在物＝無生物＞

↓

＜安定＞

↓

＜静＞

↓

＜維持＞

＜位置＞の成分については，＜位置＞に＜人＞がくる場合，＜所有＞を表せ，＜位置＞が時間軸へ転化する場合は，本動詞ではアルのみが可能であることが分かった。

今後はさらに，例文を増やし，補助動詞用法にとどまらず，アル・イル全体の統合的分析を続けていきたい。ただ，「～タコトガアル」は＜位置＞に＜人＞が来るので，＜所有＞から派生したものと思われる。また，「～ツツアル」はやはり「状態維持」と関係がありそうだが，これの分析は今後の課題である。

第6章　オク・シマウにおける意味の抽象化過程

6.0　はじめに

動詞オク・シマウはアスペクトやもくろみ性をもつ動詞として補助動詞が文法的にふるまう。本動詞においては，共に具象物の位置移動動詞である。本章ではアスペクト研究にも関わるこれらの動詞の意味分析を行なう。

以下まず，動詞オクの意味を本動詞，補助動詞とも分析し，次に動詞シマウの意味をやはり本動詞，補助動詞ともに分析する。

6.1　オクの意味の抽象化過程

動詞オクは，本動詞として具象空間内での事物の位置移動関係が中心的意味に据えられるだけでなく，補助動詞にあってはもくろみ性やアスペクト的意味（高橋1973，吉川1973など）を表す抽象化した意味を持つ動詞であり，また，基本的な動詞として使用頻度の高い動詞でもある。基本的な語はそれぞれの言語において本来的な意味からは離れた用法や慣用表現を持つことが多いが，補助動詞用法を持つ動詞オクもこの例に洩れない。ただ，英語では *put* は文法的要素をして働かず，もっぱらイディオムとして活躍する。動詞の意味の発揮のされかたは違うものの，ともに意味領域の広い動詞であることには変わりはない。

以下，本章では，まず孤立系の意味を確認し，続いて本動詞用法，複合動詞用法，補助動詞用法の意味を検討し，さらに，本動詞，複合動詞及び補助動詞のすべての用法にある意味を統合的に分析することによって，動詞オクの持つ意味の広がりの内部構造を明らかにしたい。

なお，～テオク／～デオクには縮約形～トク／～ドクがあり，文法化現象では音声・音韻面でも重要な局面を示しているのだが，本稿では～テオク／～デオクの形式を取り上げ，縮約形は直接には扱わない。

6.1.1　孤立系オクの意味

孤立系の意味は，～から～へと～を移動させることであるので，<起点><着点><移動物><移動経路><働きかけ>が立てられる。これに認識基盤である自己を合わせると次のようになろう。

（0） 孤立系オク

＜起点＝自己身体＞

＜着点＝空間地点＞

＜移動＝具象物＞

＜経路＝空間＞

＜働きかけ＝移動＞

6.1.2 本動詞用法オクの意味

本動詞としてのオクにはどのような用法があるか，以下，基本的と考えられる用法から見てみよう。

（1） 本を机の上に置く

（2） 離れ部屋に下宿人を置く

（3） 神戸市に対策本部を置く

（4） 社長は山田部長に絶大の信用を置いている

（5） あの人とは距離をおいて付き合おう

（6） 少し時間をおいてから再度チェックしてみる

（7） 赤ん坊を家に置いて買物に出る

（8） 練ったパンの生地を一時間おく

（1）～（4）は対象の具体か抽象の差はあるが，「対象の移動」すなわち空のところに，ある事物を持ってきて位置付けることを表す用法である。（5）～（6）では，時間あるいは数や長さを隔てることを表す用法である。（7）～（8）は対象を移動させるのではなく，「そのままの状態にしておく」ことを表している。

（1）～（8）のなかで最も具体的な移動の意味を表す（1）は抽象化を考える上で，最も中心的な意味と考えたい。＜移動＞は＜起点＝動作主の手＞から＜着点＝机の上＞へ行なわれている。同じく物を移動させる動詞である移スと違うところは＜起点＞である。移スでは動作主の手は経由点であり，起点ではない。

（9） a． 花瓶をテレビの上から床の間に移す。

b．？花瓶をテレビの上から床の間に置く。

また，設置する動詞である据エルや据エ付ケルなどとの違いは＜着点＞で，固定させるかどうかで違いが出てくる。オクの場合，＜着点＞に到達するまでが意味の対象となっている。

(10)　a．　アンテナを屋根に据える。
　　b．？アンテナを屋根に置く。

また，オクは移動させるという＜働きかけ＞を持つ意志動詞である。これらのことから分かる(1)のオクが有する意味成分は次のようになろう。

(11)　＜移動物＝具象的対象＞
　　＜移動経路＝空間＞
　　＜起点＝動作主＞
　　＜着点＝目標位置＞
　　＜働きかけ＝移動＞

なお，(2)～(8)の意味成分については，後ほど第4節の統合的分析で扱う。
また，上にあげた基本的な意味から派生したと考えられる慣用的用法もある。

(12)　ルイ・ヴィトンのバッグを質に置く
(13)　算盤を置く
(14)　筆を擱く

これらはもともと(1)～(4)の類いの用法がイディオム化し，それぞれ「預ける」「計算する」「やめる」の意味が発生したものであろう。

(12′)　＜移動物＝ルイ・ヴィトンのバッグ＞
　　＜経路＝質屋流通路＞
　　＜起点＝動作主＞
　　＜着点＝質屋＞
　　＜働きかけ＝移動＞
　　≪預ける≫

質屋で質ぐさをおくときののフレームあるいはスキーマより派生した推論的意味≪預ける≫が生じると考えられる。服部らの意義素研究では慣用表現になると「意義特徴の抑圧」が出られるとするが，この場合，オクそのものの意味成分の消失は見られず，新たに付加された≪預ける≫が慣用的意味として活躍する。「算盤をおく」や「筆をおく」も同様で，文字どおりの意味にそれぞれ≪計算する≫や≪終了する≫がフレームなどから派生していると考えられる。

6.1.3 複合動詞用法オクの意味

次に，オクが動詞の連用形に添えて用いられる用法を見てみたい。

(15) 先方の話を聞き置いた
(16) 路上の喧嘩を見置いて立ち去った
(17) 一言言い置いて立ち去った
(18) 一言だけ申し置きたく存じます
(19) ここ5年間配当金は据え置かれたままだ
(20) 駅前に捨て置かれた自転車がたくさんある
(21) 郵便局に小包が留め置かれている
(22) この商品，取り置いてくださいますか
(23) 以後，お見知り置きください

これらは「～をし，そのまま何もしないで同じ状態を保つ」ことを意味している。本動詞用法の(7)(8)と同様に，「そのままの状態にしておく」を表しており，対象が事物から動作に変わったとはいえ，本動詞の意味が引き継がれたことを示している。意味成分は後ほど詳しく見るとして，次に補助動詞用法～テオクを見てみよう。

6.1.4 補助動詞オクの意味

補助動詞用法は従来，文法的なふるまいを中心に研究されてきた。しかし，Ono (1992) でも述べられているとおり，一見補助動詞の形式でありながら本動詞の語彙的意味を残す用法もある。まず，その例から見てみよう。

(24) 椅子を作っておいた (Ono 1992)
(25) 冬物を屋根裏部屋に上げておいた

これらは「作って」「置いた」および「上げて」「置いた」の2つの連続する出来事を，共通の場所格で表している場合と，何かの準備のために「作った」あるいは「上げた」場合の2つの解釈が可能である。前者の場合は，Ono (1992) も述べているとおり，2つの動詞の間に音声的な間が入ることによって区別されるとおもわれる。(1) この用法に残されている語彙的意味とはいうまでもなく，本動詞用法を引き継ぐものである。

次に完全に文法化している補助動詞用法の意味を見てみよう。

(26) 明日パーティをするので，ビールを20本買っておいた。
(27) いくら言っても言うことを聞かないものだから，昼休みもずっと立たせておいた。

(28)　検査前日の7時までに晩御飯を食べておいてください。

(29)　もちろん星名とて今更ら逃げかくれするような男ではありませんが，かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげて置きましょうか。　（チチュウカイ）

(30)　『暢気眼鏡』と云う題で短篇書くことを思いつき，直ぐ取りかかったが，半分程で筆が進まなくなった。暫く放って置き，またかかって見ると，その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。　（ノンキ）

(31)　あんたは，これ程までに人間として恥しいことをして置きながら，なおまだこの学校にいるつもり？　（アサクサ）

これらの用法は従来，文法的見地から研究されてくることが多かった。鈴木（1972）は～シテオクを「もくろみ動詞」として捉らえ，「あとのことを考えにいれて，動作をおこなうことをあらわす」としている。上の(26)(29)がそれに当たる。また，笠松（1993）は鈴木の主張を引き継ぎ，「アスペクト的な意味特徴はもくろみ性にからみついていて，きりはなすことができないだろう」と述べている。一方，高橋（1976）は「しておく」はアスペクト体系に属する形式として扱い，「対象を変化させて，その結果の状態を持続させる動詞」とまず規定している。ただ，もくろみ性，「つぎにおこることがらのために準備的な動作としておこなう動作をあらわす」用法とは分けて規定し，基本的な意味としてこの2つを立てている。高橋のアスペクト研究は吉川（1976）に受け継がれ，「～ておく」の基本的意味を「対象を変化させて，その状態を持続させること」としている。吉川はさらに詳しく「しておく」を7つの意味に分けて考察している。

(32)　①　対象の位置を変化させ，その結果の状態を持続させることをあらわす
　　②　対象を変化させ，その結果の状態を持続させることをあらわす
　　③　ある時までに対象に変化を与えることをあらわす
　　④　放任をあらわす
　　⑤　準備のためにする動作をあらわす
　　⑥　一時的処置をあらわす
　　⑦　いくつかの特例

吉川（1976）の研究は前項動詞の種類までをも詳しく含んだ論考である。しかしながら，これらの研究はあくまでもアスペクトやもくろみ性といった文法的意味を取り上げたものであり，前項動詞に及ぼされた意味を研究対象としたものといえる。本稿で扱うのは厳密に（テ）オクの部分の意味のみでなければならない。例えば，(32)①の「対象の位置を変化させ」というのは，「立てふだを立てておきました」において「立てふだを立てた」部分が表す意味で

あり，本稿で扱うオクが表す意味は「その結果の状態を持続させること」になろう。また，④の「放任をあらわす」の「放任」は放任の意味をあらわす動詞からつくられるのであり，(30)を例にとると，「放って置き」の「放って」がこの意味を担うのである。そして（テ）オクは「持続」をあらわすことになろう。この観点から(26)～(31)にあげた（テ）オクの基本的意味をそれを付けない形と比較しながら，もう一度考えてみたい。

(26)　明日パーティをするので，ビールを20本買っておいた。
(26′)　明日パーティをするので，ビールを20本買った。
(29)　もちろん星名とて今更ら逃げかくれするような男ではありませんが，かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげて置きましょうか。　（チチュカイ）
(29′)　もちろん星名とて今更ら逃げかくれするような男ではありませんが，かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげましょうか。

(26)(29)の（テ）オクが表す意味は「あることのために備える」になろう。

(27)　いくら言っても言うことを聞かないものだから，昼休みもずっと立たせておいた。
(27′)　いくら言っても言うことを聞かないものだから，昼休みもずっと立たせた

(27)では「放任」のところでも述べたように「たちんぼをそのままにする」という「持続」を表していることになろう。

(28)　検査前日の７時までに晩御飯を食べておいてください。
(28′)　検査前日の７時までに晩御飯を食べてください。

これは(32)の③「ある時までに対象に変化を与えることを表す」に当たるが，（テ）オクに限ると「何かを終わらせる」になろう。

(30)　『暢気眼鏡』と云う題で短篇書くことを思いつき，直ぐ取りかかったが，半分程で筆が進まなくなった。暫く放って置き，またかかって見ると，その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。　（ノンキ）
(30′)　『暢気眼鏡』と云う題で短篇書くことを思いつき，直ぐ取りかかったが，半分程で筆が進まなくなった。暫く放り，またかかって見ると，その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。

これは上の④で述べたように「持続」を表しているだろう。

(31)　あんたは，これ程までに人間として恥しいことをして置きながら，なおまだこの学

校にいるつもり？　（アサクサ）

(31′) あんたは，これ程までに人間として恥しいことをして置いて，なおまだこの学校にいるつもり？

(31″) あんたは，これ程までに人間として恥しいことをしながら，なおまだこの学校にいるつもり？

(31)はいわゆる逆接を表す形式だが，（テ）オクについては結果の状態の「持続」を表しているものと考えられる。

以上，補助動詞用法における～テオクの意味をまとめると次の3つになる。

(33) ① 持続
② あることのために備える
③ 何かを終わらせる

次節ではこれまでに見てきた意味を統合的に分析することを試みたい。

6.1.5 統合的意味分析

本稿の目的は本動詞用法から補助動詞用法までの意味を統合的に分析し，オクの持つ意味構造を明らかにすることであった。このような観点から，すなわち，オクを本動詞と補助動詞との関連づけで言及している研究に Ono (1992) がある。Ono はシマウと対比させながら，テオクは「完了」「準備／目的的」「意志的」の3つの文法的用法を合わせもつマーカーだとしている。完了についてはオクは結果の状態の持続，シマウは出来事の最終面を強調していると違いが文法的な意味にも反映しているとする。準備的な用法は本動詞の(1)の用法から広がったと述べている。その根拠は「もしある人が何かをどこかに置き，そのことをだれかに言うのなら当然なんらかの理由があってそれをしたから」としている。また，意志性に関してはオクの準備／目的的ない身が必然的に意志的行為を表すとしている。Ono の意見に異論はないのだが，本稿の目的である意味構造を探るという観点からは，なぜかということまで十分説明されていないし，基本的な2つの意味の関係についても説明がない。では，1節で見た「空間的事物の移動」と「そのままの状態にしておく」は意味論的にどのように結びつけて考えられるだろうか。

ここで1節で見た本動詞オクの中心的意味成分をもう一度見ることから始めよう。

(11) ＜移動物＝具象的対象＞
＜移動経路＝空間＞
＜起点＝動作主＞

＜着点＝目標位置＞
＜働きかけ＝移動＞

この構造がそれぞれの意味とどう関わっているのかを以下見てみよう。本動詞にはこの対象の移動が抽象的になる場合があった。これは＜移動物＝抽象的対象＞とすることで抽象化を表すことができる。また，時間や距離などを隔てる場合もやはり抽象的対象が移動物になると考えられる。

次に「そのままの状態にしておく」について考えてみると，移動経路を空間から時間軸へと抽象化させ，移動物を状態とすることで説明がつく。(7)であれば，「赤ん坊が家にいる状態」を時間軸に沿わせて移動することになり，(8)であれば，練ったパン生地をそのままの状態で時間軸に沿わせて移動することになる。いつまでかという最終時点がなければ，従って，以下のように表される。

(34)　そのまま持続
＜移動物＝状態＞
＜移動経路＝時間軸＞
＜起点＝発話時＞
＜着点＝ϕ＞
＜働きかけ＝移動＞

複合動詞における状態保持と補助動詞の持続もこれで説明がつく。

補助動詞における備えはどうであろうか。これは＜着点＞を＜目標状態＞にすることになろう。

(35)　あることに備える
＜移動物＝行為＞
＜移動経路＝時間軸＞
＜起点＝発話時＞
＜着点＝目標状態＞
＜働きかけ＝移動＞

最後に行為を終わらせる，完了について考えると，着点を目標時間に変えると説明がつく。

(36)　完了
＜移動物＝動作＞
＜移動経路＝時間軸＞

＜起点＝ϕ＞
＜着点＝目標時間＞
＜働きかけ＝移動＞

なお，オクには動詞カテゴリーから逸脱した文法化が進んだ用法，開催場所を表わす～ニオイテがある。これも動詞オクから派生された用法であるので，オクの意味分析の最後にこの用法を取り上げたい。

(37)　～ニオイテ
　会議は第１会議室において行なわれます。
　アエラは朝日新聞販売店において販売しております。
＜移動物＝開催物等＞
＜移動経路＝ϕ＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝地点＞
＜働きかけ＝開催等＞

この用法はただ一般的に場所を表わすのではなく，「開催」などの働きかけを必要とする場合に用いられる。動詞のカテゴリーから脱しているので，＜移動＞や＜経路＞は消失される。

6.1.6　む　す　び

以上，意味成分の写像関係をもとにオクの意味構造を明らかにした。従来２つの別の意味として捉らえられていた「空間移動」と「そのままの状態保持」を空間から時間への認識の抽象的拡張を考えることで２つの基本的意味の統合がなされた。また，動詞オクから文法化し，場所を表わす～ニオイテは動詞としての資格を失い，＜移動＞など動詞として重要な成分が消失されている。カテゴリーを脱するにあたり，動詞らしい意味成分が放棄されているのである。

本稿は教育現場からの疑問を出発点としている。この意味では，意味の抽象化の過程をエティックな研究方法として取り上げるトピックとなり，類型的な研究への発展が可能である。また，意味の抽象化過程の解明は記号論的興味への展開可能性をも含んでいると考えられる。類像性の研究は現実世界と言語形式の間でいくつかの研究がなされているが，具象空間認識から抽象概念認識への類像関係を維持しようといった人間の認知操作の傾向性に方向性があるのか，解明への発展をも期待したい。

6.2 動詞シマウの意味の抽象化過程

6.2.0 はじめに

動詞シマウは本動詞としても，また，補助動詞としても用いられる。補助動詞の場合，アスペクトやモダリティを表す形態として論じられてきた（金田一1976，高橋1976，吉川1976，杉本1991，藤井1992など）。これは自立語である本動詞シマウの意味を一部残しつつも文法化された用法である。小稿では文法的な見地からの用法を記述した先行研究を参考にしつつ，意味論の立場からシマウの文法化現象について考察したい。考察にあたっては歴史的な語義の発展に注目するのではなく，あくまでも共時的に見た意味の内部構造を探り，シマウで分節される世界を解明することを目的とする。意味の内部構造，本動詞から補助動詞への意味的抽象化の過程を調べることにより，抽象化の実体を明らかにできるだけでなく，語の持つダイナミズムのメカニズムが見えてくると考えられる。本章でも意味の内部構造を考察するにあたり，意味成分をもとに考えてゆきたい。

以下，まず第1節で本動詞シマウの意味を考察し，次に第2節で補助動詞(テ)シマウの意味を考察する。そして第3節では本動詞と補助動詞の意味を統合的に分析することにより，シマウの持つ意味の内部構造と抽象化の過程を明らかにしたい。

6.2.1 孤立系シマウの意味

シマウは～から～へ～を入れ込む，すなわち開放的な場所に出ていたものを閉鎖的な場所に移し，おさめることであるので，＜移動物＞＜起点＞＜着点＞＜経路＞＜意志＞あるいは＜働きかけ＞が必要だと思われる。

(38) 孤立系のシマウ
＜移動物＝具象物＞
＜起点＝行為者＞
＜着点＝閉鎖的場所＞
＜経路＝具象空間＞
＜意志／働きかけ＞

6.2.2 本動詞シマウの意味

本動詞用法における意味を考察するにあたり，類似した意味を持つ動詞と比較しながら見てみることから始める。まず，置くべきところに片付ける意味を表す用法は(1)のようなものがある。

(39)　a．子供がおもちゃを押入にしまう。
　　b．子供がおもちゃを押入に片付ける。
　　c．子供がおもちゃを押入に納める。

これらは＜人＝子供＞が＜移動物＝おもちゃ＞を＜着点＝押入＞に＜意志＞をもって＜移動＞させるという成分をもつ。(40)を見るとシマウはヲ格に移動させる具体物がこなければならない。

(40)　a．*部屋をしまう。
　　b．部屋を片付ける。

また，(3)(4)から＜着点＞は開放的な場所でなく，境界をもつ閉鎖的な場所であることがわかる。

(41)　a．*読み終った新聞を部屋の隅にしまう。
　　b．読み終った新聞を部屋の隅に片付ける。
(42)　a．手紙をどこかにしまいこんだ。
　　b．*手紙をどこかに片付けこんだ。
　　c．*手紙をどこかに納めこんだ。

また，これから(43)のような慣用句用法が説明されるだろう。すなわち，「胸がいっぱい」「胸に溢れる思い」など「胸は容器である」というメタファーを使った用法である。

(43)　思い出を胸にしまう。

さらに，(44)よりシマウは着点である置くべき場所が発話者に意識されている動詞であることがわかる。

(44)　a．冬物衣類をしまう。
　　b．？冬物衣類を納める。
　　c．冬物衣類を衣裳箱に納める

次に，「終わりにする」の意味で用いられるシマウは(45)のように一日の仕事を終えることと(46)のように長期的事業を終えることを表せる。(45b)にやや不自然さが感じられるのはヤメルは毎日の行為を表すような反復性が薄いからだと考えられる。

(45)　a．7時に店をしまって8時から夕食を食べます。
　　b．？7時に店をやめて8時から夕食を食べます。

(46)　a．景気が悪く，ブティックをしまうことにした。
　　b．景気が悪く，ブティックをやめることにした。

(45)と(46)で，ヲ格「店」「ブティック」で表していることは「店を営業すること」という行為であり，その行為をシマウことである。Lakoff and Johnson (1980：30-32) は「出来事や行為は物体のメタファーとして，活動は内容物のメタファーとして，状態は容器のメタファーとしてそれぞれ概念化される（渡部他訳)」としている。(39)で見た具象空間での物の移動がここでは＜移動物＝店の営業という行為＞を＜起点＝営業している状態＞から＜着点＝営業していない状態＞に＜意志＞的に＜移動＞させるという意味に分解されよう。その際，(39)では＜具象空間＞の移動であったものが，(45)(46)では＜時間軸＞上を移動すると解釈されよう。

6.2.3 補助動詞(テ)シマウの意味

Ono (1992：371) も指摘しているように一見補助動詞用法の形を取りながら本動詞の意味を受け継ぐ用法もある(47ａ)。この場合，ヲ格が共通の対象を取っていること，音声的なbreak が入ることが条件となる。

(47)　a．その本を読んで/break/しまった。
　　b．その本を読んでしまった。

本節では(47ａ)のようなテ形の継起的用法以外の補助動詞用法に表れる意味を見てゆく。まず，(47ｂ)は読むことが完了したことを表す場合で補助動詞用法の意味の基本であると思われる。同様に動作の終結を表す文は以下の通りである。

(48)　a．その本を読み終った。
　　b．その本を読み終えた。
　　c．赤ん坊が泣きやんだ。

鈴木 (1972)，寺村 (1984) などが指摘するように継続動詞に（テ）シマウが付くと動きが完全に行なわれること（完了）を強調する。瞬間動詞に（テ）シマウが付くと「その動きの実現を強調する意味になり（鈴木1972：384)」，「そのことが起こってもはや起こる前の状態に戻ることはできなく，しばしば自分の意志で実現・非実現が可能なことなのに意識より早く身体が動く（寺村1984：153)」。(48)の～オワル，～オエルは～（テ）シマウよりも客観的であり，瞬間動詞には付かない（寺村同掲書)。さらに～ヤムも瞬間動詞には付かない。

まず，過程をもつ継続動詞につく(テ)シマウの意味を考えたい。

(47)　a．その本を読んでしまった。

(49)　a．お菓子はご飯を食べてしまってからにしなさい。

　　b．宿題の作文を書いてしまったので，遊びに行こう。

これらは行為の終了を意味しており，(45)(46)の意味を踏襲している。言うまでもなく，(45)(46)ではヲ格を取っていたが，(47a)(49)はテ形動詞句である。<起点＝～している状態>から<着点＝～していない状態>への<行為>の<移動>である。しかし，<～している状態>から<～していない状態>は逆になることもある。

(50)　a．赤ん坊が泣いてしまった。

　　cf.(10c) 赤ん坊が泣きやんだ。

　　b．上司を怒らせてしまった。

　　c．子供はもう寝てしまった。

　　d．せっかくのゴルフなのに雨が降ってしまった。

これらは始点重視の動詞であり，(a)～(c)は行為の開始を表し，<起点＝～していない状態>から<着点＝～している状態>への移動になっている。さらに(d)を合せて見ると(50)は<状態>の変化が強調され，<意志性>が欠落している。抽象化の要因には構成成分の欠落もある。

次に，瞬間動詞につく(テ)シマウだが，(51)のような例がある。

(51)　a．茶碗が割れてしまった。

　　b．間違って，残しておこうとした枝を切ってしまった。

(51)は動詞を境に起こった状態変化を強調したものである。すなわち，<起点＝割れていない状態>から<着点＝割れた状態>への移動である。これも意味論的には状態変化を強調することにより<意志性>が欠落したと分析できる。

（テ）シマウにはアスペクト的な用法の他にモダリティ的用法もある。話し手の態度については吉川（1976），杉本（1991），藤井（1992）等の詳細な記述がある。話し手の態度を表す意味については本稿では意味論的に「本来的意味からの拡張による意味」と現段階では分析しておく。すなわち，「ある動作・作用が行なわれた結果の取り返しがつかないという気持ちをあらわす」「不都合なこと，期待に反したことが行なわれることをあらわす」(吉川1971)，「取り返しがつかない」「しめしめといった気持ち」(寺村1984)，「予想外の事態が実現する」(杉本1991)，「主体の動作や変化や状態の実現あるいは終了を，しくじり，不都合として捉らえる話し手の評価，失望，困惑，感慨としてとらえる話し手の感情をあらわしている」(藤

井1992）のような意味は拡張，推論による意味である。

それではどこから拡張されたかというと，＜着点＞の解釈によって引き起こされると考えられる。つまり，取り返しがつかないなどである。また，＜起点＞から＜着点＞への変化が強調されると無意志性が強まると考えられる。拡張的意味については後に少し触れる。

6.2.4 統合的分析

以上見てきたシマウの意味を本節では統合的に分析し，シマウの意味の内部構造を明らかにしてゆきたい。第1節，第2節で記した意味成分を以下に整理してあげる。

(52) 本動詞「片付ける意味を表す」
　例：おもちゃをしまう
＜移動＝具体的物体＞
＜起点＝行為者＞
＜着点＝閉鎖的場所＞
＜経路＝具象空間＞
＜意志性＞

(53) 本動詞「終わりにする意味を表す」
　例：店をしまう
＜移動＝行為＞
＜起点＝＋行為をしている状態＞
＜着点＝－行為をしている状態＞
＜経路＝時間軸＞
＜意志性＞

ここでは「行為は物体のメタファー」「状態は容器のメタファー」のメタファーの写像により，＜具体的物体＞が＜行為＞に，＜閉鎖的場所＞が＜－行為をしている状態＞に抽象化されている。さらに移動経路が＜具象空間＞から＜時間軸＞に抽象化されている。

次に補助動詞用法の意味を見てみる。

(54) 補助動詞「完了」
　例：読んでしまう
＜移動＝行為＞
＜起点＝＋行為をしている状態＞
＜着点＝－行為をしている状態＞

＜経路＝時間軸＞
＜意志性＞

ここでも(15)の構造を引き継ぎ，行為の移動を表している。

(55)　補助動詞「始点」
　例：赤ん坊が泣いてしまう
＜移動＝行為＞
＜起点＝－行為をしている状態＞
＜着点＝＋行為をしている状態＞
＜経路＝時間軸＞
＜意志性＝ϕ＞

ここでは始点重視の動詞の場合，＜起点＞＜着点＞の＋と－が逆になる。

(56)　補助動詞「変化」
　例：茶碗が割れてしまった
＜移動＝行為＞
＜起点＝－行為によって起こった状態＞
＜着点＝＋行為によって起こった状態＞
＜経路＝時間軸＞
＜意志性＝ϕ＞

瞬間動詞の場合は，＜起点＞＜着点＞を＜行為をしている状態＞とは記述できず，＜行為によって起こった状態＞とし他方が妥当であろう。やはりここでも＜起点＞＜着点＞の＋と－が逆になっている。

なお，「ああ，シマッタ！」も動詞シマウから派生された語である。歴史的発生はともかく，共時的に動詞シマウとの連関を考えると，次のようになろう。

(57)　シマッタ！
　例：しまった，宿題をもってくるのを忘れた！
　　しまった，先に謝ればよかった！
＜移動＝行為＞
＜起点＝－行為によって起こった状態＞
＜着点＝＋行為によって起こった状態＞
＜経路＝ϕ＞

＜意志性＝ϕ＞
≪衝撃・後悔≫

この衝撃や後悔等の感情の意味成分は動詞に固有の意味というよりも，「終わってしまって，どうしようもできない状態」から得られた推論的意味だと考えられる。この感情の意味成分は実は補助動詞でも現れ得るものである。

(58)　言わなくてもいいことを言ってしまった。
(59)　もう食べてしまった。

上では≪衝撃・後悔≫の意味成分を特に表わさなかったが，「終わりにする」から≪取り戻しがきかない≫などの感情的意味が派生してくるものと思われる。

6.2.5 む す び

以上，本動詞シマウと補助動詞シマウを統合的に分析し，各意味成分の抽象化過程を見てきた。これからシマウの意味の内部構造における抽象化は以下のことが要因であることが明らかになった。

(58)　物体から行為への抽象化
　　閉鎖的空間から状態への抽象化
　　空間から時間への抽象化
　　状態変化に焦点があたることによる意志性の消失
　　推論的意味による感情的意味の発生

また，＜起点＞＜着点＞の意味は動詞の種類によって変わってくることを確かめた。空間から時間への抽象化はすでに見てきた。意味の抽象化においてはイメージ・スキーマによる語彙のネットワーク理論では救いきれない，感情的意味や，消失による抽象化なども大切なファクターである。

話し手の態度の意味は本動詞シマウの意味成分が抽象化したものから解釈的に拡張されたものだとした。

今後の課題としては動詞の抽象化研究をさらに進めるためにテ形を取っている前項動詞との関連や文脈との関連をも視野に入れ，補助動詞，複合動詞用法をもつ動詞を中心に分析を進めてゆきたい。

注

（1） Ono は Haiman (1983) の類像性についての考え方を用い，iconically motivated とし，音声的な距離が概念的な距離に reflect すると記している。

第7章　動詞ミルにおける意味の抽象化過程

7.　動詞ミルの分析

7.0　はじめに

本章では，今までの分析対象とは少し趣を変えて，視覚動詞であるミルの意味を扱う。まず，先例に倣い，本動詞用法の意味から見てみよう。

7.1　本動詞ミルの用法と意味

7.1.1　ミルの用法

本動詞では以下のような用法がある。

（1）　a.（目を向ける）昨日子どもが「見て見て」というので軒下を見ると大きな蜂の巣があった。
　　b.（目に留める）テレビで野球を見る。
　　c.（眺める・望む）眼下に広がる街並みを見た。
　　d.（目に入る）こわい夢を見た。
　　e.（占う）手相をみる。
　　f.（判断する）味をみる。
　　g.（診断する）脈を診る。
　　h.（評価する）人を見る目がない。
　　i.（経験する）馬鹿を見る。
　　j.（世話をする）子どもの面倒を見る。
　　k.（調べる）辞書を見る。

これらは3つに大別できるであろう。すなわち，(ア)目で確かめる（a-d）（イ)判断する（e-i）(ウ)物事を調べ扱う（j-k）の3つである。

7.1.2　ミルの意味

ここでまず，孤立系のミルを考えてみたい。ミルの孤立系の意味は上の3つのうちで近いのは(ア)になるだろう。柴田他（1979）にはミル・ナガメル・ミツメルを対比させ，分析し

ている。それによると，ナガメルは広範囲を見ることが可能であり，それに反して，ミツメルはそれは不可能で，「人間自ら注意力を集中して視野を狭め」る動詞である。また，ミルは「認識する」という含みがあると記述している。行為ミルを分解して考えると，ミルとは視界を対象上に移動する行為であるといえる。従って次のような意味成分がたてられよう。

(2)　＜移動＝視野＞
　　＜起点＝非対象＞
　　＜着点＝対象＞
　　≪判別≫

ミルの行為自体は＜経路＞を特に意識しない，＜移動＞＜起点＞＜着点＞で表されようが，見ると当然対象の知覚認識が行われ，それに伴い対象の判別が生まれる。そこで≪判別≫を≪≫で括り，提示したい。これはミルの推論的意味（Nida (1975)）である。すなわち，何かを見れば，それが何か分かり，判断することができる。

(1a)は孤立系に近いもっとも典型的な用法であり，1回的である。「大きな蜂の巣だった」と認識するのは「軒下に目を遣る」行為とは若干ずれている。意味成分は以下のようになろう。

(3)　目を向ける
　　例：軒下を見る
　　＜移動＝視野＞
　　＜起点＝非対象物＞
　　＜着点＝対象物＞

(1b)は視野をテレビに持っていき，＜着点＞に着いた視野をその場に留めておくことまでが含まれた意味である。

(4)　目に留める
　　例：テレビで野球を見る
　　＜移動＝視野＞
　　＜起点＝非対象物＞
　　＜着点＝対象物＞
　　＊着点到着時から視野がそこに置かれている状態全体を含む

次の場合は対象物に広がりがある場合であるので，視野の移動に範囲が生まれる。

（5） 眺める・望む

例：眼下に広がる街並みを見た

＜移動＝視野＞

＜起点＝非対象物＞

＜着点＝対象物＞

＊着点が一点ではない。

「目に入る」は意志的ではない場合である。すなわち＜移動＞が意志的でなくなる場合である。

（6） 目に入る

例：こわい夢を見た

＜移動＝視野＞＊意志的移動ではない

＜起点＝ϕ＞

＜着点＝対象物＞

次の（7）～(10)は推論的意味である≪判断≫が意識される場合である。判断時の背景知識の違いはあるが基本的には同じ意味構造である。ただし，（8）は共感覚（山梨1988）により「味を見る」「調律で音色を見る」など視覚以外にも拡張され得るし，（9）は視覚で脈を見るのではなく，触覚に拡張されたものである。

（7） 占う（手相をみる）

（8） 判断する（色つやをみる）

（9） 診断する（脈を診る）

(10) 評価する（人を見る目がない）

＜移動＝視野＞＊共感覚により視覚以外の感覚も可

＜起点＝非対象＞

＜着点＝対象＞

≪判断＝対象・視覚情報を経験的知識によって≫

＊共感覚によって視覚以外にも味覚・聴覚等も可。

次に示す(11)の「経験する」「身に受ける」の場合は，視覚から離れているが，体験内容を判断し，それを例えば「馬鹿」や「泣き」などと表すと分析できる。この場合の＜移動＞も意志的であるとは限らない。無意志的に経験することもありえる。

(11)　経験する

例：馬鹿を見る

　　泣きを見る

＜移動＝体験＞

＜起点＝ϕ＞

＜着点＝体験＞

≪判断＝体験した内容≫

さらに(12)の場合，「子供の勉強を見る」場合，単に子供の教科書や参考書を覗き見るだけではない。やはり視覚的な行動がまずあって，子供の勉強の進み具合や，理解度など，その視覚行動の対象を経験的知識によって判断しているものであると考えられる。「面倒を見る」なども，漠然としているが，「何か面倒」に対する視覚的な行動かそれに代わる行動があって，経験等により，判断してことを進めるものと考える。

(12)　世話をする

例：子どもの勉強を見る

＜移動＝視野＞

＜起点＝非対象＞

＜着点＝対象＞

≪判断＝対象を経験的知識によって≫

(13)も同様であるが，視覚的行動により，その結果，対象から知識を得ることを表す。

(13)　調べる（辞書を見る）

＜移動＝視野＞

＜起点＝非対象＞

＜着点＝対象＞

≪判断＝必要な知識≫

以上，本動詞ミルの用法と意味を考察した。本動詞ミルでは，単なる視覚活動以外に本来的でない意味成分≪判断≫が，大きな勢力をもっていることが明らかになった。次節では補助動詞～テミルの場合を考察したい。

7.2 補助動詞用法～テミルの意味

補助動詞～テミルについては高橋（1976）による「もくろみ動詞」としての分析など文法的分析の観点からの先行研究がある。

7.2.1 ～テミルの用法

上に上げた先行研究高橋（1976）でも述べられているとおり，～テミルは基本的に「ためしにする動作」を表すもくろみ動詞として位置付けられる。以下のような用法があげられる。

(14) （ためしにする）食べてみる
考えてみる
お願いしてみる

さらに高橋（上掲書）では「じっさいに動作がおこなわれることをあらわす」と規定しているが，ここでは「ためしに」のニュアンスが落ち，「実現」の意味合いが強くなる。ここでは「動作を実現させる」と表わしておく。

(15) （動作を実現させる）ハリソン・フォードに会ってみる
恋をしてみるときもちがわかるよ
親になってみて初めて親の気持ちが分かった

これらは「ためしに」ではなく，前項動詞が「実現する」という意味であるので，(14)とは区別される。

また，～テミルト・～テミタラ・～テミレバの形で，ある事実に気づく，あるいはある事実が成立する条件を表すこともある。(これについては長野（1994）に制約についての考察がある。）これは固定化された用法であり，より文法化の進んだ表現であるといえる。

7.2.2 ～テミルの意味

本節では～テミルの「ためしにする」と「動作を実現させる」の意味を探りたい。他の慣用的表現もミルに関しては数多く存在するが，これらについては稿を改めて論じることにしたい。

(16) ためしにする
例：この味どうかしら，ちょっと食べてみて。

＜移動＝行為＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝現実＞
≪判断＝経験的知識による≫

行為を現実化することによって判断するのが(16)の～テミルの意味であろう。前項動詞の行為を開始することに焦点が当たっている。「ためしにする」は推論的意味である≪判断≫がより強く意識されたためであると考えられる。

一方，(15)の「動作の実現」は次のように分析される。

(17)　動作を実現させる
例：親になってみると
＜移動＝行為＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝現実＞
≪判断＝ϕ≫

この場合，動作の実現は必ずしも意志的でなければならないことはない。(17)にあげた例は「親になる」行為が実現化が達成されることであり，≪判断≫の意味成分は焦点が当たっていない。

7.3　総合的分析

本動詞の視覚活動については他の動詞のように，一種の空間＜移動＞という意味成分で視覚活動を捉らえてみた。＜視野の移動＞が補助動詞になっては＜行為の実現に向かっての移動＞に写像され，抽象化が起こっている。補助動詞に関しては＜視覚＞あるいは＜視野＞が消失し，＜移動＞＜着点＞の構造だけが維持されるのである。

本動詞用法でも，最も基本的意味成分であると思われる「視覚的」がそうではなくなる場合もあり，この段階で抽象化が行われている。知的活動である≪判断≫がより優勢になると＜移動＝視覚＞が劣勢になるようである。また，補助動詞用法になると，視覚の意味が薄れてしまい，派生的な≪判断≫の方が優勢になっている。また，視覚の着点が実現化の着点になり，視覚からは離れてしまう。

感覚動詞の中で唯一補助動詞用法をもつミルは他の具象物が空間移動する動詞とも趣が違い，特異な存在である。感覚動詞の中で補助動詞をもつ地位を与えられているのは，視覚が

感覚の中でも中心的で，共感覚も可能な動詞だからであろう。ミルという行為は見る目的は，対象が何であるかを知りたいことから起こる行為であり，「何であるか知ろうとする」ことから，≪判断≫がクローズアップされるものと思われる。≪判断≫がクローズアップされる要因や条件などについては今後の課題としたい。

7.4 む す び

以上，感覚動詞ミルの意味の抽象化過程を分析した。感覚動詞といっても，＜視野＞を＜移動＞させるという他の動作動詞と同様に，＜移動＞＜着点＞が維持される構造であることが分かった。推論的意味が本動詞のうちから，優勢化し，最も基本的である＜視覚＞の意味を消失させてしまっている。今後は他の感覚動詞の意味分析もおこなうことによって全体的な視点からの感覚動詞の意味の抽象化過程を探りたいと思っている。それにはまず，本稿で取り上げなかったミルの慣用表現も取り入れ，動詞ミルによって概念化される世界を明らかにしていくことも肝要かと思われる。さらに，≪判断≫という本来的でない意味成分の活躍の原因や条件も合せて調べるようにしてみたい。

第8章　意味の抽象化過程
――総　括――

8.0　はじめに

本章は，前章までの各章で見てきた日本語動詞の意味の抽象化過程を総括し，日本語動詞における意味の抽象化過程について得られた結論をまとめ，補足することを目的としている。まず始めに，日本語動詞の意味の抽象化について得られた結論を概観し，次いで，分析に用いた意味成分から見た意味の抽象化について述べ，第3に，視点が関わるペアの語のうち無標の役割を果たす語を意味の抽象化の観点から論じる。第4に一般的な意味での抽象と意味の抽象化の関係について触れ，本章をむすぶ。

8.1　動詞における意味の抽象化概観

本稿では補助動詞用法をもつ動詞の意味を分析することによって，日本語動詞における意味の抽象化過程を分析した。もちろん，ここで扱った動詞の数は限られており，すべての日本語動詞における意味の抽象化が明らかになったわけではない。そのことを予め断った上で，論を進めたい。

本稿で扱った動詞はヤル・クレル・モラウ，イク・クル，イル・アル，オク・シマウ，およびミルの10動詞である。本稿では抽象化は，文脈からの干渉を受けない単語として認識される孤立系から，意味のある側面がなんらかの干渉を受けて抽象化が出発するとの考えに立ち，意味分析を行なった。そこでまず，それぞれの動詞の孤立系の意味から振り返ってみたい。

（1）　ヤル
<移動＝具体物・所有権>
<起点＝自分>
<着点＝他者>
<方向＝遠心>

（2）　クレル
<移動＝具体物・所有権>
<起点＝他者>
<着点＝自分>
<方向＝求心>

（3）　モラウ
<移動＝具体物・所有権>

<起点＝他者>
<着点＝自己>
<方向＝求心>

(4) イク
<移動＝人>
<起点＝自己側地点>
<着点＝非自己側地点>
<経路＝空間>
<方向＝遠心>

(5) クル
<移動＝人>
<起点＝非自己側地点>
<着点＝自己側地点>
<経路＝空間>
<方向＝求心>

(6) イル
<位置＝空間>
<存在物＝生物>
<存在>

(7) アル
<位置＝空間>
<存在物＝無生物>
<存在>

(8) オク
<起点＝自己身体>
<着点＝空間地点>
<移動＝具象物>
<経路＝空間>
<働きかけ＝移動>

(9) シマウ
<起点＝行為者>
<着点＝閉鎖的場所>
<移動＝具象物>
<経路＝具象空間>
<意志／働きかけ>

(10) ミル
<移動＝視野>
<起点＝非対象>
<着点＝対象>
≪判別≫

ここで現れる動詞は存在のイル・アルを除いて<移動><起点><着点>を含む動きを表す動詞である。次節で述べるように意味の抽象化は意味のある側面が「具象物」から「行為」「心的構築物」へと認識の拡張を起こしたり，ある側面が消失することによって起こると言える。ブラグマンやレイコフらの語彙ネットワーク・アプローチではイメージ・スキーマの維持とメタファーによる動機づけを重要視しているが，これまで見てきたように，意味成分はすべて維持されるわけではなく，消失の可能性もあるのである。また，日本語動詞の意味の抽象化過程から分かったことは，語彙の本来的な意味だけでなく，言語外知識から得られる，受給動詞における≪恩恵≫や視覚動詞における≪判別≫など推論的意味が活発に働くこ

とも分かった。イメージ・スキーマのみて分析していると見落しがちな問題点である。

次節では上にあげた孤立系の意味から意味成分ごとに異なる抽象化過程を見ていきたい。

8.2　意味成分と意味の抽象化

本節では上で概観した意味の抽象化過程を＜＞で括った意味成分の観点から述べてみたい。まず，＜移動＞の意味成分に含まれるものから確認してみたい。それぞれの動詞に現れた＜移動＞の成分は次の通りであった。

(11)　＜移動＞の対象

ヤル	クレル	モラウ
人		
具体物・所有権	具体物・所有権	具体物・所有権
行為	行為	行為
行為の影響	行為の影響	
	事態	事態

イク	クル
人	人
通信・通報	通信・通報
痕跡	感情・状態
事態	事柄
行為	

オク	シマウ
具象物	具象物
状態	行為
行為	
動作	
開催事項等	

ミル	イル　アル
視野	（＜移動＞成分なし）
体験	
行為	

ここから，意味成分＜移動＞で多くの動詞に共通しているのは＜具象物＞から＜行為＞や

<事態>などへと認識の拡張が起こることである。これは補助動詞用法に限らず見られる現象である。<行為>や<事態>は上でも述べたように，存在論的カテゴリーでは<具象物>と同様，「何」で把握される。すなわち，「それは何か」「何をするのか」「何が起こるのか」の「何」で括られるカテゴリーである。これは少なくとも，なぜ同じ<移動>成分に<具象物>と<行為>や<事態>が含まれ得るかの説明にはなるだろう。日本語話者の認識が「何」で括るカテゴリーを形成しているのは言語外的な事実であって，言語内的な原因とはいえないかもしれない。ただし，さらなる検討は今後の課題である。

次に<起点>についてもう一度見てみたい。

(12) <起点>

ヤル	クレル	モラウ
自己側	他者・行為者	他者
行為者	ϕ	ϕ
ϕ		

イク	クル
ホームベース地点	非ホームベース地点
通常状態	
現在	非現在
ϕ	原因
	ϕ

オク	シマウ
動作主	行為者
発話時	＋行為をしている状態
ϕ	－行為をしている状態
	－行為によって起こった状態

ミル	イル　アル
非対象物	
ϕ	(<起点>成分なし)

<起点>成分内でも<人><地点>から<時間>へ，さらに<状態>へと抽象化している。<時間>への写像は Sweetzer らも指摘するように比較的普遍的な抽象化であろう。言語を効率よく運用するために，空間で認識するものを時間軸に写像しているのであろう。クルで見られた<原因>は格助詞でも見られる写像である。「A地点から」「1時から」「食べ過ぎたから」は上とパラレルの現象である。さらに<状態>への写像は上述の存在論的カテゴリー

が「何」で括られることと関係していようが，いずれにしても写像する場合，自己側であるかそうでないかはそのまま維持される傾向にあると言える。また，＜起点＞成分は消失される場合も多いことが特徴だと言えよう。

次に，＜起点＞と対応する＜着点＞について見てみたい。＜着点＞に現れる成分は次の通りである。

(13)　＜着点＞

ヤル	クレル	モラウ
他者	自分側	自分側
願望達成	自分	ϕ
ϕ		

イク	クル
非ホームベース地点	ホームベース地点
非ホームベース時間	現在
非通常状態	身体
達成状態	

オク	シマウ
目標位置	閉鎖場所
目標状態	－行為をしている状態
目標時間	＋行為をしている状態
	＋行為によって起こった状態

ミル	
対象	イル　アル
現実	(＜着点＞をもたない)

ここでも＜地点＞から＜時間＞へ，あるいは＜状態＞への写像が見られる。さらに＜着点＞に特徴的なことは＜願望達成状態＞など心的構成物へと転化しやすいことである。格助詞においても着点を表わすへ／ニは目標を表わす表現へと写像することとパラレルである。

次に＜経路＞であるが，これも＜空間＞は＜時間軸＞へ転化しやすい。さらに言語外的知識により道筋と認識している場合，＜経験的観念の道筋＞にもなることが特徴的である。

次節では無標と有標と意味の抽象化について見てみることにしよう。

8.3 無標と意味の抽象化

言語において意味論的な無標性と有標性は次のような出現をする。

(14) a．どのぐらいの高さですか。
　　b．どのぐらい長いですか。

上の(a)は対義語の「低さ」で質問しても理屈では構わないはずである。同様に，(b)も「短い」で尋ねてもいいはずである。しかしながら，一般には「高さ」や「長い」が選ばれる。このように，中立的状況で選ばれやすいほうの形式を無標とよび，特定の役割が付いているほうの形式を有標とよぶ。対になっている語のペアは必ずしも対等な役割を果たしているのではないのである。本稿で扱った動詞の中に，視点に関する制約をもつ往来動詞イク・クルのペアと，受給動詞ヤル・クレルのペアがあった。これらは移動に関して遠心と求心の逆方向を取り，対をなしているが，それぞれの分析のところでも述べたように，それぞれイクとヤルが中立方向でも用いられ，無標の形式である。本節では無標性・有標性と意味の抽象化にはなんらかの関係があるのかどうかを述べてみたい。

まず，受給動詞についてであるが，本来，直示的な動詞であり，受け手が自分側かどうかが問題になるのだが，ヤルは中立的用法ももつ意味で無標性をもつと言える。意味の抽象化との関係で言うと，ヤルが中立的な用法をもつことができるのは抽象化があまり進んでいない状態であると言える。すなわち，本動詞において「花江がよし子に本をやった」のように他称どうしのやり取りでヤルは可能であるが，すべての用法で必ずしも用いることはできない。「花江がよし子に本をよんでやった」のように＜移動＞が＜行為＞であるレベルまではいいのだが，意志の「こんな傷，明日までに治ってやる」は運用に関して制限が見られる。それは，発話時に限られ，中立的には用いられないという制限である。＜着点＞に＜願望達成＞という心的構成物がき，＜方向＞も消失しているが，意味成分に偏りが見られることと関係があるのかもしれない。「先生に言ってやる」などの「行為の影響」を表わすヤルでも中立用法は難しくなる。「花江は（よし子を困らそうと）先生に言ってやった」になると座りが悪くなるのは，「言ってやった」が恩恵の解釈を受け，「困らそうと」と衝突するからだと思われる。方向を表わすヤル「煙をふっと吹いてやった」は「花江はよし子に向かって煙を吹いてやった」にすると恩恵の解釈が優勢になるが，方向の解釈も可能であると思われる。受給動詞では無標性をもつヤルも，抽象化が進むと無標性を発揮できなくなることが分かった。

往来動詞のイク・クルの場合はどうであろうか。完全に中立的用法であるクルは用いられにくい。「花江はよし子のところに来た」といった場合，「よし子」に発話者の視点がおかれている。一方イクは，「花江はよし子のところに行った」では中立的な解釈も可能である。こ

のことから，イク・クルのペアではイクが無標性をもつことが分かる。イクは抽象化が進むと，＜地点＞から＜時点＞へ写像されるが，「年齢を重ねていく」のような時間的継続を表わす用法にしても，「みるみる顔が青ざめていった」のような変化を表わす用法にしても，ホームベース時点である＜現在＞から非ホームベース時点である＜未来＞への写像なので中立的とはいえない。時間軸に写像された用法では，１次元的な時間軸上の＜移動＞となり，中立的用法は取れないことが原因になるだろう。また，本動詞で抽象化の進んだ用法，「母の病気は医者が見放すところまでいっていた」「もう一杯いきませんか，まだいけるでしょう」，あるいは「しめしめうまくいった」の場合も，＜経路＞が観念的，経験的にもっている経路であり，完全に中立的とはいうことができない。やはり１次元的な＜移動＞であるので，話者の視点が反映されてしまうのであろう。イクの場合，「センター街を行く人々」のように中立的な用法は空間移動の場合と，かなり限定されてしまうようである。

次節では一般的な意味での「抽象」と意味の抽象化について考えてみたい。

8.4　「抽象」と意味の抽象化

近代科学にとって諸法則等を見いだす作業は「抽象化」あるいは「抽象化観察」から出発すると言っても過言ではない。では，この一般的な意味での「抽象化」と本稿で扱った「意味の抽象化」とはどのような関係にあるのだろうか。3.5節でも簡単に触れたがパースによると「抽象化観察」は論理的観察であり，「あるもの」の観察ではなく，「あるべきもの」，「なければならないもの」の観察であり，われわれが知っている諸記号を単に事実として観察するのではなく，それらの記号が従わなければならない論理法則または規範を観察するものであるとする（米盛 1981）。ここでの抽象化は推論を働かせながらの観察であると言える。この意味での抽象と意味の抽象化とは重ならないことも感じられるが，「注意と抽象」でパースが述べていることは意味の抽象化にも関わりがあると思われるので，あげておきたい。上でも少し触れたが，米盛（1981）は次のようにまとめている。

(15)　要するに，パースによると，注意と抽象は強調の働きである。すなわち「注意の力によって，強調が意識の客観的要素の１つに対して働く」。それから，抽象とは「思考が着目する知覚対象の１つの要素を取り上げて，その他の要素は全く考慮に入れずに，もっぱらその１つの要素について何かを…推定する働きである」。注意と抽象はつまり思考の着目対象の１つの要素に対する強調の作用である。

本稿での主張は＜＞で表わした意味成分がそれぞれ変容し，あるいは消失してその語のもつ意味が抽象化していると言うものであった。上の引用から，意味成分との関係で述べると，

意味成分を「客観的要素」と捉らえれば，ある意味成分を取り上げ，すなわちある意味成分が活発に働くとも言える。事実意味成分によっては抽象化の過程の中で，消失してしまうものあった。消失が思考の考慮に入れられないことと同一現象であるかどうかは今後さらに検討しなければならないが，知覚されないという考え方も否定できないものであると考えられる。残った意味成分が強調されて知覚されているとも考えられるのである。可能性としては意味成分と知覚対象の要素とが関係があれば，上のいう「抽象」と「意味の抽象化」とは同じ現象であるということもできよう。知覚との関係は，文脈からの干渉と合せて今後の課題である。

8.5 む す び

以上が，意味の抽象化についてのまとめであるが，本研究ではまだまだやり残していることもおおい。できる限りの用例を分析(補注3)したかったが，かなわなかった部分もある。今後，上であげた課題を検討するときに補っていきたい。さらに，今後は第2言語習得と認知言語学，概念化の問題も考えていきたいが，そのとっかかりとなる第2言語習得研究を次章にあげ，将来への展望を示し，本稿を終えることとしたい。

終章　日本語教育学への展開
——概念体系習得の問題——

9.0　はじめに

前章までで日本語動詞における意味の抽象化過程を述べてきた。本章は本論文を終えるにあたり，日本語教育学への認知言語学の展開可能性について述べておきたい。

序章でも述べたように，近年認知言語学のＳＬＡ研究への貢献は大きくなってきていると思われる。非日本語母語話者のＬ２使用時の単純化・ピジン化等プロセスの問題は日本語教育学／応用日本語学でも取り上げられる研究テーマである。また，上で述べてきた概念化および概念体系の問題は第２言語習得とも重要な関わりがある。Lakoff（1987）は「ウォーフと相対主義」の章の中で，次のような指摘を行なっている。

（0）　概念化の仕方には幾通りかあることは極めて普通のことで，われわれは皆幾通りかの概念化を利用している。われわれが毎日利用しているそういった概念化には風変わりなところも不可思議なところも全くない。しかし，慣れない文化の中に住み，不慣れな言語を話す人々の思考法について語る場合，危険性がでてくることになる。（池上他訳（1993：372））

日本語母語話者にとって全く自然な日本語も，非日本語母語話者にとっては違う概念体系である。日本語教育学において，Ｌ２として日本語を話す非日本語母語話者にとっても概念化の問題は重要だと考えられる。概念化が十分に習得されていなければ，少なくとも日本語話者の思考を十分に理解しないことになる。また，これまで理想認知モデルなど言語外の世界知識が言語の概念化に取り込まれていることを述べてきた。言語外の世界が非日本語母語話者にとって違う体系をなしていると思われる例として筆者の経験を述べておきたい。以前，修士課程の時に同級生だった少し年配の中国人留学生とテレビ番組についてしゃべっていたとき，好きな番組の話になった。彼はＮＨＫの「連想ゲーム」が非常に興味深いと話してくれた。その番組は，男性軍と女性軍に分れて，キャプテンが答のことば（例えば，「運動会」）に関係のあることばを１つずつ言っていき（例えば「綱引き」「玉入れ」など），解答者がその言われたことばから連想することばを答えていって解答を当てるという趣向の番組であった。その中国人留学生がいうのには，多くの連想がなぜか分からないというのである。連想が文化によって違うのは当然といえば当然である。日本語教育に携わるものとして，ただ基

本的な意味と正しい文法を教えても不十分であることなど日本語の実際使用の場面において，言語外知識のずれが引き起こす可能性を考慮に入れる必要性を感じている。文化による認識の違いは助数詞など言語上現れる場合もある。しかし，一見問題なく話していて，目立たないところで言語外知識のずれから生じる問題もある。

そこで本章では，認知言語学的なＳＬＡ研究への展開を目指し，由井（1996ｄ）で扱った訂正過程について紹介し，関連する問題を述べていきたい。

まず，本調査研究の背景となっている委任統治時代の日本語教育の状況を概観することから始めたい。

9.1　非日本語母語話者の訂正過程

赤道に近い北半球太平洋上のミクロネシアは戦前日本が委任統治を行ない，公学校を設置し，日本語で初等教育を行なっていた。ミクロネシアの老人は戦前に日本語を習得し，今なお使用能力を維持している。本章はミクロネシア連邦ヤップ州の日本語話者の談話能力，中でも訂正過程におけるストラテジーを明らかにすることを目的としている。

外国語あるいは第２言語を話しているとき，言いたいことを表すことばが見つからず会話がとぎれそうになることがよくある。話し手は何とかことばを選び出し会話をつなぎ，話を続けていく。この行為は「会話」行動の観点に立てば，会話の中断を修復し，会話を続行させようとする行動である。この行動はたしかに母語話者どうしの場面でも起こりうるが，その場合はすでに有している語彙のうち，忘れた単語を自ら思い出すか，聞き手の助けを借りて思い出すのが多いと思われる。しかし，接触場面（ネウストプニー1995）で起こった場合，思い出そうにも該当する表現自体を知らず，思い出しようがない場合も含まれるのが特徴的であり，解決のために採られているいくつかのストラテジーが認められる。接触場面で会話がよどむ，すなわちコミュニケーションに障害が起こる原因の一つともなるこのような「訂正の過程」を考察し，どのように非母語話者がモニターにひっかかった問題を解決していくかを記述することも本章の目的の一つである。

論述に先立ち，本章で扱う「訂正」の定義をまず，明らかにしておきたい。Neustupý (1985) は談話能力には生成と訂正の２つの相があるとしており，「言語問題」を解決するための訂正の規則の集合の存在について論じている。そこでは訂正課程を逸脱の認知から訂正調整へといたる過程としている。小稿で扱う訂正もこれに準じ会話中にモニターにひっかかる flag 提示の段階をへて，話者が語彙を選びだすのを意識的に行なうこととする。そしてモニターに引っ掛かってから問題を解決し，もとの会話に修復するまでの過程を「訂正過程」と呼ぶことにする。

9.2 データ

本章で用いるデータは1994年度にミクロネシア連邦ヤップ州で採集した日本語談話資料である。まず，データの背景となる戦前の当地での日本語教育とインフォーマントの日本語について述べておく。

9.2.1 ヤップ公学校における戦前の日本語教育とヤップ州での日本語

日本は1914年にドイツより南洋群島を占領して以来，徐々に島の子どものための公学校を設置し，1945年まで5年課程の初等教育を行なった。ヤップにはニフ，マキ，ヤップの3校に3年課程の本科がおかれ，全児童が対象であった。3年課程を終わった段階で選抜を行ない，成績優秀者のみが中心部コロニーにあるヤップ公学校の2年課程補習科に進学した。公学校は「国語」を中心にしたカリキュラムが組まれ，ヤップでは日本人訓導が教えた内容をヤップ人の補助教員がヤップ語に訳すという形態の授業であった。補習科では日本語使用が強調されたが，インフォーマントたちの内省では在学中は単語を発っしたり教科書を何とか読むことはできても，伝達行為を行なうには至っていなかったという。補習科卒業後は，パラオに木工徒弟養成所に数人進学するが，ほとんどの者は燐鉱採取現場や飛行場建設現場，農業試験場，民間会社などにおいて日本人の上司のもとで仕事に従事しており，仕事場で上司と，あるいは他の島の人々との共通語として日本語を使用していた。ヤップ公学校卒業生の多くは仕事の場で日本語使用能力を習得したようである。仕事上第2言語として日本語を使用していたことになる。敗戦とともに日本人はヤップから引き揚げたが，その後日本人がいた地位にアメリカ人が就き，慰霊団や調査隊などの日本人が訪れ会話を交わすことはあるが，彼等の日本語に新たな影響を及ぼしている例はまれであり，彼等の日本語はほぼ完全に化石化している可能性が高い。本資料は非日本語母語話者による化石化した日本語資料として価値があると思われる。

9.2.2 インフォーマント

今回の分析に用いたデータは1994年夏に行なった延べ30人分の調査資料のうち，次の3人と筆者（J1）および共同調査者の崎山理国立民族学博物館教授（J2）との談話資料である。3人へのインタビュー調査は本人の居住宅にて行なった。以下，調査時の年齢，居住地，卒業校，卒業後敗戦時までの仕事，戦後の日本語との関わりの順で示す。

Y1：67歳／最南端 GILIMAN／ニフ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／飛行場建設に従事／ふりがなつき聖書を日本語で読み続けている，数年前にラジオのアンテナを

張り日本語放送をキャッチしている，パラオ人の友人にカタカナ日本語で手紙を時々だす

Ｙ２：67歳／中東部 TAMIL／マキ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／飛行場建設に従事／偶に来る日本人観光客とことばを交わす

Ｙ３：66歳／離島 ULITHI および中心街近郊 MADRIDGE／マキ公学校本科，ヤップ公学校補習科卒／南拓でのボーイ，飛行場建設に従事／筆者らと約50年ぶりに日本語を使う

9.3 訂正過程の記述

さて，本節では前節で述べた資料から，語彙不足が原因と考えられる訂正過程にしぼり，記述していきたい。

9.3.1 訂正過程の開始段階

訂正過程がはじまったときにはモニターへの引っ掛かりを示す flag の特徴が現れる。例えば，(1)の「あ」や(2)の「あの」，あるいは考える間が現れることによって訂正過程が始まったことが分かる。これらはモニターへの引っ掛かりによって訂正の必要を意識化している段階である。

(1) Ｙ３：…とうとうその自分の奥さんが死ん，でしまいました。
Ｊ２：そうですか。ここで。
Ｙ３：ええ，このヤップで。でそのあとマキ，学，公学校帰ったらもうそのあととてもおこりん坊で，もうひどい目にあ，あれ，わたしたちのときはぞうりで，(打つしぐさ) (1994/07/29)

(2) スペイン時代が，鉄砲が来た。その山にたくさんきろーい草があったんでしょ。あれは大砲のために，その，ヤップへ来た。箱の中から，あの，あの，大砲を，よその，スパニッシュの草，そして，みんな，あの，箱の中入れて，動かないようにこわらないように，そしてここで開けてその草がもう，みーんなヤップの，山にあった。昔はその草はない。 (1994/08/15Ｙ２)

9.3.2 訂正過程の中段階

上のような特徴で訂正の必要を意識した非母語話者は次に以下のような事中訂正（ネウストプニー前掲書）を始める言語行動を行なう。

（3）　a．発話停滞
　　b．発語中断
　　c．当面発語のキャンセル

(3a)は例えば，(1)における「あれ」のように言いよどむ場合である。(3b)は(5)の「採取された」と言うべきところを「さいしゅ」の途中で止めるような場合である。また，(3c)は(4)のように「食べる」と言ってから「食べるんじゃないんだよ」と前の発語をキャンセルしたり，「すう」と言いたかったところをいったん「すわる」と取り敢えず言って言い直してみるような場合である。(3a)(3b)(3c)のいずれを選ぶかは後述する学習者のタイプとも関係がある。すなわち，モニター監視が強すぎ，間違いを口にできにくいタイプから，話の流れを止めずに話し続けようとするタイプまで，訂正過程のこの段階で学習者のタイプが現れる。

（4）　Ｊ１：ビンロウジュ（註：嗜好品の BETEL NUT）って堅いですか。
　　Ｙ１：うんちょっと堅いね，（だ）から歯の痛い人には食べられないね。
　　Ｊ１：ああ
　　Ｙ１：食べるんじゃないんだよ。あのすわる，あの噛んで捨てるんだから。
　　Ｊ１：捨てる，え，でもみんな捨てるの見てたら，もうあのつばだけ(2)，
　　Ｙ１：うん，あのジュースね，あるやつは，このビンロウジュのままでは飲むんだけど，うん，で，タバコなら，う，いやだよ。
　　Ｊ１：ああ，
　　Ｙ１：あるやつは，ある人は食べるんだ，
　　Ｊ１：ええ
　　Ｙ１：飲むんだからね，タバコより，うん
　　Ｊ１：（笑い）

（5）　…この，（註：自分でかいた地図をさしながら）ここはね，ヤップはね，ヤップ島，ヤップはここです，ここでしょ。そしてこれ，ここが，さいしゅ，ここは燐鉱が採れた。あの，ドイチュの人が，と日本。…　(1994/08/15Ｙ２)

9.3.3　訂正過程の終結段階

Flag が現れ，事中訂正を始めると，次に解決・終結の方向へ話者は持っていこうとする。解決のストラテジーについては下のように分類できる。

（6）　a．単語再浮上

b．類義表現
c．説明的表現
d．文脈依存の語による代替
e．相手への説明要求（Ozaki 1989）
f．非言語手段選択
g．放棄

(6a)は本来欲しかった表現が戻り，スムーズに解決にいたる場合である。(7)では取り敢えず「ガバメント」と英語で代用し，その後「政府」という語を取り戻している。(8)は「非常時」に無事たどり着いている。コミュニケーション継続上の問題は小さいと思われる。

（7） Ｊ２：便利な世の中になったもんだ（笑い），昔はね
Ｙ１：なかったんだから
Ｊ２：たいへんだった
Ｙ１：世の中今変ってんですからね
Ｊ２：ほんと，日本時代，電話もちろんありましたでしょ
Ｙ１：いや，あの，ガバメントだけ，政府だけ。
Ｊ２：村にはなかった
Ｙ１：村にはなんにもなかった。今，パラオはもうよくなってんだよ。

（8） Ｊ２：あちらに８月のいつだったかな，行くっていってた。病院
Ｙ１：そうです。そう言って，レモンもって，私，あの，レモン，注文したんですからね。
Ｊ１：　　７日？
Ｙ１：パラオ持って行くのに。
Ｊ２：ああそう，レモン持って
Ｙ１：レモン持って行ってもら，パラオの人レモンないんだよ。
Ｊ２：ビンロウジュもないよ。
Ｙ１：おお？そうですか。パラオに？
Ｊ２：パラオ
Ｙ１：今，もう，何て言うかな，あれ，あの，非常時だな，パラオのビンロウジュは（笑い）

(6b)は当該の表現にいたらなくても，類義表現で代用する場合である。これは(6d)に比べ，類義性が認められる場合で，視点の変更などによる入れ替えの許容範囲内である場合である。

上の例では(9)(10)の「宗派に分かれて」の代わりに「ある教会で分けて」とするような場合である。

(9)　あの石貨はうちの石貨だよ。ぼくはユニフ（註：村の名）のこれ（註：親指を立てて長を示す）だから，みんな知ってんだよ，わたしの名前。ぼくはユニフの，一般の人はぼくの，ぼくが上だよ。だから，あの，大きい石貨，石貨あるだろ，…
(1994/08/18Y1)

(10)　J1：ヤップはモルモンの人たくさんいるんですか。
Y：あんまり，たくさんじゃないですよ。みんな，あの，ある教会で分けてるんですからね，あの，モルモン教会と，それからあのジェホバね，それからあの何て言うかな日本で，あの PROTESTANT,
J1：プロテスタント
Y：ああプロテスタントね，それからカトリック　(1994/08/01Y1)

(6c)は(2)の「緩衝材」を説明的に言ったり，(4)で「汁だけ吸う」を「噛んで捨てる」複合語化して言うことであり，複合語化して言うのは，限られた語彙を用いて表現する場合，該当する単語が使用語彙に無いので，採用される手段である。

(6d)「文脈依存の語による代替」は次のような例に現れる。

(11)　(石貨と老人が写っている古い写真を見ながら)
Y1：これはウルルの人じゃないかな。
J1：ああ，
Y1：この，なんだ，あの，話ありますか，この写真の話。
J1：はね，これだけなんです。これはね，これは石貨の話だけ
Y1：　　ああそう
J1：で大きいものが人間の背よりも高いとか
Y1：　　ああそうだね　(1994/08/01)

(11)では「説明文」を言いたかったが，該当する語がでてこないので「ことば」に関係のある「話」で代用している。この場合，「話」の外延を非母語話者が増やしているが，これも語彙数が少ないピジン化言語の特徴の1つと考えられよう。また，本調査中，「話」を「言語」の意味に使っている例も見られた。

(12)　J2：ングロールはグロール
Y1：ウルルと一緒です。話は，同じですから。いや，あの，ウギルの離島は違う

んだ。ウギルはヤップの話と違うんだよ。ちょっと，あの，サイパンにちょっと似ているね。話が。

Ｊ２：ユルシー？

Ｙ１：うん。ユルシー。　(1994/08/01)

このようにある語の外延を増やし，事実上多義化させることを「シンボル化」と呼ぶことにする。ここでの「シンボル」は本来的意味に加えて非本来的な意味を担わせ多義化させると言う意味合いで用いている。ここでは「話」を「ことば」のシンボルとして使用しているのである。ピジン化した言語では限られた語彙数で運用するため，シンボル化がおこりやすいと言えよう。(6ｅ)「相手への説明要求」は Ozaki (1989) で詳しく分析されているが，本資料では(10)の「何て言うかな日本で，あの PROTESTANT」のような例で現れた。但し，尋ね方にも２通り考えられる。すなわち，ここで英語を使うように第３の言語で尋ねる場合と，先述の説明的表現を使って説明要求する場合とが考えられる。(6ｆ)「非言語手段による伝達」は(１)で「殴る・打つ」が分からなく，打つジェスチャーで代用する場合である。代用語と言うことも可能だが，後述する言語運用能力との兼ね合いから，別々に分類した。最後の(6ｇ)「放棄」は(１)で「ひどいめに遭わされた」の後半を言語化せずに放棄し，次の発話へと続けていくストラテジーである。

9.4 考　　察

上で述べてきた訂正過程のストラテジーをもとに言語習得との関係から考察を加えてみたい。まず，学習者のタイプとの関係，次に談話運用能力との関係について考えてみる。

9.4.1 学習者のタイプとの関係

9.3節の中段階のところでも少し触れたが，上のどのパターンを取るかによって学習者のタイプを識別できると考えられる。開始段階での flag はタイプの別が現れないが，中段階ではモニターに掛かった後，言いよどむか，あるいは取り敢えず何か言ってみるかはモニターの働きの強さとも関係があるかもしれない。モニターが強く働きすぎると言いよどみがおこり，終結段階にいたらず失敗に終わってしまい，コミュニケーションの流れが途絶える最悪の道筋をふむことになる。一方，中段階で当面発語のキャンセルのストラテジーを取る人は終結段階で(6ｅ) 相手への説明要求も取り，よくしゃべる人という印象を与える。

9.4.2　言語習得段階との関係

訂正に問題が起こったときに会話をつなぐために，上のようなストラテジーが取られていたが，言語習得段階との関係で捉えると終結段階のストラテジーと言語習得段階に相関関係があると思われる。(6ａ)「再浮上」はもともとの語彙数や運用能力との関連が薄いと思われるが，(6ｂ)「類義表現」のためには語彙に広がりがないとならない。語彙に限界があると(6ｃ)の「説明的表現」ストラテジーが選ばれやすくなり，さらに(6ｄ)でみたような「シンボル化」して語を用いることになる。(6ｅ)は必ずしも語彙が少ないことを意味しない。比較的十分にある人の方がこの手段を取る場合が多いものである。また，(6ｆ)「非言語手段」のも語彙数が少ない場合もあるが，(6ｅ)同様，臨時手段として用いられることもある。本稿ではケーススタディ的に分析を行なっているので早急な一般化はできないが，終結段階のパターンと習得段階にはある程度の相関関係があるのではないかと推察される。

次に，非日本語母語話者が訂正にあたり，母語話者の発話を手本として用いる能力について見てみたい。つまり，自分の語彙にない新しい語が出てきたときに気を付けてそれを自分の使用語彙に取り入れる能力についてである。しかし，今回の資料には日本語が化石化していると思われる話者の資料なので母語話者からの語彙の取り入れは例えば次のように見られなかった。

(13)　（全身いれずみを施したヤップ人の古い写真を見，インフォーマントの腕のいれずみも話題にいれながら）

Ｊ１：これ

Ｙ１：いれずみだな

Ｊ１：ええ

Ｙ１：いれずみ

Ｊ１：これ<u>彫る</u>時痛かったですか

Ｙ１：おお，いやこっちはあんまりそう痛いじゃない，こっちは痛いだろうと思う。これはちょっと痛いんだけど，これよりまたすごいだろうと思ってる，ね，これは，からだ全部，<u>うつ</u>んだから

Ｊ１：そうですねえ

Ｙ１：はあはあ。うん。しかしね，ヤッ，こういういれずみの人は名高いです。有名な人ですね。

Ｊ１：ええ，たくさん，あの，いれずみがある人，

Ｙ１：はい。

Ｊ２：むかしの人ですね。

Ｙ１：はい，今でも，あすこほとんどやってないんだから，もう。も，どこもないし，やる人も知らないんだからね。これは，あの，やるときはやっぱり，かたちかいてからう，うつだろうと思ってる　(1994/08/01)

この例では「いれずみを彫る」という定型的表現が母語話者から提示されているにも拘らず，針を突き刺すことから「うつ」や動作一般を表せる「やる」をあくまでも使用し続けている。語彙体系が化石化を起こすと新しい語彙の取り入れは行なわれにくくなると考えられる。

9.5 む す び

以上，ミクロネシア連邦ヤップ州での調査資料より，ヤップ公学校卒業生の訂正過程における日本語談話能力について見てきた。その結果，インフォーマントの訂正過程として終結段階に７つのストラテジーが認められた。単語再浮上，類義表現，説明的表現，文脈依存の語による代替，相手への説明要求，非言語手段選択，放棄である。これにより，訂正過程がより詳しく明らかになったと思う。また，インフォーマントたちが談話を修復するために取るストラテジーと言語習得段階には相関関係があるのではないかと示唆された。語彙数の限界に対してはシンボル化や説明的表現を用いる傾向が強いと推察される。

最後にＳＬＡ研究と認知言語学について私見を述べ，稿を閉じようと思う。本章で述べた訂正過程は非日本語母語話者が，限りある語彙で対処するために取るメンタル・プロセッシングである。訂正過程は失敗するとコミュニケーションに支障をきたす可能性を含むプロセッシングである。非日本語母語話者が取る行動の抽象的な性格を調べることは，非日本語母語話者がコミュニケーションに支障をきたさないためにも，習得の問題を取り除くためにも必要だと思われる。また，言語の単純化などを調査していくことで，日本語母語話者が考える基本日本語と実際に用いられる単純化された日本語の違いが分かり，非日本語母語学習者にとってほんとうに必要な日本語のエッセンスが伝えられると思われる。それは語彙だけでなく，文法的要素も学習者はうまく捨象して運用しているので各レベルで調査すべきであろう。単純化日本語の特徴が分かれば，短期で日本語を習得する必要のある学習者にも情報を提供しやすくなると考えられる。このような意味からも，本章で述べた問題回避のための行動だけなく，非日本語母語話者の日本語そのものを調査することにより，非母語話者が必要とする基本日本語が見えてくると考えられる。非日本語母語話者は伝えたい内容はもっているにもかかわらず，伝えるための日本語の語数が限られている場合が多い。限られた語彙でどのように伝えるか，限られた語彙を運用するために現れる概念化にどのような特徴があるかを追究していくことがまず必要だと思われる。また，本節で示した非日本語母語話者が

文脈に依存させて語のシンボル化を行う例を，８章までに提示した意味分析により，厳密に分析していくことによりその特徴が明らかになっていくと思われる。本稿を閉じるにあたり，今後の課題として提示しておきたい。

注

（1）　本章は由井（1996ｄ）に加筆したものである。

（2）　ヤップでの最近のビンロウジュの喫し方はビンウジュの実を割り，石灰の粉をかけ，タバコを少し千切って加え，キンマの葉で包み，噛む。タバコを加えなければ，汁を飲み込むこともするが，タバコを加えている場合は，汁を吐き捨てながら噛む。

補　注

補注１　認知言語学におけるスキーマについて

近年盛んに議論されるようになってきたスキーマについての筆者の考えを述べておきたい。Lakoff (1987) のなかに…「linguists have suggested that schema 2 is the core meaning of the preposition **over**, that is, that schema 2 is present in all the uses of **over** as a preposition.…」という記述があり，この説じたいはあとで否定しているものの，schema is the meaning という考え方は否定されていない。レイコフは「スキーマが意味である」と考えているのだが，本論文で扱っている補助動詞用法を持つ日本語動詞の意味分析との関連を触れておきたい。

レイコフらの意味分析では，スキーマは主に一番際立つフィギュア (図) であるところのトラジェクターと，一番際立つグラウンド（地）であるランドマークによって説明している。日本語のやりもらい動詞でトラジェクターとランドマークによるスキーマを考えてみると，次のようになる。この場合，スキーマは与え手と受け手の間を物が移動する図式になるだろう。そして与え動詞であるヤルは「僕が君にテレカをやる」という会話場面において与え手である「僕」がトラジクター，受け手である「君」がランドマークになり，テレカが２者間を移動する。次に，受け動詞であるモラウは「僕は君にテレカをもらう」の場合，今度は受け手である「僕」がトラジェクターになり，与え手である「君」がランドマークになり，テレカが移動する。しかし，もう一つの与え動詞クレルを考えると「君が僕にテレカをくれる」においては，やはり受け手である「僕」がトラジェクターになり，与え手である「君」がランドマークになってしまう。日本語の与え動詞は受け手が自己側か否かで相補分布をしているが，トラジェクターとランドマークによるスキーマではクレルとモラウに同じスキーマが付与され，スキーマが意味であるということから考えると，語の意味を十分に記述しているとは言えなくなってしまう。

日本語教育学においてはやりもらい動詞だけでなく，アタエル・ヨコス・ワタス・ウケトル等，類義関係にある語の意味の違いを説明するのは重要な仕事の一つであり，記述レベルでも語義の違いを含められるような分析方法を必要とし，成分分析を援用してみた。

しかしながら，スキーマは「あるものや事象に関する過去の経験に基づく知識をより抽象化，構造化して１つのカプセルに納めたもので，人間の記憶もしくは知識というのはこの種のスキーマの集合体だ」(河上1996：40) とあるように，記憶の部分であるとすれば，逆に例えば，クレルとモラウが同じスキーマであるからこそ，子供や非日本語母語話者が習得するのが困難であるともいうことができる。さらに語の多義構造のネットワーク内で隣接する意味への拡張を説明するには大変有効な手段であると考える。

補注２　レイコフらによる中核的な意味と孤立系の意味

補注１にもあげた「…schema 2 is the core meaning of the preposition **over**…」の記述からすると中核的な意味はスキーマｘということになる。スキーマｘを規定するのは本稿でいうところの文脈である。なぜなら，上の例のスキーマ２の例文として「Hang the painting over the fire place」をあげているからである。本稿で取り上げている「孤立系の意味」は，over の例でいくと，「Hang the painting」も「the fire place」もない単語 over のみの意味，文脈の影響ゼロの意味であると設定している。この点からすると孤立系の意味と中核的な意味は別のものである。

しかしながら，本稿でいう孤立系の意味をほぼ保持したクラスターの意味がレイコフらのいう中核的意味にあたると考えられる。このクラスターの意味から他のクラスターの意味が派生されると考えられるからである。

孤立系の意味を設定したのは，本稿では取り上げることができなかった，文脈の影響がどのように単語の意味決定に関わるかを説明したかったのと，ある語の認識の原点として人称やテンスなどの干渉を受けない語の意味を設定することを必要としたことが主な理由である。さらに，これはまだ思案中であるが，意味の抽象化過程において意味の変容が著しいことがある。例えば，ヤルにおける「方向のクラスター」や「意志のクラスター」では本動詞から保持していた意味成分が突然抜け落ちる現象が現れる。また，クレルの「行為の影響クラスター」でも似たような現象が起きる。意味の抽象化過程を１つの連続体と考えるならば，(放射状に変容していくこともある)，この現象はいわば「相転移現象（水がゼロ度で固体になり，百度で気体になるような，ある条件のもとで大変容が起こる現象)」であるかのようであり，今後，人間の単語の意味認識の広がりが文脈からどのような干渉を受けるのかという方向からこの現象を明らかにしていきたいと思っている。このようなことから，「孤立系の意味」をいうシステムを設定している。本当に「孤立系の意味」が有効かどうかは，文脈と意味との影響関係を分析していくことにより，明らかになってくると思われる。今後の大きな課題である。

補注３　データについて

本論文第８章までに使われている例文は，実例，実例を整理し修正を加えた例だけではなく，作例も含まれている。実例を含めた例文の適格性の判断はあくまでも筆者の日本語体系の中で行なっているものである。本稿で扱った動詞は当然，方言差に着目したり，歴史的な考察による方法も可能であるが，筆者の母語体系の中に限った共時体系の中での記述・分析であることをお断りしておきたい。なお，筆者の言語形成地は７才８ヵ月までは埼玉県朝霞市の，他府県出身者が住民のほとんどである社宅，その後は兵庫県西宮市の一般的な住宅地である。また，両親はともに兵庫県出身である。

補注４

本論文は1996年３月に大阪大学大学院文学研究科に提出した課程博士申請論文に字句の修正を施したものである。審査の過程でお世話になった先生方，論文の各部分を発表したおりにコメントくださった皆様に心から感謝申し上げたい。まだまだ不十分な分析しかできていないところも多く，また，本稿をもとにさらに発展させていきたい現象もあるので，御批判いただければ幸いである。さいごに，本論文は既発表論文を修正のうえ，再録したものが多いことをお断りしたい。動詞の意味の抽象化過程の全体像をみるために取った措置である。

参　考　辞　書　類

『大辞林』松村明編（1988）三省堂
『学研国語大辞典　第2版』金田一春彦・池田弥三郎編（1988）学習研究社
『現代国語例解辞典』小学館
『角川類語新辞典』大野晋・浜西正人著（1981）角川書店
『広辞苑　第4版』新村出（1991）岩波書店
『日本語基本動詞用法辞典』小泉保・船城道雄他編（1989）大修館書店
『新装改訂新潮国語辞典』
『使い方の分かる類語例解辞典』小学館

参　考　文　献

阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五（1994）『人間の言語情報処理：言語理解の認知科学』サイエンス社
尼ヶ崎彰（1990）『ことばと身体』勁草書房
青木晴夫・岡本成子（1986）*Rules for Conversational Rituals*. 大修館書店
麻原三子雄（1943）「南洋群島に於ける國語教育」『国語文化講座　國語進出篇』朝日新聞社
浅野百合子（1981）『教師用日本語教育ハンドブック5　語彙』国際交流基金
Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman.（邦訳　中右実『意味と形』こびあん書房
Brugman, Claudia M. (1988) *The Syntax and Semantics of 'Have' and its Complements*. UMI Dissertation Services.
張麟声（1992）「「イク・クル」フォームに見る日本語の性格——中国語と比較して——」林四郎編『応用言語学講座第4巻　知と情意の言語学』明治書院
江田すみれ（1983）「「てやる・てくれる・てもらう」とタイ語の表現——hai の用法に注目して——」『日本語教育』49
Fillmore, Ch.J. (1971) *Santa Cruz Lectures on Deixis*. IU Linguistics Club.
フォコニエ・G.（1987）『メンタル・スペース』白水社
藤井正（1976(1966初出)）「「動詞＋ている」の意味」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
藤井由美（1992）「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学』5　むぎ書房
船山仲他（1992）「語彙概念構造と状況概念構造」『大阪府立大学紀要　人文・社会科学』40
Givõn, Talmy (1979) *On Understanding Grammar*. Academic Press.
橋田浩一・大津由紀雄・田窪行則・杉下守弘（1995）『岩波講座認知科学7　言語』岩波書店
Heine, Claudi et al. (1991) *Grammaticalization*. The University of Chicago Press.
平林幹郎（1993）『サピアの言語論』勁草書房
Hopper, P.J. and Traugott, E.C. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge UP.
堀口純子（1987）「「～テクレル」「～テモラウ」の互換性とムード的意味」『日本語学』4月号

堀口和吉（1984）「動詞「やる」の一考察――「行る」「演る」の誕生――」『山辺道』28
池上嘉彦（1975）『意味論』大修館書店
――――（1995）「言語の意味分析における＜イメージ・スキーマ＞」『日本語学』14-10
今仁生美（1990）「Vテクルと Vテイクについて」『日本語学』9-5
井上京子（1993）「ことばによる分類基準の文化的差異――文化人類学の視点から――」『月刊言語』22巻7号
――――（1996）「民俗分類と民俗語彙」『日本語学』15巻1号
Jackendoff, R. (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press.
――――（1997）"The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory", *Linguistic Inquiry*. 18
ジョンソン，マーク（1991）菅野盾樹・中村雅之訳『心のなかの身体』紀伊國屋書店
鎌田修（1983）「日本語の間接話法」『月刊言語』9月号
金子康朗（1995）「認知と言語」『日本語学』14-10
笠松郁子（1989）「「～してみる」を述語にする文」『教育国語』98
――――（1993）「「しておく」を述語にする文」言語学研究会編『ことばの科学』6　むぎ書房
Katz and Fodor (1963) "The Structure of a Semantic Theory". *Language* 39.
金田一春彦（1976(1955初出)）「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
金水敏（1989）「知識・主観の形式的取り扱い」『談話・意味・語用論』科学研究費「言語情報処理の高度化研究」成果報告
川上湊（1994）『海を渡った日本語』青土社
河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版
小泉保（1975）「日本語と英語における受給表現――やる・もらう考――(1)(2)」『英語教育』24-1, 2
――――（1991）「アスペクトと空間出入動詞」『日本語研究』12　東京都立大学
近藤泰弘（1985）「補助動詞「てゆく」「てくる」の用法――＜視点の補助動詞＞研究序説――」『日本女子大学紀要』34
――――（1986）「主観表現の体系」『国文目白』25
國廣哲彌（1982）『意味論の方法』大修館書店
――――（1989）「アスペクト辞「テイル」の機能」『東京大学言語学論集'87』東京大学文学部言語学研究室
――――（1989）「意味と用法」『講座日本語と日本語教育6　日本語の語彙・意味（上）』明治書院
――――（1994）「認知的多義論――現象素の提唱――」『言語研究』106　日本言語学会
――――（1995）「言語の認知的側面」『日本語学』14-10
久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.（邦訳　渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳（1986）『レトリックと人生』大修館書店）
Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.（邦訳　池上嘉彦・河上誓作他訳

(1993)『認知意味論——言語から見た人間の心——』紀伊國屋書店)
——— (1993) "The Syntax of Metaphorical Semantic Roles". J. Pustejovsky (ed.), *Semantics and the Lexicon*. Kluwer Academic Publishers.
Lakoff, Robin (1974) "Remarks on *This* and *That*". CLS 10.
Lagnacker (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Stanford Univeristy Press.
Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
リーチ，ジェフリー (1977) 安藤貞雄監訳『現代意味論』研究社出版
Lyons, John (1977) *Semantics*, 2. Cambridge University Press.
前田富祺 (1993)「国語意味論研究の一視点——メタ言語との関わりから——」『国語学』175
Masuoka, Takashi (1981) "Semantics of the Benefactive Constructions in Japanese". *Descriptive and Applied Linguistics*, 14.
益岡隆志 (1991)「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
松下大三郎 (1930(1974復刻))『改撰標準日本文法』勉誠社
松本曜 (1993)「認知言語学と語用論——抽象的変化表現をめぐって——」『月刊言語』22巻7号
McCarthy, Michael (1992) *Discourse Analysis for Language Teachers*.
Cambridge University Press. (邦訳　安藤貞雄・加藤克美(1995)『語学教師のための談話分析』大修館書店)
南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店
——— (1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
宮地裕 (1965)「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63　国語学会
宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
——— (1994)『語彙論研究』むぎ書房
宮脇弘幸 (1995)「旧南洋群島における日本化教育の構造と実態及び残存形態」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』4
森田良行 (1968)「「行く・来る」の用法」『国語学』75
——— (1977 『基礎日本語』1　角川書店
森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
McMahon, A.M.S. (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge UP.
長野ゆり (1994)「「～てみる」の用法の一側面——命令形・条件表現をとる「～てみる」の用法について」『現代日本語研究』1
中右実 (1994)『認知意味論の原理』大修館書店
中村明 (1990)「比喩と発想法」玉村文郎編『講座日本語と日本語教育7　日本語の語彙・意味(下)』明治書院
中村捷 (1983)「解釈意味論」安井稔他『英語学体系5　意味論』大修館書店
南洋群島教育会編 (1938(1982復刻))『南洋群島教育史』青史社
成田徹男 (1981)「空間的移動を意味する「～てくる・～ていく」」『人文学報』146　東京都立大学人文学部
Nehls, Dietrich (ed.) (1987) *Interlanguage Studies*. Julius Groos Verlag.
Neustupný, J.V. (1985) *Post-Structural Approaches to Language*. University of Tokyo Press.
ネウストプニー・イルジー・V. (1995)『あたらしい日本語教育のために』大修館書店

Nida, Eugene (1975) *Componential Analysis of Meaning*. Mouton. (邦訳『意味の構造——成分分析』升川潔・沢登春仁訳　研究者出版)
西村芳樹 (1989)「意味と文法——Cognitive Grammar の展開(1)」『実践英文学』35
仁田義雄 (1982)「動詞の意味と構文——テンス・アスペクトをめぐって——」『日本語学』11月号 (1-1)
——— (1991)「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
——— (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
Norvig, P. and G. Lakoff (1987) "Taking: A Study in Lexical Network Theory". *BLS* 13.
大江三郎 (1975)『日英語の比較研究——主観性をめぐって——』南雲堂
——— (1977)「コンテクストと文法(5)(6)」『英語青年』123(3)(4)　研究社
大堀俊夫 (1991)「文法構造の類像性」『記号学研究』11
奥津敬一郎 (1979)「日本語の授受動詞構文——英語・朝鮮語と比較して——」『人文学報』132
——— (1982)「「～てもらう」とそれに対応する中国語表現——"請"を中心に——」『日本語教育』46
——— (1983)「授受表現の対照研究——日・朝・中・英の比較——」『日本語学』2巻4号
Ono, Tsuyoshi (1992) "The grammaticization of the Japanese verbs oku and shimau. *Cognitive Linguistics* Vol. 3-4.
大津由紀雄編 (1995)『認知心理学3　言語』東京大学出版社
ペン，ジュリア (1980) 有馬道子訳『言語の相対性について』大修館書店
リーチ，ジェフリー (1977) 安藤貞雄監訳『現代意味論』研究社出版
崎山理 (1995)「ミクロネシア・ベラウのピジン化日本語」『思想の科学』3月号
佐久間鼎 (1966(1983復刊))『現代日本語の表現と語法≪増補版≫』くろしお出版
サピア，エドワード (1957) 泉井久之助訳『言語』紀伊國屋書店
關口泰 (1943)「東亜共榮圏に於ける日本語」『國語文化講座　國語進出篇』朝日新聞社
渋谷勝己 (1995)「多くの借用語と高い日本語能力を保ち続ける人々」『月刊日本語』2月号
柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎他 (1979)『ことばの意味2辞書に書いてないこと』平凡社
Shibatani, Masayoshi (1985) "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis". Language 6-4.
杉本武 (1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』4　九州工業大学
鈴木重幸 (1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
——— (1976(1957初出))「日本語動詞のすがた(アスペクト)について——～スルの形と～シテイルの形——」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
Sweetser, Eve (1988) "Grammaticalization and Semantic Bleaching". *BLS* 14.
高橋太郎 (1976(1969初出))「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
——— (1994)『動詞の研究　動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
玉村文郎 (1985)『日本語教育指導参考書13　語彙の研究と教育(下)』国立国語研究所
田中茂範 (1990)『認知意味論　英語動詞の多義の構造』三友社

Taylor, John R. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.

寺村秀夫 (1977)「態の表現と「適切さ」の条件」『日本語教育』33

――― (1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版

豊田豊子 (1974)「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1　東京外国語大学

豊田由貴夫 (1996)「文脈依存型の言語――ピジン語を例にして――」『日本語学』15巻1号

Traugott, Elizabeth C. (1986) From polysemy to internal semantic reconstruction. *BLS* 12.

――― (1988) "Pragmatic strengthening and grammaticalization." *BLS* 14.

――― (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language*, 65-1.

Traugott, Elizabeth C. and B. Heine (eds.) (1991) *Approaches to Grammaticalization, Vol.* 1. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

坪井栄治郎・西村義樹 (1991)「認知意味論と概念意味論」『実践英文学』39

鷲田清一 (1992)「＜ある＞と＜もつ＞「所有」という観念についての試論(1)」『待兼山論叢　哲学篇』26

Whorf, Benjamin Lee (1956) *Language, Thought and Reality*. The MIT Press.

Wierzbicka, Anna (1992) Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations. Oxford University Press.

山梨正明 (1988)『比喩と理解』東京大学出版会

――― (1995)『認知文法論』ひつじ書房

――― (1995)「認知文法論のパースペクティヴ」『日本語学』14-10

安井稔・中右実・西山佑司・中村捷・山梨正明 (1983)『英語学体系5　意味論』大修館書店

楊凱栄 (1989)『日本語研究叢書3　日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』くろしお出版

吉田集而 (1984)「エティックとイーミック」和田祐一・崎山理編『現代の人類学3　言語人類学』至文堂

吉川武時 (1976(1971初出))「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

――― (1975)「「～てみる」の意味とそれの実現する条件」『日本語学校論集』2

米盛裕二 (1981)『パースの記号学』勁草書房

由井紀久子 (1989)「受給動詞の意味と機能」修士論文（大阪外国語大学大学院）

――― (1990a)「受給動詞の意味」『STUDIUM』17　大阪外国語大学大学院研究室

――― (1990b)「受給動詞の運用――オマエニクレテヤル・(サ)セテモラウについて――」『日本学報』9　大阪大学文学部日本学科

――― (1993)「モラウの意味的抽象化・希薄化の過程」『阪大日本語研究』5

――― (1995a)「動詞オクの意味の抽象化過程」『阪大日本語研究』7

――― (1995b)「シテクダサイとシテモライタイとシテホシイ――依頼を表す用法――」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版

――― (1996a)「動詞シマウの意味の抽象化過程」上田功・砂川有里子・高見健一・野田尚史・蓮沼昭子編『言語探究の領域　小泉保博士古稀記念論集』大学書林

――――（1996ｂ）「日本語動詞の意味の抽象化過程――イク・クル・ミルの意味分析を中心に――」『大阪大学文学部紀要』36
――――（1996ｃ）「動詞ヤル・クレルにおける意味の抽象化過程」『日本語教育』88
――――（1996ｄ）「旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力――訂正過程についての――考察－」『阪大日本語研究』8

SUMMARY

A Study of the Process of Abstraction of Japanese Verbs
——Analyses of Meanings of Verbs Possessing Auxiliary Usages——

Kikuko YUI

This paper aims at a study of conceptualization of Japanese verbs which possess auxiliary verbs usage with a view of integrated analysis of meaning of main usage and auxiliary usage of these verbs.

Some Japanese verbs possess auxiliary usage represented by *-teyaru*, *-tekureru*, *-temorau*, *-teiku*, *-tekuru*, *-teiru*, *-tearu*, *-teoku*, *-teshimau* and *-temiru*. Auxiliary usages still remain vestiges of main verb meanings, which are recognized to be basic. However, they behave more grammmatically and are called to have more abstract meanings. This paper reveals the processes of semantic abstraction and transfigurations of meaning components.

Introduction states a significance of this study. From the point of view of Teaching Japanese as a Second Language conceptualization is one of the problematic matters which bring forth errors, when non-native Japanese learn Japanese language. From another viewpoint of semantic study it is an interesting point to reveal the inner structures of verb meanings. Etic basestudy would be more useful to integrate these two view points. Chapter one examines methods of analyses of preceding studies and adopts Jackendoff's conceptual semantics as contrasting material to make a standingpoint of this paper clear. In analyzing the process of abstraction position modes give rise to difficulty of description of transfigurations of meanings. Chapter two proposes a method of analysis, component transfiguration analysis which designates the meanings of main verbs independent of the context as the basic meaning and abstraction meanings as composition of some components are missed.

From chapters three to chapter seven this paper deals the meanings of each verb: *-teyaru*, *-tekureru*, *-temorau*, *-teiku*, *-tekuru*, *-teiru*, *-tearu*, *-teoku*, *-teshimau* and *-temiru*. Each verb is established the isolated meanings that are defined as those which recognized to be words, that is to be depending on the context, and they are assumed to have such semantic components as ⟨Source⟩, ⟨Goal⟩, ⟨Movement⟩, ⟨Path⟩ and so on. These

chapters describe the process of abstraction by component transfiguration analysis: each component shows that concrete items like space and human are transfigured to conceptual items or null.

Chapter eight reexamines en masse the meanings of these verbs, brings the features of meaning abstraction and describes relevance to general abstract. The last chapter suggests the application of this study to second language studies. As an example adding to extension of words by non-native Japanese is introduces. This strategy happens when they encounter the problem to express what they want to say by their limited vocabulary.